

立命館守山中学校・高等学校
あすなろ —立命館守山20年の歩み—

20th
ANNIVERSARY | Ritsumeikan
Moriyama
Junior &
Senior High School
2006 » 2026

C O N T E N T S

- 4 ご挨拶
- 6 学園関係者より祝辞
- 8 お祝いのメッセージ
- 12 歴代校長より
- 18 立命館守山中学校・高等学校の歴史
- 立命館守山の歩み
- 20 1. 草創期 (2006年～)
- 34 2. 変革期Ⅰ (2010年～)
- 50 3. 変革期Ⅱ (2020年～)
- 64 4. 飛翔期 (2030年～)
- 66 20周年記念座談会
 「今を生きる立守生、輝く未来へ」
- 76 活躍する卒業生からのメッセージ
- 79 編集後記



ご挨拶



あすなろの学び舎、 20年の実りとこれから

立命館守山中学校・高等学校 校長

Naruhisa Iwasaki

岩崎 成寿

このたび、立命館守山中学校・高等学校創立20周年記念誌の刊行にあたり、学校を代表して一言で挨拶申し上げます。

2006年4月、守山市立守山女子高等学校からの公私移管という、日本でも類を見ない挑戦のもとに開校した立命館守山高等学校は、翌2007年に中学校を開設し、中高一貫校として新たな歴史を歩み始めました。あれから20年、本校は建学の精神である「自由と清新」、教育理念である「平和と民主主義」を礎に、地域の皆さまに支えられながら、着実にその歩みを重ねてまいりました。

開校当初、右も左もわからぬ中で新しい学校づくりに情熱を注いでくださった教職員の皆様、そして本校の理念に共感し、大切なお子さまを託してくださった保護者の皆さま、あたたかく見守り支えてくださった守山市をはじめとする地域の皆さまがいらっしゃったからこそ、今日の立命館守山があります。開校から数えて数千名にのぼる卒業生を大学・社会に送り出すことができたのも、皆さまの日々のお力添えの賜物です。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

本校は開校以来、「あすなろ」という言葉に象徴されるように、まだ檜にはなれずとも、明日こそはという志を胸に、一步ずつ着実に成長を重ねてまいりました。黎明期に種をまき、成長期に幹を太くし、発展期に枝葉を広げてきたその歩みは、探究学習やグローバル・サイエンス教育、コロナ禍にあっても学びを止めなかったICTの

実践、全国をめざす課外活動、そして生徒自身が主体となって校則を見直すルールメイキングの取り組みに至るまで、多岐にわたります。常に「生徒の可能性を信じ、伸ばす」という一貫した姿勢を貫いてきたことこそ、本校の最大の財産であると自負しています。感染症の流行下にあっても学びを止めず、身近な困りごとから発想した消毒液スタンドを開発し地域の施設に届けた生徒たちの姿は、その象徴と言えるでしょう。この20周年記念誌には、開校から今日に至るまでの歩みとともに、そこに関わってこられた数多くの方々の思いと記憶を収めました。ぜひ多くの皆さまに手に取っていただき、立命館守山の20年をともに振り返っていただければ幸いです。

節目を迎えた今、私たちは過去を振り返るだけでなく、次の10年、20年に向けた新たな挑戦にも踏み出しています。教室と廊下の境界をなくしたラーニングコモンズの整備をはじめとする学びの環境の刷新、そして「学びの社会実装化」を通じてソーシャル・アントレプレナーシップを育む教育改革など、未来を担う生徒たちが世界に希望の火を灯すGame Changerへと育っていくための土壌を、これからも耕し続けてまいります。

結びに、この20年間、立命館守山を支え、育ててくださったすべての皆さまに深く感謝申し上げるとともに、変わらぬご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



第1代 立命館守山高等学校 生徒会長へ

Hiroki Hosooka

細岡 大起

立命館守山高等学校
第20代 生徒会長

拝啓

貴方はどのような思いで、この学校の最初の一步を踏み出したのでしょうか。

20年前、「立命館守山」という新たな歴史が始まる渦中で、何を守り、何を変えようと葛藤したのでしょうか。すでにある学校から新たな学校を創り出す責任の中で貴方が掲げた志は、20年という年月を経て、確かに今の私たちの足元を支える土台となっています。

第20代生徒会長となった私も今、歴史の1ページに名を連ね、不満の解決だけではなく、ルールメイキングや組織改革、新しい議決制度など、次の20年を見据えた挑戦と新たな文化を伝統の中に重ねていきます。

……と、格好のいい言葉を並べ立てておきながら、手が止まります。同じ立場だからこそ、貴方にだけは、胸の奥の弱音を打ち明けさせ

てください。正直に言えば、自分の進める改革が本当に正しいのか、分からないのです。暗闇の中を手探りで進むような、胸内を占める不安と恐怖。もしかしたら20年前の貴方も、同じように震えていたのでしょうか。

ですが、どれほど迷い恐れようとも、歩みを止めなかった貴方の一歩があったからこそ、今の20周年が存在します。

20年後の立命館守山がどうなっているか、見当もつきません。けれどきっと、第40代生徒会長もまた、同じように悩み、もがきながらも必ず、歩み続けてくれるはずです。貴方が苦しみながらも踏み出した一歩が、私たちの礎となり、この学校を構成し続ける限り。

受け継がれる伝統と共に新しく創り出す未来は、0年目も、20年目もこれからも、私たちの歩みの中にあるはずです。

敬具



20年の想いを、次の一步へ 20 Years, One Step Forward.

Rina Sasaki

佐々木 梨那

立命館守山中学校
第18代 生徒会長

立命館守山中学校・高等学校は、今年で開校20周年という大きな節目を迎えます。私は、20年間という時の流れの中で、たくさんの生徒や先生方の思いが積み重なり、今の立命館守山が築かれてきたのだと感じています。その節目の年に第18代中学生徒会長を務めていることを、大変光栄に思います。

私が「20年」の積み重ねを実感したのは、生徒会本部の活動を通してでした。生徒会では、行事を運営する際に、前年度の資料や記録を参考にしながら準備を進めています。初めは「昨年度のを参考にする」という、当たり前の作業だと思っていました。しかし、資料を整理する中で、何年前の資料に目を通す機会がありました。そこには、現在のものとは少し形が異なる、行事に関する資料が残されていました。ほんの些細なことではありますが、普段行っている活動にも、先輩方から受け継がれてきた歴史があることに気づきました。

私は第18代中学生徒会長として、これまでの生徒会長や先輩方が築いてきたものを受け継いでいます。私たちが今、当たり前のように行っている活動も、最初から今の形だったわけではありません。先輩方が試行錯誤を重ね、より良い形を目指してきたからこそ、今の生徒会があります。だからこそ、私たち第18代も、受け継いできたものを大切にしながら、次の世代へつないでいきたいと考えています。

そして今年度、生徒会スローガンとして「-Break the norm-」を掲げました。これは、これまでの歴史を大切にしながらも、常識にとらわれず、新しいことに挑戦し、今までの自分たちを超えていこうという思いを込めた言葉です。20周年という節目を、これまでの歩みを振り返るだけでなく、次の時代をつくる一歩にしたいと思います。



公私連携のパイオニアから、次代を拓く挑戦へ

Tomomi Morishima

森島 朋三

学校法人立命館 理事長

立命館守山中学校・高等学校が開校20周年の佳節を迎えられましたこと心よりお慶び申し上げます。

2006年4月、守山市より公私連携による移管を経て、守山市立守山女子高等学校から立命館守山高等学校として新たな一步を踏み出して、はや20年の歳月が流れました。翌、2007年には中学校を開校し、中高一貫教育の体制を整えて以来、滋賀県の地に根をおろしながら着実に歩みを重ねてこられました。この間、生徒の主体性を育む探究学習や国際教育、そして地域社会と手を携えた数々の取り組みを通じて、滋賀県内屈指の中学校・高等学校としての評価を確立するとともに、建学の精神「自由と清新」、教学理念「平和と民主主義」を体現する学校として大きく発展を遂げてこられました。近年では、ロボカップジュニア世界大会の優勝をはじめ、生徒たちが世界の様々な舞台で存分に力を発揮している姿は私たちの大きな誇りです。

思い起こせば、公立学校から私立学校への移管という試みは、当時の日本において前例のない挑戦でした。守山市をはじめとする地域の皆さま、そして開校当初からこの地に集ってくださった教職員や生徒、保護者の皆さまが幾多の困難を乗り越えながら築き上げてこられたからこそ、今日の立命館守山があります。改めて、これまでご尽力いただいたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。開校以来、着実に志願者数を伸ばし、滋賀県内外から数多くの生徒を迎えるに至ったことも、地域の皆さまが本校の教育に寄せてくださった信頼の証にほかなりません。

現在、立命館学園は2大学・4中学高校・1小学校からなる総合学園として、約5万人の学生・生徒・児童が学んでいます。しかし、少子化をはじめ、私たちを取り巻く環境は今後ますます厳しさを増していくことでしょう。そうした時代であるからこそ、中等教育を担う附属校の果たす役割は一層重みを増しています。立命館守山は開校の経緯そのものが物語るように、既存の枠組みにとらわれず新しい価値を創造する精神を宿した学校です。この精神こそが、これからの立命館守山を、そして立命館学園全体を次の時代へと導く原動力になると確信しています。生徒たちが自ら課題を見つけ、社会と向き合いながら答えを導き出していく力を育む教育は、まさに時代が求める人材育成のかたちだと言えるでしょう。

立命館は西園寺公望を学祖とし、1869年に私塾「立命館」として誕生してから創始156年、中川小十郎による学園創立から126年の歴史を刻んでまいりました。この長い歴史の中で積み重ねてきた総合学園としての力を最大限に生かし、学園ビジョンR2030「挑戦をもっと自由に」のもと、立命館守山がこれまで培ってきた地域との絆と開拓者精神を礎に、世界に羽ばたく人材を数多く輩出していかれることを大いに期待しております。

結びに、この20年の節目にあたり、これまで本校を支えてくださったすべての皆さまに重ねて御礼申し上げるとともに、立命館守山中学校・高等学校のさらなる発展を祈念し、お祝いのご挨拶とさせていただきます。



一貫教育の環の中で、守山から世界へ

Yoshio Nakatani

仲谷 善雄

学校法人立命館 総長

立命館守山中学校・高等学校が開校20周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

2006年の開校以来、滋賀県内唯一の公私連携による中高一貫校として、地域に根ざしながら独自の教育を展開してこられました。探究学習や国際教育、STEAM教育をはじめとする先進的な取り組みを通じて、多くの卒業生を立命館大学や立命館アジア太平洋大学をはじめ、難関国公立大学や海外大学等、多様な進路へと羽ばたかせてこられました。その一人ひとりに共通するのは、自ら課題を見だし、他者と協働しながら解決へと導く力です。これは、立命館守山という充実した学びの環境の中で培われた「生きた学び」の何よりの成果であり、ご指導にあられた教職員の皆さま、支えてこられた保護者・地域の皆さまに深く敬意と感謝を申し上げます。開校から今日までに立命館守山を巣立った卒業生たちが、大学や社会のさまざまな場でリーダーシップを発揮している姿を耳にするたび、大変頼もしく思っています。

近年、1号館の改修に取り組み、教室と廊下の境界を取り払ったラーニングコモンズを整備されたことも、大変印象深く伺っています。生徒一人ひとりが学びの場を自ら選び取ることのできる空間づくりは、まさに「与えられる学び」から「つかみ取る学び」への転換であり、総合学園立命館が掲げる教育理念を象徴する取り組みだと受け止めています。

総合学園である立命館の強みは、小学校から大学院までを貫く一貫教育を通じて、多様な人材の成長に寄り添うこと

ができることにあります。立命館学園では、学園ビジョンR2030「挑戦をもっと自由に」を掲げ、次世代研究大学・次世代探究学園の実現をめざし、附属校と大学が一体となって新たな価値創造に挑んでいます。立命館守山は、その開校の経緯そのものが既存の枠組みを越える挑戦であったように、「Game Changer」を育む学校として、この一貫教育の環をさらに力強く広げていく存在であってほしいと願っています。知的好奇心に基づき主体的に学び続ける力を育むこと、探究学力とデジタル技術を掛け合わせて学びを高度化するとともに社会に実装すること、正課外においても自主的な挑戦を後押しすること——これらはいずれも、立命館学園全体が力を合わせて取り組むべき課題でもあります。

とりわけ、生成AIをはじめとする技術革新が加速し、社会のあり方そのものが大きく変わろうとしている今こそ、正解を見出すことが難しい問いに自ら向き合い、仲間とともに創発的で革新的な答えを創り出していく経験が欠かせません。立命館守山の生徒諸君には、この20年で培われた探究の精神を礎に、大学進学後も学びを止めることなく、それぞれの分野で社会に新たな価値をもたらす存在へと成長してくれることを期待しています。

結びに、これまで立命館守山の礎を築いてこられたすべての皆さまに深く敬意を表するとともに、次の10年、20年に向けてさらなる飛躍を遂げられることを祈念し、お祝いのご挨拶といたします。



Takafumi Morinaka

森中 高史

守山市長

Game Changerになろう！ 皆さんの挑戦を応援しています！

立命館守山中学校・高等学校開校20周年を、心よりお祝い申し上げます。

また、教職員の皆さまをはじめ、生徒ならびに卒業生や保護者の皆さま、そして関係者の皆さまの不断のご努力に対し、深い敬意を表します。

貴校は、2006年に守山市立守山女子高等学校から学校法人立命館に移管する形で、立命館四番目の付属学校として新たな歩みを始められました。私立校としての独自の教育理念に基づく教育に加え、本市との連携による地域課題解決への取組による地域貢献により、本市の教育環境の充実に貢献いただくなど、今日までの貴校の発展と地域貢献に対し、市長として感謝申し上げます。

開校当初から文部科学省スーパーサイエンスハイスクールに指定されるとともに、「自由と清新」の建学の精神のもと、時代に貢献できる人の育成に邁進してこられました。

特に注目すべきは、貴校が地域社会との連携を重視し、中学課程から高校課程まで一貫して探求を重視した学びを行っている点です。例えば、Sci-Tech部による大川活用プロジェクトでは、本市を流れる大川において、地域自治会との協働により、生徒たちが水質調査分析や浄化実験を行い、その成果を学外のフォーラムで発表してくれました。もりやまキャリアチャレンジでは、多くの生徒たちが参加し、ピッチで起業プランを発表してくれました。生徒が自ら社会課題を見つけ、それを解決するために主体的に地域とともに行動し、具体的なアクションを起こしていく。これこそが貴校が教育目的に掲げる「Game Changerの育成」に必要とされることだと思います。

20年という節目を迎えられた今、貴校の卒業生たちは、

国内外の様々な分野でまさに「Game Changer」にならんと活躍されています。彼らの活躍は、貴校の教職員の皆様の日々のご尽力と、「自由」と「清新」の精神に基づいた学びがあったからこそです。

現在、社会は急速に変化しています。グローバル化、デジタル化、そして気候変動への対応など、次世代が直面する課題は多岐にわたります。こうした時代だからこそ、知的好奇心、創造性やチャレンジ精神、そして地域社会への貢献意識は、ますます重要性を増していくでしょう。

本市では、2025年度に策定した「守山市長期ビジョン2035」において、「私の『想い』がかなうまち ～守るために攻める サステナブルなまちを目指して～」を将来都市像としています。まちをつくる主人公は『人』です。一人ひとりが夢やかなえたい『想い』を持つことができるような、また、その『想い』の実現に向けた挑戦をみんなで認め、支え合うことのできるようなまちづくりに取り組みたいと考えています。

このことは、「既存の枠組み（常識）に囚われることなく、自由な発想により枠組みそのものを見直し、物事の局面を変える人」＝「Game Changer」の育成を教育目的とする貴校の取組みと通ずるものがあると感じています。

これからも、魅力あるまち「守山」が、「守山に住んでいて良かった」、「また守山に戻ってきたい」と実感できるサステナブルなまちとなるよう、そして、私の『想い』がかなう、未来の守山市を共に創り上げていきましょう。

結びに、立命館守山中学校・高等学校の開校20周年が、さらなる飛躍の年となりますよう、また、次なる20年がより一層の成長と発展に満ちたものとなりますよう心より祈念申し上げます。



Masahito Yamamoto

山本 昌仁

立命館守山中学校・高等学校教育振興会 会長

子どもは地域の宝 ともに支えはぐくむ未来

このたび立命館守山が開校20周年を迎えられましたことを謹んでお慶び申し上げます。自由と清新を建学の精神に掲げ、多様な生徒とともに歩まれる日々が節目を経てさらなる発展を遂げられますことをこころより願っております。

立命館守山中学校・高等学校教育振興会は生徒の教育や研究、文化やスポーツなどの活動支援、施設の充実といった多角的なサポートを行う組織です。ご縁をいただき2015年から会長を務めさせていただいておりますが、ここ10年を振り返りましても自然環境や社会など身の周りの変化の大きさを感じます。これまでの当たり前が根底から揺らぐような経験もありました。今なお複雑な社会情勢のなか生徒が穏やかに学校生活を送れるようご尽力くださいます保護者の方々、学校関係者の皆さまに敬意を表しますとともに、その一助となれるよう教育振興会としても社会的な支援を続けてまいります。

子どもは地域の宝です。皆が健やかに成長するのはもちろんのこと一人ひとりの個性や能力を存分に活かしてほしいと願っています。その子にしかないものを引き出し、伸ばしていく、その役割を担うのは保護者や学校です。豊かな土が種をはぐくむように地域を含め子どもを支えていく環境も必要でしょう。家庭をはじめ学校や地域で過ごす日常こそが彼らを形づくるのですから。

学校生活の得難さは当事者には自覚しにくいもの。社会に出てはじめて実感がわいてきます。級友とのひととき、打ち込むものとの出会い、瑞々しい感性だからこそその戸惑いや悩みもかけがえのないもの。様々なものを抱える生徒

に対して“大人”ができるのは真摯に向きあうことです。相手の立場に立ちその視点を理解すること。対話をし、寄り添うこと。ときにはじっと見守ることも必要でしょう。学校という空間で今を生きる生徒たちに、かつて私たちがいただいた恩を返せたらとも考えています。生徒それぞれの個性が伸び伸びと育ち、学校で得た経験が彼らの人生で芽吹き花開くことを一足早く社会に出た先輩として願っています。

20年前に比べ、目にする情報は格段に増えました。効率を重視し、結果の速さを求める風潮も強くなっています。素早い判断が求められる場面も確かにありますが生徒の皆さんには積み重ねることの大切さに今一度目を向けてほしい。何かを学び、自分の身につけるためにはコツコツと経験することが一番の近道です。一足飛びに得られるものではありません。食べたものが血肉となるように、日々の積み重ねが“これから”を創ります。焦ることなくひたむきに。これだけは技術がいくら進歩しても変わらないものです。日々学び、様々な挑戦を続ける一人ひとりに私から送るエールです。今しかできないことにどうか全力で取り組んでください。

立命館守山がふるさと近江に根を張り20年。これからも地域とつながりより豊かに、大樹のように枝葉を伸ばされていくことを期しております。新たな価値や希望を生み出す若者の育成に努められる立命館守山の皆さまの益々のご隆盛を記念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



20年の歩みを、 未来の力へ

Toshihiro Nakajima

中島 智宏

立命館守山中学校・高等学校 PTA 会長

立命館守山中学校・高等学校が創立20周年という大きな節目を迎えられましたことを、PTAを代表し、心よりお祝い申し上げます。

20年という歩みの中には、多くの挑戦と成長、そして数え切れない出会いがあったことと思います。今日の立命館守山があるのは、学校を支え続けてこられた教職員の皆さま、地域の皆さま、保護者の皆さま、そして卒業生・在校生一人ひとりの想いと努力の積み重ねによるものだと感じています。

私たち保護者は、子どもたちがこの立命館守山で学び、仲間と出会い、さまざまな経験を重ねながら成長していく姿を、日々間近で見守っています。

勉強に励む姿。仲間と笑い合う姿。行事やクラブ活動に本気で取り組む姿。時には悩み、迷いながらも、自分自身と向き合い、一歩ずつ前へ進もうとする姿。

その一つひとつの姿に、私たち保護者も多くの勇気と希望をいただいています。子どもたちが安心して学び、挑戦し、自分らしく成長していける環境があることは、私たち保護者にとって何より大きな喜びです。立命館守山で出会う仲間や先生方とのつながりは、子どもたちの人生にとってかけがえない財産になっていくことと思います。

PTA会長として学校に関わらせていただく中で、私はこの学校の大きな魅力は、「人の力」にあると感じています。

仲間を励ます力、挑戦する力、誰かを思いやる力、そして自分の未来を信じて前へ進む力。立命館守山には、そうした“人を前向きにする力”が、学校全体に息づいています。

本年度、創立20周年という特別な年を迎えるにあたり、

PTAでは、「STEP INTO POWER ～20年の歩みを、未来の力へ～」をスローガンに掲げました。この言葉には、これまで積み重ねてきた20年の歴史を大切に受け継ぎながら、その想いを未来へつなげていきたいという願いを込めています。

大切なのは、“完璧であること”ではなく、“一歩踏み出すこと”です。その小さな一歩が、自信となり、仲間との絆となり、やがて大きな力へと変わっていくのだと思います。

20年前、この学校の未来を信じ、最初の一步を踏み出された方々の想いは、今、確かに子どもたちへ受け継がれています。そしてこれから先の10年、20年もまた、新しい時代を担う子どもたちが、この立命館守山から羽ばたいていくことでしょう。

保護者・学校・地域が一体となり、子どもたちの可能性を信じ、支え合いながら歩んでいく。そのつながりこそが、立命館守山の未来をさらに力強いものにしていくと信じています。

立命館が大切にしてきた「未来を信じ、未来に生きる」という想い。20年の歩みを力に変え、ここからまた、新しい未来が始まっていくことを願っています。

最後になりますが、立命館守山中学校・高等学校のさらなるご発展と、生徒・教職員・卒業生・保護者の皆さまのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

改めまして、創立20周年、誠におめでとうございます。



20年の歴史と伝統を糧に より輝く母校に

Kei Nishimura

西村 慧

立命館守山早苗会 会長

この度、立命館守山が創立20周年の節目を迎えられることに、同窓会組織である立命館守山早苗会を代表致しまして、心よりお祝いを申し上げます。国内においては少子化・高齢化による複合化した社会課題や加速するグローバル化など社会が目まぐるしく変化する昨今ではありますが、その中で確かな歩みを進められてきたことは、今日に至るまでの関係者皆さま方の大きな志とご尽力の賜物であり、衷心より深く敬意の意を表します。

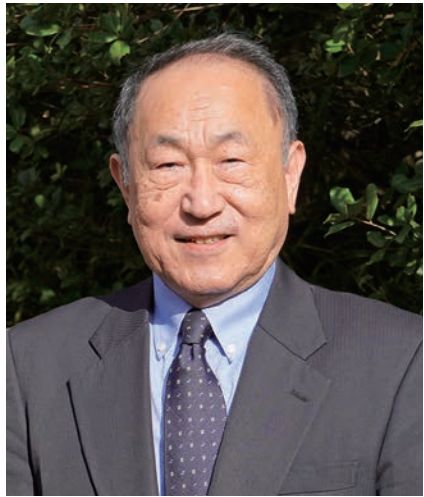
また、岩崎学校長をはじめ立命館守山中学校・高等学校職員の皆さま方には、日頃から本会の活動に対し、多大なるご協力とご理解を賜り、厚くお礼を申し上げます。

私自身も、この立命館守山高等学校の第5期生であり、3年間、守山のキャンパスで学び、充実した環境の下で活動をする中で多様な挑戦をさせていただくことができました。そして、この20年の学校の歴史の中においても、時代ごとに多くの皆さんが「自らの選んだ道」で精一杯に取り組まれ、実績を得た上でそれぞれの確かな軌跡を築かれてこられたことと思います。それら一つ一つが積み重なり、この学校の誇るべき風土を築いてこられたことについては、卒業生の一人として、改めて、大変嬉しく感じております。

さて、立命館守山は、今から20年前の2006年に学校設置者が守山市から学校法人立命館へと移管され、当時は「中高大一貫教育の優位性を生かした教育」、「21世紀に求められる科学的素養を育む教育」「コミュニケーション能力を育む先進的英語教育と情報教育、高度な国際化教育」、「高い学校文化の醸成」の4つを方針とし、「地域に学び、世界に

発信する」学校としてスタートしたと聞いております。そのことで、学校の名称も変わることとなりましたが、我々、同窓会は守山女子高等学校の時代からの「早苗会」という名称とともに諸先輩方の思いや組織の歴史と伝統を受け継ぎ、今日まで活動を行って参りました。そして、同窓会としては、2025年で創立75年を迎えることができ、総会員数は約15,000名に至っています。また、それらのそれぞれの会員が、ここ守山の地での学びを糧として、後輩である在校生の皆さんの今後の一つの目標ともなるべく、国内外の多様なフィールドで活躍をしています。

結びに、本会の会則には、「本会は、会員相互の親睦および向上を図り、あわせて母校の発展に寄与することを目的とする。」とされており、同窓会は卒業後の同窓生の親睦の場のみに留まらず、母校に対する支援も大きな役割であると認識しております。そのことから、今後も在校生の皆さんが学校生活において、「新たな価値」と出会い、「今後の希望」を生み出せる環境づくりの支援を最大限にさせていただくと共にこれからも誇りある母校が輝き続けられるよう、同窓会一丸となって取り組ませていただく所存です。創立20周年を契機とします立命館守山の更なるご発展と関係者の皆さま方のご活躍を祈念申し上げ、お祝いのメッセージと致します。



Sadao kawamura

川村 貞夫

初代校長（2006年4月～2006年12月）

20周年と今後

20周年、大変おめでとうございます。これまでの関係者の方々のご努力に心より感謝申し上げます。私が本校に関わるきっかけは、当時の常任理事会での理事長からの突然のご指名でありました。当時、私は理工学部で教授で研究、国際、BKCを担当する副学長/副総長を担当しておりました。大学前教育には素人の私のご指名には、守山市立守山女学校からの移管作業と理系への学内進学者数増加のミッションがあると理解しまして、何も質問をせずにお引き受けしました。

何分、私の高校教育の知識は自分の高校生当時の状態でしたので、高校の先生方をお願いして全教科の教科書を送って頂きました。これらをざっと見ると、カラフルに読みやすくなり、同時に相当に内容が高度化していると感じました。特に、生命科学の発展による生物学の内容の豊富さには驚きました。一般に、高校生は、このような多くの内容を学習して、受験勉強もしなければならぬわけです。附属校としての特徴はどのように設定すべきか？文系と理系の分離はどの程度必要か？より幅広い分野の学習は可能か？総合学習は、どのように誰が指導するのか？そして、理系進学の新学生数を増やすには何をすればよいかなど多くの問いが浮かんできました。そもそも明確に文系と理系に分離する必要はないのではないかと考えて文系生徒にも理系科目を、理系生徒にも文系科目を学習してもらえないかと提案しました。しかし、1週間の授業数に限界があって科目数を

増やすことができないとわかりました。この解決法として当時の先生方はクロス科目のようなアイデアを検討されました。すなわち、国語や英語の授業の中に科学の内容を盛り込むなどです。このような方法の有効性を様々な視点から検証することは重要と思います。

現在、私が担当しています立命館グローバル・イノベーション研究機構では、文理を横断して異分野の研究者が協力体制を作り、新しい学術を生み出そうとしています。このような研究活動や人材育成にとって、大学入学前の教育がどのような効果を生み出すかは、まだ十分に調査されていないと思われます。たとえば、文理に共通してフィードバックという概念は極めて重要となります。フィードバックは、機械、電気、化学、生物、経済、環境、社会など様々な分野で見られます。どの学部に進学して様々な職業を選択したとしても、フィードバックの考え方は有用です。このような共通概念を大学入学前に理解している人は大学で細分化した専門分野を横断することが比較的容易と思われる。このような試みの有効性が、附属校と大学の連携の中で明らかになれば大変ユニークな取り組みと予想されます。

大きな流れで人材育成の今後を考えてみましょう。この20年の経過を見れば教育を取り巻く環境は極めて大きく変化したと言えます。最も大きなインパクトはAI技術の進展です。既知の知識となっている内容を正確に大量に記憶して、正確に再現するだけの能力の価値は失われつつあります。

したがって、従来型の知識の切り売りの教育カリキュラムでは不十分となっています。一方で、次の世代の人たちには、地球温暖化、食料不足、高齢化社会、持続的経済、国際紛争など従来の方法では解決が困難な世界的課題解決が強く期待されています。その課題解決には、もちろんAI技術を高度に利用することが想定されます。その際、私が重要と思える2つのことを以下に記載します。

専門分野問わず「科学的」に自分で考えること

世界的権威と言われる人やAIの説明を簡単に信用せず、自分で独自に科学的に考えることが必要です。ここで重要なことは、「科学的」とは何かとなります。科学は、技術、芸術、宗教、イデオロギーとは、どのように異なるのでしょうか？ある時代に科学的に堅牢な理論も次の時代には否定される例を我々は数多く知っています。それでは、我々が科学的と信じている事柄は、結局は非科学的であるのでしょうか？何を自分の判断基準にするかが明確にできなければ、誤った情報に誘導され、矛盾する行動を重ねるなどの問題が生じそうです。ここで「科学」は、かならずしも自然科学に限定されません。広く社会科学や人文科学などの分野を含みます。個別の知識の寄せ集めではなく、このような思考の根幹に関係する内容を、専門分野を問わず我々はしっかり考える必要が出てきました。これは哲学です。知識の詰め込み教育ではなく、考え方を習得する経験が重要と思われます。このような哲学は、大学入学前後の大学の専門分野に入る前に共通して学ぶことが有用と思われます。

現場/現物/現在/現状を体験すること

コンピュータとネットワークの高度な発展によって、いわゆるサイバー空間がフィジカル空間（実空間）に対して相対的に拡大しています。AIもサイバー空間に存在し、我々自身がサイバー空間へ没入する感覚を持てる技術も開発しつつあります。今後、フィジカル空間の詳細なコピーをサイバー空間に構築して、いわゆるデジタルツインが産業界でも利用できると期待されています。サイバー空間では時間と空間の制約が取り払われ、空間的に離れた場所での過去や未来

を体験することができると予想する人もいます。

しかし、現実には様々な問題も発生します。サイバー空間での内容を理想やモデルと想定しましょう。これに対してフィジカル空間が現実となります。ほとんどすべての場合に、理想と現実の間にはギャップが生まれます。我々はフィジカル空間に存在するので、最終的にはサイバー空間の理想をフィジカル空間の現実に合わせてする必要があります。つまり理想と現実のギャップの解消です。このとき、様々な解消法が想定されます。現実を理想に近づける方法や理想を緩めて現実に合わせて方法などが思い浮かびます。いずれの場合も妥当な解決方法のためには、現実を深く理解することが重要です。現実を深く理解するためには、現場で現物の現在の状況の理解が重要です。これは体験に他なりません。体験なく、サイバー空間での思考によって物や制度を作っても多くの場合失敗すると私は考えます。確かに多くの場合にサイバー空間内のみの思考によってある程度のレベルに到達できると予想されます。しかし、我々が欲している問題解決では極めて巧妙に理想と現実のギャップを埋める必要があり、サイバー空間内の画一的で保守的な解決法では満足できない場合が多いと思います。

大学入学前の中学高校から、科学的に自分で考えることと様々な体験を持つことが、将来どのような専門分野を選択したとしても極めて有用と思います。今後、大学の附属校の特徴を生かして、このような活動を期待しております。





Toshio Kobatake

小島 敏夫

第2代校長（2007年1月～2013年3月）

二十年の歩み、さらなる飛躍へ

立命館守山が創立20周年という記念すべき節目を迎えられましたことに、心よりお祝い申し上げます。春の日差しが輝く琵琶湖のほとりに新たな学び舎として誕生したあの日から20年、幾多の挑戦と努力を続けながら歩んできた道のりを思うと、感慨深い思いに駆られます。開校当初、期待と不安が入り混じる中で、未来への確かな一歩を踏み出したみずみずしい生徒たちと凛々しい教職員の姿が、今も鮮明に浮かんできます。

立命館守山高校は2006年、立命館守山中学は2007年に開校しました。その頃の日本の中等教育情勢は、学力低下への懸念を背景に「ゆとり教育」の見直しが進み、基礎学力の充実へと舵が切られた時期でもありました。全国学力調査の再開や授業時間数の増加が検討され、競争原理の導入や学校選択制も議論されています。また、いじめや不登校への対応、規範意識の育成など、生活指導面の課題も顕在化していました。新生立命館守山高校には、このような時代の情勢に応える新しい教育モデルを提示する挑戦でもありました。

新生立命館守山の教育

当時、私たちが掲げた目標は明確でした。それは、生徒一人ひとりの可能性を最大限に引き出し、未来社会に主体的に生きることのできる人間を育成することでした。その実現に向けて、大学附属校の先進性、優位性を生かした教育展開を根幹に据え、従来の枠組みにとらわれない学びの創造に取り組んできました。大学との密接な連携を背景に、生徒たちは早期から専門的な学問に触れ、自ら問いを立て、

探究する姿勢を養っています。立命館守山は知識を受け取るだけでなく、それを活用し新たな価値を生み出す力を育む教育展開を重視してきました。文理融合教育と国際化教育を柱に、高い科学的素養やコミュニケーション能力、豊かな発想力、問題解決能力を備えた世界水準の人間形成を目指しています。

文系・理系を超えて学ぶ文理融合教育

その一つは21世紀に求められる文理融合教育です。この当時も自然科学・技術にかかわる社会問題への理解がますます重要視され、科学技術の習得に加えて人文・社会科学の理解は欠かせない状況におかれていました。高校の段階では、より多くの生徒が科学技術の概観を俯瞰する機会をもつことや中等教育の段階から、科学・技術・社会の相互作用を自覚的に学ぶことが求められています。よって理数科目は生涯学習の基礎となる共通科目と位置付けて、文系志望者も含めて全員必修とする文理融合履修カリキュラム編成をとっていました。すべての生徒に科学的素養の基礎を培うことで、豊かな創造性を有し、知識や情報を適切に選択、吸収して、直面する問題の解決を可能にする知的バイリンガルを目指しています。そのため当時は隔週土曜日午前中の活用を含めて、高校では99単位の教育課程を編成していました。

汎用性に富む能力の育成

この文理融合教育と共に高大連携による科学技術教育を通して汎用性に富む能力（キー・コンピテンシー）の育成を

目指しています。キー・コンピテンシーとは、知識や技能を学んだだけに終わらず、実社会や人生においての行動・成果として活用するための新たな能力といわれています。地域の自然や産業から学ぶ地域交流プログラム、例えば琵琶湖を多面的に学習する「水環境物語」や「ロボテクス講座」など多彩な学びを通して総合力を培っています。「探求」という学校設定科目は、「科学と技術の総合的教育を実践する施設（科学技術工房「サイテックラボ」）を舞台に、観察、実習、実験、発見、ものづくり教育を展開し、学ぶ意欲を引き出すとともに探究心を醸成しています。

高校は開校時から文部科学省スーパーサイエンススクールに指定され、その使命を担い続けてきました。理数教育の充実を図るとともに、先進の科学教育を推進し、探究活動を重視した学びを展開しています。実験や観察に加え、課題設定から検証、発表に至るまでの一連のプロセスを見通すことで、生徒たちは科学的思考力と論理的表現力を身につけてきました。これらの経験は、科学分野にとどまらず、あらゆる分野で必要とされる基盤的な力を育てるものです。高校より1年後、2007年度に開校した立命館守山中学では、「伝統文化（田楽）」や「びわこ学習」などの総合講座を軸にして、地域価値の掘り起こし活動や地域文化との出会いの中で、みずみずしい感性や豊かな人間性を育てています。

地域に学び世界に発信する先進の学び

国際展開では全員参加の海外研修や海外姉妹校との交流を実施。2010年に立命館守山高校がホスト校になって開催された「第一回高校生国際みずフォーラムin 湖国・滋賀」は、印象に残っています。世界の水問題の解決に向けて積極的な役割を果たしていこうと海外8ヶ国から11校、国内から9校の高校生や市民の皆さんが守山市に集い、プレゼンテーションやポスターセッションなどを通して研究内容を交流しました。準備からフォーラム運営、共同宣言の採択までこのフォーラムを支えたのは、立命館守山高校生が立ち上げた「世界みずフォーラム運営委員会」でした。地域に学び世界に発信するこの素晴らしい活動は、「第二回フォーラム」としてシンガポールの学校へ受け継がれていきます。地域と世界をつなぐ実践的な学びが契機になって多くの卒業生が本校を巣立ち、国際分野で活躍しています。

高大連携教育がもたらす学び

高校・大学が有機的に連携することで、生徒たちは一貫した学びの中で自己の関心を深めることができます。大学の講義や研究に触れる高大連携教育は、生徒にとって大きな刺激となり、学びへの意欲を一層高めてきました。また、自らの将来像を具体的に描く手助けとなり、主体的な進路選択へとつながっています。附属校教育の連続性のある教育システムは、生徒の成長をより確かなものにする重要な要素です。カリキュラムとしては、卓越した学習能力と意欲を有する生徒には先進の教育の機会を早期に提供するために、高校在学中に大学でも認められる単位を取得できるアドバンスト・プレースメント（AP）科目を開講しています。高校での指導とともに高大院一貫教育の優位性を生かして、大学教員や企業の講師が先進のAP科目や高大接続講座を担当し、生徒の個性や才能にふさわしい教育課程を提供しています。この教育環境は、生徒たちに高度で専門的な学びの機会を提供し、早い段階から学問の本質に触れることを可能にしてきました。大学への単なる進学準備にとどまらず、学問的探究の喜びを体験することで、生徒たちは知的好奇心を育み、自ら課題を見出し解決する力を養っています。

不確実性が高く変化の激しい現代社会では、単なる知識の取得だけでなく、多様な価値観を尊重し協働する力、情報を批判的に読み解く力、主体的に学び続ける姿勢が不可欠になっているからこそ、このような学びが求められています。

さらなる発展を願って

立命館守山の発展は、保護者の皆様や地域社会の温かいご支援によって支えられてきました。学校は社会の中で生きる存在であり、地域とのつながりの中でその価値を高めていきます。立命館守山創立20周年はこの歩みを振り返ると同時に、新たな未来への出発点でもあります。これからの10年、20年に向けて、立命館守山中学高校がさらに進化し続けることを心より願っております。

結びに、立命館守山の創立20周年を改めてお祝い申し上げますとともに、これまで本校の発展に尽力されてきたすべての関係者の皆様に重ねて敬意を表します。今後も立命館守山中学高校が輝かしい歩みを続け、次代を担う生徒を育てる拠点としてより一層発展されることを心より祈念し、元校長としてのお祝いの言葉とさせていただきます。



Keiji Terada

寺田 佳司

第4代校長（2017年4月～2024年3月）

立命館守山創立20周年に寄せて
—学びを止めず、学びを社会へひらいた生徒たち—

立命館守山中学校・高等学校が創立20周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

この大きな節目にあたり、2017年4月から2024年3月まで第4代校長を務めた者として、当時の日々を振り返りつつ、支えてくださったすべての方々への感謝と敬意を込めて一文を寄せます。

在任中、日々の教育活動を支えていたのは、実に有能で、誠実で、情熱にあふれた教職員の存在でした。そして、その教職員の思いに応えるように、自ら問い、自ら動き、仲間とともに新しい価値を生み出そうとする生徒たちがいました。守山市をはじめ、地域の皆様、企業・関係機関、学園内外の多くの方々にも、探究活動やキャリア教育、地域での学びの機会など、さまざまな形で本校の教育活動を支えていただきました。その一つひとつが、学校の発展と生徒たちの成長を後押しする大きな力となりました。立命館守山は、まさに「人」に恵まれた学校でした。

立命館守山のこの20年を語るうえで、私の在任中の出来事として避けて通ることができないのは、新型コロナウイルス感染症の拡大という未曾有の危機です。学校に集まり、教室で授業を受け、仲間と語り合い、行事に取り組むこと。そうした当たり前の日常が突然失われ、教育とは何か、学校とは何かが根本から問われることになりました。

そのとき、立命館守山が掲げた言葉は、「学びを止めない」ということでした。それは、単に授業時間を確保するという意味ではありません。生徒たちが未来に向かって歩み続ける力を止めない。仲間とつながり、自分の可能性を信じ、学び続ける意欲を止めない。そのために学校として何ができるのかを、教職員一人ひとりが本気で考え、具体的に取

り組みへとつなげていきました。

立命館守山は、コロナ禍以前からICT教育の可能性に着目し、全国に先駆けて実践を積み重ねてきました。ICTを単なる機器の導入にとどめるのではなく、学びのあり方そのものを広げる道具として位置づけてきたことが、この危機の中で大きな力となりました。家庭にしながら、対面授業に近い環境で学び、教員や仲間とつながり、探究活動の相談も継続できる。早い段階で教育活動を再構築できたことは、守山の教職員が平時から未来の学びを見据え、準備を重ねてきた成果でした。

しかし、この時期を振り返って最も印象深いのは、制度や仕組み以上に、生徒たちの姿です。突然、学校生活の多くを奪われ、不安や戸惑いを抱えながらも、生徒たちは学びを投げ出しませんでした。画面の向こうで真剣に授業を受け、自宅から課題に向き合い、オンライン上で仲間と議論を続け、制約の中でも行事や活動を実現しようと工夫する姿。その一つひとつが、学校全体を励まし、前へ進める力となりました。

そして、立命館守山の生徒たちは、学びを止めなかっただけではありません。

教室で得た学びを、地域や社会の課題に向き合う力へと変えていったのです。

コロナ禍により、全国の中高生の活動が制限される中、本校の生徒たちは、オンラインコミュニティサイト「Beyond COVID-19」において、中高生の挑戦を集め、互いに励まし合うコンテストを企画しました。閉塞感の中にあっても、誰かの挑戦を可視化し、新たなつながりを生み出そうとする姿がそこにありました。

また、感染症対策が日常となる中で、身近な困りごとに向き、足踏み式消毒液スタンドを開発した生徒たちもいました。その活動は仲間を巻き込み、市内の病院や公共施設への設置へと広がりました。守山市をはじめとする自治体からも感謝の言葉をいただくなど、身近な気づきから出発し、地域の安心を支える形へと発展した、守山らしい実践でした。

さらに、世界が大きく揺れ動く中で、ウクライナの人々が仕事を得る機会を支援する企業の取り組みに、中心的に関わった生徒もいました。オンラインを通じて国境を越え、語学力や行動力を、困難の中にある人々のために活かそうとする姿は、高校生の学びが世界とつながる可能性を示すものでした。

これらの取り組みは、立命館守山の探究の学びが、生徒たちの中に確かに根づいていることを示すものでした。探究とは、単にテーマを設定し、調べ、論文を書き、発表するだけのものではありません。自分の問いを社会の中に置き直し、誰かの困りごとに向き合い、解決のために一歩を踏み出すこと。実際に社会の中で試してみること。そこまで進んで初めて、学びは生きた力になります。

生徒たちは、コロナ禍を「できない理由」にするのではなく、自らの問いを社会の中で試す機会へと変えていきました。制約の中でできることを探し、仲間と協働しながら、地域や世界に働きかけていく。その姿は、本校が最も目指してきた学びのあり方を、生徒たち自身が体現するものでした。

在任中、校長室には、生徒たちが自分の思いやアイデアを語りに来る雰囲気がありました。新しい企画を相談する生徒、探究テーマについて語る生徒、コンテストへの挑戦を報告する生徒もいました。それは、校長室という場所の特別さではなく、生徒たちの中に、自分の問いや挑戦を誰かに伝えたいという意欲が育っていたことの表れでした。

やがて、そうした生徒たちの挑戦は、学校の内側にとどまらず、全国の舞台へと広がっていきました。全国レベルの起業コンテストで次々と成果を上げ、立命館総長ピッチでは、大学生の参加者が多い中、高校生として初めてグランプリを受賞するという快挙も生まれました。それは、単なる受賞の記録ではありません。既存の答えをなぞるのではなく、自ら問いを立て、新しい価値を生み出し、社会の見方を変えていく。まさに「ゲームチェンジャー」と呼ぶにふさわしい生徒たちの姿が、そこにありました。

こうした生徒たちの頑張りや、教職員の支え、そして地域の応援が重なり合う中で、立命館守山への期待は大きく高

まっていきました。入試においても受験者数は年々増加し、滋賀県内外から、本校の学びに関心を寄せていただくようになりました。それは、単に進学実績や学校規模による評価ではありません。立命館守山には、これからの時代に必要な学びがある。ここには、生徒の可能性を本気で伸ばそうとする教職員がいる。そして、学校を支え、生徒を応援してくださる地域がある。そうした期待と信頼が、確実に広がっていきました。

もちろん、その歩みは決して平坦なものではありませんでした。コロナ禍では、行事の中止や変更、感染対策への対応、オンラインと対面を組み合わせた教育活動の模索など、教職員にも生徒にも大きな負担がありました。けれども、その困難の中で、立命館守山は学校としての底力を発揮しました。あの時期の守山の姿は、生徒の学びを止めないという覚悟、生徒の可能性を最後まで信じる姿勢、そして地域とともに学校をつくっていく開かれた精神を、改めて示してくれました。

立命館守山の20年は、挑戦の歴史であり、成長の歴史です。そして、その中心には常に、生徒たちの努力がありました。その生徒たちを信じ、支え、導いてきた教職員。その学校を温かく見守り、支援してくださった保護者・地域の皆さまをはじめ、学園内外の多くの方々。これらが一つにつながって、今日の立命館守山を形づくってきました。

そのような学校の歩みに校長として関わることができたことは、かけがえのない幸せでした。教職員とともに歩み、素晴らしい生徒たちの成長に立ち会い、地域に支えられながら学校づくりに携わることができた日々は、何ものにも代えがたい時間でした。

創立20周年は、到達点であると同時に、新たな出発点でもあります。これからの社会は、ますます予測困難で、正解のない時代になっていきます。だからこそ、立命館守山が育ててきた「問いを立てる力」「仲間と協働する力」「社会に向かって挑戦する力」は、これまで以上に大きな意味を持つはずです。

立命館守山が、これからも地域とともに歩み、生徒一人ひとりの可能性を信じ、時代の先を見つめながら、ゲームチェンジャーを生み出す学校としてさらに大きく飛躍されることを心より願っています。

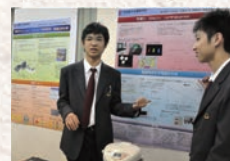
創立20周年、誠におめでとうございます。

立命館守山の未来が、これまで以上に瑞々しく、力強く、希望に満ちたものでありますように。

立命館守山中学校・高等学校の歴史

草創期

- 2006 滋賀県守山市からの学校設置者移管により立命館守山高等学校を開校**
「中高大一貫教育の優位性を生かした教育」「21世紀に求められる科学的素養を育む教育」「コミュニケーション能力を育む先進的英語教育と情報教育、高度な国際化教育」「高い学校文化の醸成」を方針とし、「地域に学び、世界に発信する」学校としてスタート



- スーパーサイエンスハイスクール指定校1期 (2006年4月～2012年3月)**
「高大連携による科学技術教育と文理融合教育を通じた、国際貢献・地域貢献を目指す『コミュニティ創生』」を研究開発課題に掲げ、「アドバンストプレースメント (AP) 科目」をはじめとする高大連携教育と高大接続の新たなモデル創出、および、全校生徒を対象とした「地域に学び、世界に発信する」科学技術教育の研究開発を行った



- 2007** キャンパスを勝部から三宅町に移転し、立命館守山中学校を開校



オーストラリア・タスマニア州 ロズニーカレッジ[※]との交流を開始



- 2008** 一期生海外研修 (オーストラリア・カナダ)



- 2010** 高校にアカデミアコースとフロンティアサイエンスコースを設置
確かな学力を育てる5つの教育「文理融合の教育」「理数・科学教育」「ものづくり・地域交流」「国際教育」「立命館の一貫教育」を方針とする

日英サイエンスワークショップ (2008年から参加)



- 2012** スーパーサイエンスハイスクール指定校2期 (2012年4月～2018年3月)
「文理融合教育による科学技術系能力を育成する教育プログラムの開発と地域連携・国際展開及び高大接続の新たなモデルの創出」という研究開発課題を掲げ、「研究Ⅰ:プログラム開発による問題解決能力、グローバルコミュニケーション能力、社会貢献力の育成」「研究Ⅱ:水をテーマにした研究活動による地域連携・国際展開と立命館一貫教育推進本部・立命館一貫教育部との連携による高大接続の高度化」を設定した



ユネスコスクール認定



高校海外研修 (シカゴ・シドニー・タスマニア・バンクーバー・バンコク)



- 2014** 中学校にフロンティアサイエンスコースを設置
普通教室に無線LANを設置し、新入生からiPadを活用したICT教育を開始



- 2015** 台湾 高雄市立中正高級中學[※]との交流を開始



変革期Ⅰ

- 2016** 立命館守山中学校・高等学校 創立10周年記念式典を挙げる



- 2018** スーパーサイエンスハイスクール指定校3期 (2018年4月～2023年3月)
「中高大院連携でつくる校種・教科横断型科学探究ストリームによる課題設定力の育成」を目標に、教科の枠を超えた横断的な学びや中学から大学・大学院までをシームレスに繋ぐ学びを構築、展開することで、優秀な科学技術系人材の育成を目指す



- 2019** 高校:グローバルコースを新設し、グローバル・アカデミア・フロンティアの3コースに再編
中学:アカデミア・フロンティアの2コースに再編



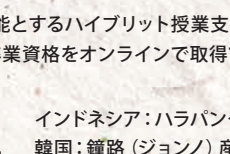
UAEアブダビ Applied Technology Schoolとの交流を開始



- 2020** 大塚製薬株式会社との連携協定



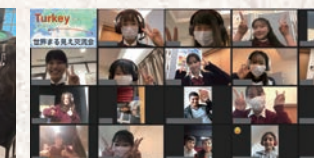
ライフイズテック株式会社との連携協定



- 2021** 対面とオンラインの両方を可能とするハイブリッド授業支援システムの導入
カナダ・オンタリオ州の高校卒業資格をオンラインで取得できるダブルディプロマプログラムスタート

- 2022** ロイロスクール認定校

インドネシア: ハラパンクリスチャン財団[※]との交流を開始
韓国: 鍾路 (ジョンノ) 産業情報学校[※]との交流を開始
トルコ: キャルターネアナドルリセ[※]との交流を開始



神港精機株式会社との連携協定



- 2023** スーパーサイエンスハイスクール指定校4期 (2023年4月～2028年3月)

アメリカ・ミシガン州トロイ学区[※]との交流を開始



株式会社Thinkとの連携協定



- 2024** 中国長沙市博納第二附属中學[※]との交流を開始



株式会社PIECLEXとの連携協定



- 2025** DXハイスクール 校認定
モロッコ アル・アッシーマ校・モハメド・ベンアブドゥッラー学園[※]との交流を開始



- 2026** 開校20周年記念ロゴマークを制定



※姉妹校・教育提携校

変革期Ⅱ

飛翔期

守山市立守山女子高校から立命館守山高校へ

Toshio Kobatake

小畠 敏夫（立命館守山高等学校設置準備室長）

1. 公立から私立へ、新たな飛躍をめざして

立命館守山高校の前身である守山市立守山女子高校は、滋賀県内唯一の公立女子高校として長きにわたり女子教育の一翼を担い、有為な人材を社会へ送り出してきました。1959年に「愛敬・清純・勤勉」を校訓に守山町立守山女子高校（被服科）として設立、1970年の市制施行によって守山市立守山女子高校となってからは商業科、英語科が設置されます。1999年になると商業科は情報ビジネス科、被服科は生活総合科に改変されました。

一方この間、少子化の進行により生徒数は減少し公立高校の統廃合や再編が全国的な課題となる中で、滋賀県内の教育環境も変化しました。男女共同参画の進展や進学志向の高まりによって、守山市立女子高校としてもその役割や教育内容の見直しが求められるようになります。守山市は女子高校としての教育施策や存在意義を再検討し、存続と新展開を両立させる新たな学校像を展望していました。そこで浮上したのが、公立高校を私立に移管するという全国的にも珍しい施策であり、移管先として選ばれたのが日本でも有数の私立総合学園、立命館でした。この決断の背景には、地域の教育資源を失うことなく、より柔軟で魅力的な教育環境を実現したいという守山市民の強い願いも後押ししたと思われます。立命館はこのような教育への願いを学園あげて真正面から引き継ぐことになりました。立命館学園は建学の精神である「自由と清新」、教育理念である「平和と民主主義」を掲げて、地球市民として活躍できる人間の育成に務めることを教育使命としています。私立総合学園として初等教育から高等教育までの一貫教育を展開し、豊富な教育実績を有しています。守山市と立命館学園は教育理念や地域に蓄積された伝統、教育成果を共有しながら、丁寧な協議を重ねて新たな立命館守山高校像を創りあげました。その結果守

山市立守山女子高校は2006年4月より守山市から学校法人立命館に移管され、立命館学園4番目の附属高校、立命館守山高校（男女共学、普通科）として開校しました。

2. 立命館守山高校の教育

こうして誕生した立命館守山高校は、大学附属校としての優位性や先進性を生かして、学ぶ意欲と探求心を高いレベルで育む中高大一貫教育を展開しています。洗練された学校文化の中で育成される多様な資質、それは学習課題を見通す観察力やその解決法を見出す創造力、異文化の壁を乗り越えるコミュニケーション能力、地域や民族を超えた倫理観などを育成します。立命館大学や立命館アジア太平洋大学への内部進学制度によって、生徒は安定した進学ルートを確保しつつ大学や大学院を卒業するまで、自らの志望に応じた進路選択が可能です。また他大学への進学にも対応出来るように受験にのぞむ学力の向上にも対応したカリキュラムが編成され、進学校としての側面も整備、確立しています。さらに、英語教育の充実はもとより、海外研修や留学プログラムの導入、外国人教員の配置などを通じて、グローバルな視野を持つ人材の育成が図られています。

開校時から文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクールに指定され、先進的な科学技術、理科、数学教育を通じて、生徒の科学的な探究能力を培うことで、将来社会を牽引する科学技術の担い手を育成するための取組も行なっています。自然科学・技術に関する社会問題の解決には、科学技術の理解に加えて人文・社会的理解が欠かせない状況にあります。社会の著しい変化と情報化の進展の中で科学・技術・社会の相互作用を自覚的に学ぶために、文理融合履修カリキュラムを編成しています。理科系・情報系の高い能力を有し先端科学技術や高度専門職の分野での活躍をめざす生徒に対しては、立命館大学

びわこくさつキャンパス理系学部などとの高大連携プログラムも設定されています。

これらの教育内容を展開する舞台として新たな校舎や施設、ICT環境も整備されました。従来の公立校の枠を超えた先進的な教育環境が整い、生徒の多様な学習ニーズに応える体制が構築されました。そして2007年度より立命館守山中学校を併設することで中高大一貫教育を展開しています。

3. 移管にともなう課題

一方で、この移管は大きな課題も抱えました。守山市立守山女子高校が私立へ移管される方針は、生徒や市民へ正式な説明を行う前に新聞の先行報道によって明らかにされ、生徒や保護者の間には戸惑いが広がりました。この突然の報道により、守山女子高校生は自分たちの学習環境や卒業がどうなるのか不安を抱いたことと思います。入学したのは公立、しかし在学中から私学へ移管するという前例のほとんどない状況に、在校生の困惑は広まりました。保護者も私学に移管すれば学費負担の増加や進路指導への影響等を懸念しました。地域住民にとっても、長年親しまれてきた公立女子高校が姿を変えることへの不安や懸念もありました。公立高校が消えると地域の拠点としての役割が失われ、行事や交流の場が減少し、地域の活力低下にもつながりかねません。さらに地元根ざした教育や人材育成が難しくなり、若者の流出を招き、地域社会の持続性にも影響を及ぼす心配もあります。

これらの課題に対して守山市や立命館は、生徒、保護者、同窓生（早苗会）、市民に対して、移管の背景や具体的な移行時期、在校生への配慮措置などについて丁寧な説明を行いました。守山市は市長や教育長自らが学校説明会に出席して、生徒や保護者に直接熱意を込めて説明することもありました。これ

から高校受験を控えた中学生や家庭にとっては進学方針の見直しを迫られる可能性もあるので、市民をはじめ関係方面への迅速な説明も行いました。立命館への移管によって教育資源を失うことなく、より柔軟で魅力的な教育環境を実現したいという守山市や守山市教育委員会の真摯な姿勢は、徐々に在校生、保護者、卒業生、市民の皆さんの理解を得ていきました。

立命館学園からは機会を設けて、在校生への配慮や段階的な移行措置を丁寧かつ具体的に説明しました。守山女子高校生徒会、守山女子高校保護者会、守山女子高校同窓会（早苗会）、守山市民の皆さんが、この移管を真正面から受け止めて前向きに対応していただいたことが、この移管を推進する原動力になりました。

4. 移管をふり返って

自治体から学校法人への高校の移管は、新たな中等教育の創造という点で大きな意義がありました。画一的な制度に縛られず、特色あるカリキュラムや教育システムの導入、学校運営における自主性・独自性を高め、多様化する中等教育ニーズに応える学校づくりを可能にしました。さらに迅速な意思決定のもとで教育環境の充実が図られ、高校の魅力向上と教育の質の深化も期待されています。また地域にとってもこの移管は教育的な活力を見出す点で意義を持っています。私学ならではの教育課程や特色ある学びが展開され、地域の魅力向上につながっています。

現在の立命館守山中学高校はこうした学校づくりを背景に、知的実力とみずみずしい感性、豊かな個性の涵養をめざして、さらなる高い峰に向かって教育創造を展開しています。この歩みは学校の沿革にとどまらず、中等教育のあり方そのものを展望する事例としても注目していただければ幸いです。



「地域に学び世界に発信する」科学教育の創造へ —立命館守山高等学校 SSHの原点—

Kyoko Ukita

浮田 恭子（利晶学園大阪立命館中学校・高等学校 教育顧問（SSH担当））

1.開校前の SSH 申請

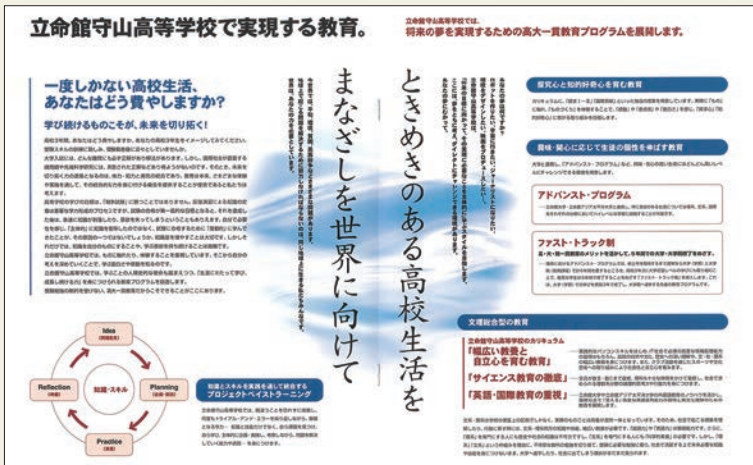
立命館守山高等学校が2006年4月の開校前にスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の申請を行うことになったのは、当時ともに生徒募集や教育づくりに奔走していた設置準備室の事務局局長から「実はこんなものがあって」と申請資料を示されたことがきっかけだ。県への提出締め切りまで1か月を切っていた。生徒募集の渦中にあり、教員体制も整っていない状況では現実的ではない、とまず思った。しかし、理系学部が集まる立命館大学びわこ草津キャンパスと同じ滋賀県に、理系を重視した附属校を創設しようという構想の具体化を進める上で、SSH構想を持つことは有力な指針となり得る。SSHは2002年から始まり、初年度から立命館高等学校の申請や報告書作成に携わっていたこともあり、短期間であっても申請書の作成は可能と思えた。教育の枠組が固まっている中で新しいことを始めるのも面白いが、まっさらなキャンパスに絵を描けることの魅力は大きい。既存の学校改革には、すでに存在する制度や文化との調整が常に伴う。しかし、立命館守山は開校前であり、「どのような学校をつくるのか」という問いそのものから出発することができた。だからこそ、地域や社会とつながる新しい科学教育のモデルを構想したいという思いが強かった。そこで、採択の可否はあまり気にせず、教育理念の提示と豊かな教育創造に役立ちそうな内容を中心に据え、限られた期間の中で申請書の原案作成にとりかかった。

2.AP プログラム構想

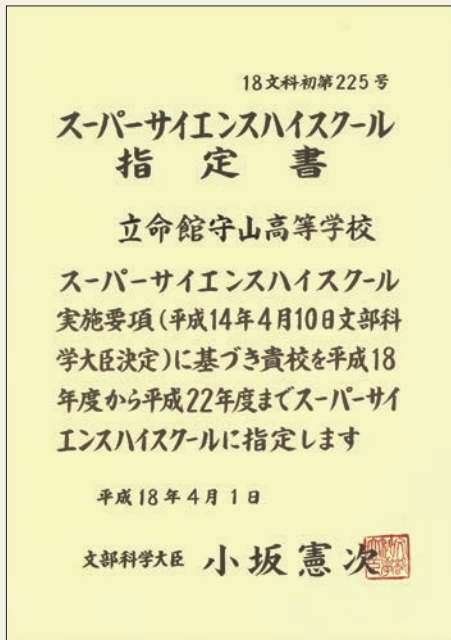
立命館守山のSSH構想ではAP（Advanced Placement）プログラムを実現したい、と考えた。APプログラムとはアメリカでは一般的な制度として定着しており、近年では日本のインターナショナルスクールなどでも導入している事例がある。非営利団体であるカレッジ・ボードが運営し、高校生が大学レベルの授業を受け、APテストの結果次第で大学入学後に単位が認定され、大学の要卒単位に含めることができる。

日本では高等学校と大学の間に「受験」という高い壁が存在する。立命館の附属校にはその壁はない。進学が保障されることは生徒や保護者の安心材料だが、それは「普通なら越えなければならない障壁が存在しない」という極めて消極的な利点ではない。受験に費やす時間とエネルギーを、より高い目標より深くて面白い探究に費やしてほしいと、公立高校から立命館高等学校に転職した時から強く願ってきた。一方、大学には「附属校生は受験を経験しないため学力的に鍛えられていない」という見方も少なからず存在していた。大学の単位を先行取得するなど考える前に、高校でやるべきことをきっちり身につけてきてほしい、という大学側の思いも十分に理解できた。

高校生が大学レベルの授業を通してモチベーションや知的関心を高めることは、そのような現状の変革につながるのではない。受験で消費する知識としてではなく、高校での学びが将来にわたって必要な基礎であり、それがどう開花していくのかを知ることは生徒の学びの深化を促すのではない。そんな思いから立命館独自の「APプログラム構想」の具体化を進めた。これは、知識の習得のみを目的とする教育ではなく、社会と接続された高度な学びへと生徒を導くという点において、後のSSH構想とも深く結びついていくことになる。



開校前の学校パンフレット



文科省SSH指定書

3.地域に学び世界に発信する

立命館守山のSSHでは地域との関係を特に重視した。その背景には学校の設置経緯そのものがある。守山市は当時人口約7万人規模の自治体であり、決して大規模な都市ではない。その守山市が長年にわたり守山女子高等学校を維持し、地域の教育を支えてきた歴史は注目に値する。その学校を立命館が引き継ぎ、新たに附属校として再出発する以上、「守山」の名を冠する学校として地域との結びつきを中核に据えることは必然であった。公立学校が学校法人に移管されるという事例は当時としても稀であり、それは私立の教育機関と地域社会の信頼なくして成り立たない。期待と信頼に応えるため、地域に根ざし、地域とともに発展する学校づくりを行うことが教育創造の原点と考えSSHの構想を練った。

「地域に学び、世界に発信する」という立命館守山初期のスローガンの契機となったのは、地域で環境保全等の活動に従事する人々との出会いである。1996年に「豊穡の郷赤野井湾流域協議会」としてスタートし2004年に特定非営利法人となった「びわこ豊穡の郷」は、当時環境省から「いきづく湖沼ふれあいモデル事業」を受託するなど活発な活動を繰り広げていた。その関係者を訪ねた際、「自分たちは企業活動を通して琵琶湖を汚してきた。その責任を感じて活動を続けている」と語られた言葉は、社会経済活動と環境との関係を深く考えさせるもので



水ロケットグランプリ



琵琶湖での学習の様子



バイオカート製作風景

あった。「どうしてこんなに頑張っておられるのですか」と尋ねたところ、「あほやさかいな」と笑いながら答えられたことは今でも忘れることができない。

また、地域で循環型エネルギーの実践に取り組む方にお話を聞きに行った際、「私立学校だからこそ地域に貢献できる生徒を育てたい」という思いをお伝えしたところ、「その前にまずやるべきことは地域から学ぶこと」と指摘を受けた。確かに高校生なのだから「地域貢献」とはいかにもおこがましい。学校は、地域の中にある実践や知恵から学び、その学びを通して社会に貢献しう人材を育成する場であるという認識を新たにした。こうした経験が、立命館守山SSH初期の「地域に学び、世界に発信する」というスローガンの背景にある。そして、地域は単なる学習の場ではなく、社会課題の縮図として位置づけられ、そこから得られた知見をより広い文脈で発信していくことが立命館守山の目指すサイエンス教育の目標となった。この理念は、その後も教育活動全体を貫く設計原理として受け継がれている。

4.先駆的挑戦から現在へ

このような経緯から、立命館守山のSSH第1期の研究開発課題を「高大連携による科学技術教育と文理融合教育を通した、国際貢献・地域貢献を目指す『コミュニティ創生』」とした。もともと、このSSH構想を実際に教育として展開するための条件は十分に整っていたわけではない。開校初年度、1年生は新設校として入学した男女共学の生徒、2・3年生は旧守山女子高等学校からの在校生であり、学年ごとに異なる教育課程と文化が共存していた。校舎移転を次年度に控えた初年度は教育環境的にも恵まれてはいなかった。しかし、制度や環境が整うのを待つのではなく、理念に基づく教育を可能な範囲から具体化していくことこそが重要であり、開校直前のSSH認可がそれを後押しした、と言えるだろう。現在ではSTEAM教育や持続可能な社会の実現を志向する教育の重要性が広く指摘されているが、立命館守山のSSHは、地域というフィールドを明確にし、そこで文理融合的・総合的に学ぶ教育モデルを提示した、という点で先駆性があった。その後高等学校では、探究活動が教育課程に位置付けられ、立命館守山の教育も国際協働やデジタルクリエイティブ教育など新たな要素を取り込みながら発展を続けている。根底にある「地域に学び、そこから得られた知見を社会に発信する」という考え方は一貫して維持されており、開校前に構想された理念が形を変えながら現在の教育実践へと受け継がれていると感じている。それは、開校前に模索した教育理念が、現在に至るまで立命館守山の教育文化として受け継がれてきたことの表れなのだろう。



高校生国際みずフォーラムin湖国・滋賀（2010年2月）

伝統に向けた初めの一步は…

Takeshi Matsui

松井 健（高校1期生 学年主任）

滋賀県立高校の教員として15年、学校法人立命館の教員として20年の教員生活を昨年度末に終えました。前半の15年も、それなりに変化に富んだ教員生活でしたが、立命館教員として過ごした後半はまさに激動の日々でした。とりわけ1年目は「筆舌に尽し難い」という言葉で片付けることなどできない365日でした。公立（守山市）から私立（立命館）へ設置者が移管され全国初のケースとして開校する立命館守山高校一期生の学年主任に任命されたのは2005年の秋口だったと思います。滋賀県立高校しか知らない私にとって青天の霹靂、まさに「未知」の世界へのチャレンジでした。今後の立命館の中等教育や守山市の街作りそして滋賀県教育情勢にも影響を及ぼし、全国の教育関係者が注目するモデルケースでもあり責任重大な局面でした。しかし、開校に向け様々な尽力された立命館の関係者、滋賀県や守山市の関係者の皆さんの立命館守山高校への期待と理解と支援があり、ここに20周年を迎えることができました。そして何よりも、一期生たちが、世間の注目や日々の話題や様々なプレッシャーに飲み込まれることなく、守山市民や滋賀県民の皆さんに信頼されるよう頑張ってくれたからこそ今があるのです。一期生の頑張りが、立命館守山の教育理念や実践に対する理解と協力を生み二期生三期生が受け継ぎ今があるのです。あの時の一期生の生徒や保護者の皆さんの頑張りがなければ、こうして20周年を迎えられることはなかった…（くだいようですが、）開校期の歩みは、一期生とその保護者の皆さんの頑張りの歩みでもあった…それくらいに希有で貴重な教育実践であったと思います。この場をお借りして、一期生の皆さんと温かく見守っていただいた保護者の皆さんに改めて御礼と感謝の気持ちを書き添えて本題に入ります。

開校直前の2006年3月の朝日新聞に『移管の悔しさ胸に 最後の卒業生、巣立つ』と見出し付きで報じられている市立守山女子高校第45回卒業式の記事を手に置いてこの原稿を書いています。「卒業生代表が答辞の中で『私たちの悲しみと怒りの言葉や涙もむなく、移管はなくならなかった。在校生は守女としての誇りをもって生活してってください』と後輩たちに語りかけた。」という記事を改めて読みながら、当時、一期生の学年主任を託されていた私は、立命館守山高校は様々な立場の方からの色々な思いの中で開校するのだということをしっかり受け止め、どういう方針で「学校創り」をしていくべきかを考えていたことを思い出します。特に、「守山女子高校の存続を求める会」という有志団体を通して、全校生徒の約65%から「白紙に戻して欲しい」という署名や意見書が守山市の臨時議会に提出されたという報道もあり、一期生のスタートが如何に厳しい環境の中で始まるのかを感じておりました。設置者移管の背景には関係団体や関係法人や組織の事情もあり皆が納得した形での開校ではな

いかかもしれませんが、その一方で、立命館守山高校に夢と希望を持って第一期生が入学してきます。彼らの夢や希望に添いつつ、守山女子高校の先輩方や守山市民の皆さんに「信頼される」にはどのような学校創りをしていくべきなのかあれこれ思案の毎日でした。一期生の足跡が二期生・三期生に継がれ、後輩たちにリレーされ立命館守山の歴史や伝統が作られていきます。伝統を作るうえで、立命館守山が開校するまでには多くの方々の理解や努力があり、決して立命館単独の力で立命館守山高校が開校できたわけではないということをやちゃんと理解させなければならないと考えました。守山女子高校の先輩方に思いを馳せることは、「立命館人」として成長することにも繋がります立命館守山高校一期生の高校生活の初めの一步でもあると考えました。

4月開校に向け、そういう私の覚悟を支え共に学校創りをしてくれることになる2006年度の赴任者たちは多士済々で、（立命館の他附属校在職の経験豊かな教員や新たに立命館に採用された大学卒業間もない教員、他私学や公立からの転職者等）1月から3月にかけてBKCに集まり数回の研修を受けました。当初は手探りで始まった第一学年団も研修を重ねるにつれお互いの気心も知れ、それぞれが第一期生とともに新しい学校を創っていく、唯一無二の学校をこれから創造していくことができる喜びやワクワク感を持ちながら4月9日曜日の守山市民ホールでの入学式に臨みました。入学式第2部の演出も大学から吹奏楽部や応援団やチア部などのパフォーマンスがあり、入学生が立命館への憧れや思いをより一層強くし、我々学年団もまた気持ちが一つになった日でもありました。入学式後、各HRに生徒が入室し各担任が生徒の前で挨拶をしている間、私もホールで保護者を前にして何かを語ったような記憶があります。あまりの緊張で何を話したかよく覚えていませんが、子どもたちも私たちも新たなことにチャレンジするんだ！という意気込みを伝えたかと思えます。入学式が終わり、心身ともに激しく疲労していたはずですが、担任たちと明日以降に続く始業式や開講オリエンテーション期間に向けてミーティングを持ち準備をし終えて皆が教員室を出られたのは翌日でした。その日から担任たちの帰宅時間が0時を過ぎることが重なり、ご家族から健康を案じる電話が掛かってくることもありました。市立女子高校から設置者移管による私学共学校への「全国初」の試みは色々な事案を生じさせました。けれどもそれは両者にとって同じです。立命館の生徒も保護者も教員も、守山女子の生徒も保護者も教員にとっても初めてのことで、今が当たり前になっている立命館守山高校の姿からは想像できないような異例なことばかりでした。

開校1年目は旧守山女子高校の校舎で一期生を迎え入れました。始業式当日、男子高校生が珍しいものだから2・3年生が登

校してくる男子高校生を見てざわめいていました。50年近く女子生徒が往来するだけだった学校周辺に骨太の男子高校生が行き来するようになりました。男子生徒は高張るので、ご近所の方から「男子が怖い」や「道にはみ出て危ない」などの電話をいただきました。校舎は外付きの狭い廊下でしたから、すれ違うときもお互いに体を除け気遣いました。女子高校生仕様の構造物ですから相対的に小さく体育の授業や課外活動は苦勞と工夫の連続でした。



既存の女子クラブに男子が合流する場合と新たに作られたクラブもありましたが、体育館やグラウンドやテニスコートが手狭で時間や曜日を割り当てての活動でした。教育課程が異なりますから授業時間も異なります。放課後のクラブ開始時間や定期テスト期間も違います。2・3年生が早く下校する時も、1年生は授業やテストを受けていました。授業や時間割などをマネジメントする教務主任は立命館在籍教員と守山女子採用教員の二人が居ました。お互いのカリキュラムを妨げないように工夫しながら教育課程を進捗させました。立命館守山としての生徒指導ルールは守山女子高校時代の規定を踏襲し、当時の厳格な規律で生徒指導細則を運用しました。「頭髪」「爪」「スカート」等の点検が定期的に行われました。立命館の他の附属校を知っている生徒や保護者は強く違和感を覚えたことでしょう。教育課程は「立命館」として構築し運用されましたが、校舎もグラウンドもほとんどの施設設備は旧守山女子高校のものを使用していましたので制約や限界も多く、他の附属校のような充実した立派な理科実験施設や実習施設や学食はなく、コンピュータールームもなく、隙間風が入り込み冷暖房もままならない（酷く冷え込んだ翌朝校舎の中に雪が積もっていたこともありましたが）HRや設備に、生徒のほとんどは不満や不平も有ったかと思えます。保護者は、事前の入学説明会で周知され分かってはいたでしょうが、それなりの授業料を払いつつ他附属校と比べものにならない環境に何とも言えぬ感情をお持ちであったろうと思います。しかし、誰もそんな状況に対する不平や不満をぶつけてくる生徒や

保護者は居ませんでした。

それはどれだけ高い授業料を払っても決して学ぶことのできない貴重な学びを経験できたからでしょう。「悲しみと怒り」を持ちながら「守女としての誇り」を持って立命館守山高校生として過ごす先輩たちに敬意と尊重を持つことの大切さを勝部町にあった守山女子高校の校舎や施設で共に学んだからでしょう。「多様性の尊重や他者理解」などと表現したりしますが、一期生たちは先輩たちと同じ空間で過ごし、クラブ活動や体育祭や文化祭などの学校行事などで意見を交わしお互いの考えを理解し受け留めるという作業を通して、「相手への尊重や周囲の人への配慮」を経験し成長していったからこそ、校舎に十分な施設設備がなくとも不満をぐっと飲み込んでくれたのだでしょう。保護者も、そんな子どもの成長を見ることで立命館守山の教育実践を理解いただき私たちの教育を温かく見守っていただくことができたのだと思います。



今回、3000字程度という指定がございました。開校一期生の歩みを3000字程度で書き切れるものではありません。他にも書かなければならないこと、書くべきことはたくさんあります。しかし、少しでも開校期の雰囲気が伝わる内容にと思い作成させていただきました。もっと違う切り口で作成したものもありますが、今の立命館守山の教員や生徒たちに読んで欲しい内容にと思い、敢えて、これを周年記念誌に投稿させていただきました。



三宅キャンパス竣工と移転

Masatomo Kitada

北田 正知（立命館守山高等学校開設準備室 中等教育部付課長）
立命館守山中学校・高等学校 初代事務長

1. 2005年5月に、守山女子高校（設置者：守山市）から設置者を学校法人立命館に移管する方法で立命館守山高等学校を設置することの覚書が締結された。これを受けて滋賀県私学校長会での審議を経て、滋賀県総務部私学課に学校設置者移管申請と、教育課程（カリキュラム）の普通科6クラス240人を追加・拡充するカリキュラム変更申請等を行い、滋賀県から認可を受けたのは、2005年10月28日であった。

2. 2005年は次の3つを同時進行する必要があった。

- ① 立命館守山高等学校の設置申請業務並びに2006年4月からの開校準備
- ② 2006年度 普通科の生徒募集業務
- ③ すでに高槻にキャンパス移転していた平安女学院琵琶湖守山キャンパス跡地（守山市が誘致、平安女学院が建設 所有は平安女学院）を、立命館守山高等学校（のちに中学校併設予定）のキャンパスとして確保・利用のための折衝並びに準備作業。

3. 準備作業を現場で行う必要から、2005年5月に守山駅前の現「語らい学び舎通り」に「立命館守山高校開設準備室」を構えた。これらの、半ば手探りの計画作業を支えたのは、立命館宇治高校・北海道の立命館慶祥高校の附属校化の取り組みの経験、BKC琵琶湖草津キャンパスの設置などの経験を持つスタッフの存在とノウハウの蓄積であり、そして何よりも折衝の経緯の中で培われた守山市の関係者への信頼であった。立命館は中等教育部や施設部門を有していることから、その中の知識や経験を持つメンバーや、一級建築士の資格を持つスタッフが開設準備室に配置されたことが大きかった。

ここで議論された「立命館守山の学校づくりコンセプト」は、



2005年 秋に準備された学校案内パンフレット

当時の学校案内パンフレットに集約されている。

4. 立命館守山中学校・高等学校の教育コンセプトと教育活動の展開は、三宅キャンパスでの教育を前提に構想された。平安女学院・守山市・立命館の3者の合意ができ、2005年9月に平安女学院三宅キャンパスは守山市に寄付され、10月13日に守山市議会の議決を経て、立命館に譲渡された。三宅キャンパス開設の具体化に着手できたのは、キャンパス引き渡しを受け建物設計図が入手できた2005年11月1日からであった。生徒募集の関係から先行して議論した教育コンセプトを具体的に施設やカリキュラムに落とし込む段階になると、キャンパス面積の制約、工期と経費の関係で既存施設改修を基本にせざるを得ず、我慢と知恵と工夫を絞り出すことの連続であったが、一つ一つを実現していく楽しさとそこでの生徒の姿が想像できて楽しかった。



2005年 生徒募集用広告

新キャンパスの時計塔は中央寄りで描かれている

5. 具体的な準備作業の内容は次の通りである。

(1) 勝部キャンパスで、普通科1年生6クラス（240名）を、守山女子高校旧課程の2・3年生と一緒に、一つの学校として運用するための最低限の建物改修（トイレ確保、プレハブで更衣室を確保、その2階に入試広報室を設置）、教員室2つで運用（英語科、情報ビジネス科、生活総合科と普通科の教員を収容するスペースが確保できず、朝礼・伝達時のみ全員会合した。）

学校運営の基本原則の設定と確認：学校は一つ、生徒は一つの大原則のもとに 式典や学校行事 生徒指導 教育に関する指揮命令の系統を確認。特に雇用帰属関係が異なる教員集団が一つの学校として教育を行うという「あり方」は、初めての経験であり、丁寧さと慎重さを要し、常に教育の中心に「生徒」を置いた制度設計と対応を心掛けた。



2006年 開校した勝部校舎（元守山女子高校の建物）
中庭グランドから西南方向 奥は図書館

(2) 2007年3月の勝部キャンパスから三宅キャンパスへの移転は、生活総合科の教育課程に必要な教育機器資材（縫製機器、マネキン、調理器具）や、体育用機器等であり、移設にあたって守山市の学校で活用するものと立命館で寄贈を受けるものとの仕分け作業を行い、移動した。

(3) 三宅の新キャンパスの設計と留意点

- ① 敷地面積に限界があること、工期が15か月ほどしかないこと、中学校開設を前提とすることから、新設は高校棟と体育館のみとし、極力、現有の平安女学院の大学用施設・建物を中等教育用に改修する。（中学校棟は大学の個人研究室棟を改修としたが、天井高の確保が難しく、ダクトや配管が厳しい大改修となった。結果的に広い廊下が残し、授業や休憩スペース、行事や発表会展示などに活用できるようにした。）
- ② キャンパスの基本設計はヴォーリズ設計事務所の手になるものであり、外観の特徴はできるだけ残すようにした。（キャンパスの芝生、照明、チャペルも残して、授業・集会室・学校行事等で活用した。）下足スペースが確保できないため1足制とし、建物を渡り廊下で繋いだ。
- ③ 理数系教育を重視し、BKCキャンパス理科学部への進学やSSH（スーパーサイエンスハイスクール）への対応を視野に入れた施設・設備配置とした（生徒一人一人が直接実験できる先進的な設備・機器を持った実験室等。高校と中学の理系実験室の共用、このため高校棟と中学棟を、渡り廊下で繋いだ。）
新設の高校棟は、2-4階に6+2の教室配置としたが、その後のフロンティアコース展開で、教室増が必要となり、北側への増設を余儀なくされた。体育館は2階建とし、2階アリーナに全校集会機能を持たせ、1階は畳と床張りのフロア・トレーニングルームと更衣室・シャワールームを設けた。既設の1階建て体育館は、アリーナ機能を残しつつ、SSH対応の工作機械やラボを併設収容し、アリーナでも授業やプレゼンができる大型スクリーンを備えた多目的施設とした。
- ④ 食堂は運営を立命館生協に委託し、そのまま活用した。座席数が少なく、中高の昼休みをずらして対応することとした。
- ⑤ 図書館は2階にホール（340人収容）を有しており、そのまま活用することとしたが、1階の半分は高校教員室を配置せざるを得ず、その分、開架式図書と閲覧室は十分な広さをとれ

なかった。備品等の工夫でクラス単位の授業等に利用できるようにした。施設狭隘の制約は、図書館にとってはバックヤードが確保できず、教員用図書や資料、地域連携の取り組みの資料等の収蔵に課題が残った。一方、高校教員室も手狭で躯体が円形であり使い勝手が悪く、施設流用による問題点を先生方に押し付ける結果となった。

⑥ 三宅キャンパスでは新規グラウンド確保の余地がなく、現在のテニスコート・ハンドボールコートが置ける程度であった。（設置申請上は、勝部校舎の利用含めてクリアしたが、現実には守山市市民ホール隣接の土地を借用してソフトボール授業等に利用した。現在は保育園になっている。運動会も市民グラウンドを借用して行った。）

喫緊の課題として隣接地でのグラウンド確保があった。（これは移転時には間にあわず、移転後に 隣接田地を購入し、人工芝のグラウンドを建設した。三宅地区の農地を所有されていた方々ならびに農協関係者・守山市の関係の方々には大変お世話になった。グラウンドが南北の田地を塞ぐので、グラウンド東側の地下には用水路・保全用の暗渠が通っている。このため東側スタンドの幅が制約された。）



2006年 教育コンセプトを示した学校案内パンフレット
現在のグランドはまだない

⑦ 通学は、守山駅前から三宅キャンパスまでの自転車通学は禁止として、通学バスを走らせた。現在の「語らい学び舎通り」が狭く、小学校・保育園・県立守山高校が集中していることから通学時間帯に自転車が集まることは危険との近隣と守山市からの強い要請による。近江鉄道へのバス運行をお願いし、守山市には守山駅前のバスターミナルの拡張・改修をお願いした。学校西門北の転回場所も守山市の協力で確保した。

⑧ 守山市市民ホールの活用

新設の体育館2階は、設計段階での想定と異なり、椅子の出し入れを伴う行事や照明・音響設備を伴う利用には限界があった。このため早々に対応を余儀なくされた。当初は、式典等の利用に限定していた守山市市民ホールの利用が、文化祭・演劇祭、各種発表会等への利用にまで拡大でき教育環境は大きく前進できた。

- ⑨ 滋賀県の間伐材を使用し、新キャンパスの教室の机・椅子をすべて木製とした。滋賀県環境保護補助金を利用し、彦根・長浜の仏壇作成技術を生かして実現できた。2006年入学生徒の保護者の提案がきっかけであった。
- ⑩ 守山女子高校の旧課程で学ぶ3年生は、三宅の新キャンパスで最後の1年を終えることができた。勝部の守山女子高校の遺構として、三宅キャンパスの正門北側に「友情の庭」を移し、開校当初は守山女子高校の記念物品等を展示するスペースを確保した。(その後の中学校の展開により、このスペースは廃止せざるを得なかった。) 2007年度の卒業アルバムに写真がある。
- ⑪ その他:キャンパス改修・建物建設にあたり、すべてを洋式水洗トイレ(ウォッシュレット)としたこと、AED(救急救命装置)を建物各階に設置したこと、時計塔の設置(経費の都合で時計は一面のみ、キャンパス向き)、記念碑と記念樹(大楠)の設置(経費は当初予算枠外、いずれも正門付近)、受付機能・キャンパス建物メンテ業務を(株)クレオテックに委託したことなどがあげられる。

6. キャンパス竣工式典は、新キャンパスのお披露目と、守山市民ホールでの式典とした。多くの関係者の努力と熱意で、三宅キャンパスの開設・移転ができたことを示すために、二部構成にして、実際にキャンパス実現にご尽力いただいた方々や、地域の方々、学校移管の主役である生徒の姿を前面に出し、総合大学につながる附属校の姿を示す構成にした。フロア席に招待する方々の名簿作成に苦労したこと、引き出物を地元商店にお願いしたが間に合うかということや、生協食堂で提供する試食ランチが間に合うかなどで気を揉んだ記憶がある。キャンパスお披露目のルートとコメントは、その後のオープンキャンパスのベースとなった。竣工式典の思いは、現在 事務室等の入口西壁に、現場工事関係者氏名を記したプレートに残されている。

7. 勝部校舎の借用期間は、覚書では最長20年であったが、三宅新キャンパスの完成・移転を2007年4月に完了できたので、2008年3月、守山女子高校で入学した生徒の卒業を待って、勝部校舎を解体、守山市に返却することとした。

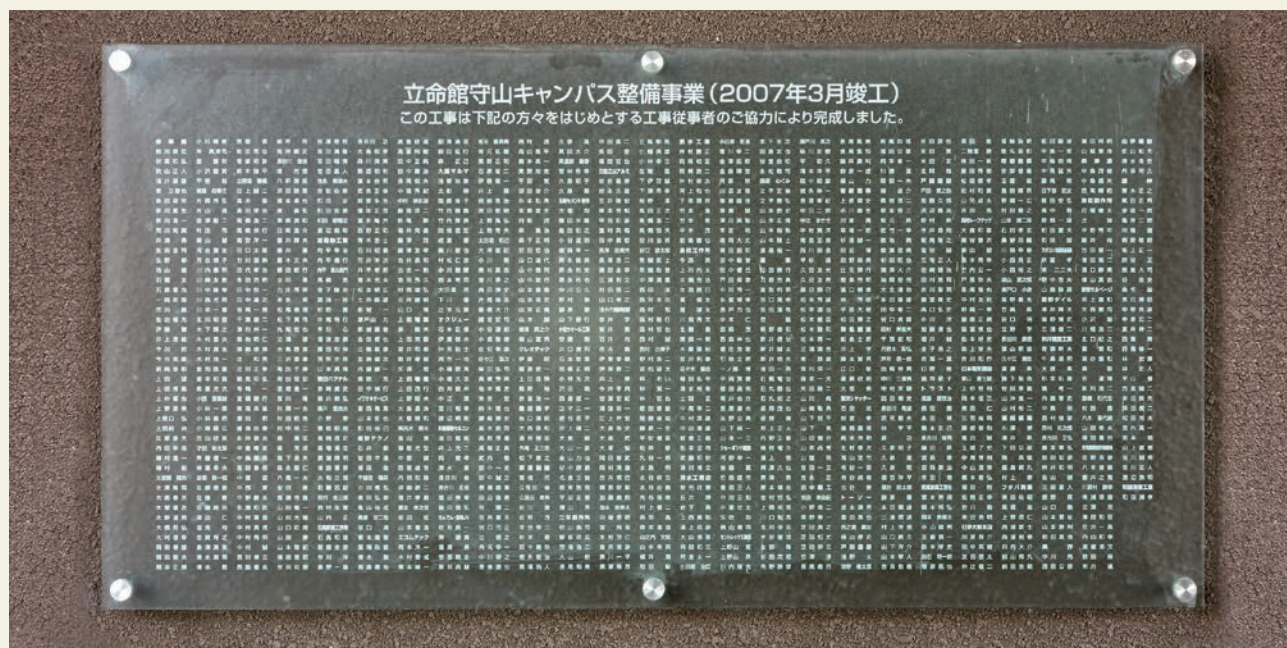
現在、勝部校舎跡地は守山市の生涯学習・教育センターとなり、南側のグラウンド・アーチェリー射場跡地には「森の風こども園」がある。跡地には、かつての守山女子高校の正門・門扉と記念碑が建っている。



2006年 工事中の三宅キャンパス北門付近 背後は比良山



2006年 工事中の三宅キャンパス中学棟・食堂の屋根 時計塔はまだない



三宅キャンパス工事関係者の氏名を記したプレート 事務室入口西側の壁に設置

2007年3月 三宅キャンパス竣工式 守山キャンパス開設・立命館守山中学校開校式典



「場」の提供に徹した日々 —中学1期生の歩み—

Shinji Inoue

井上 眞二（中学1期生 学年主任）

1. 中学1期生による学校づくり

高校開設に遅れること1年、2007年4月、高校が勝部から現在の三宅キャンパスに移転すると同時に立命館守山中学校は開校した。初年度は、小川多聞教頭以下、附属校の深草、宇治、慶祥をはじめ、他私学、公立中学校から9名の教員が集結した。生徒数は中学1年生5学級186名。学校づくりの第一課題は、既に多様な展開をしている他附属校生と遜色ない学校生活へと新入生を導くことにあった。しかも、それは3年後ではなく、入学した今日からでなければならない。施設は最良の環境であった。まずは、この環境を生かし、期待に胸膨らませる新入生の意欲を学びの満足度に高めていくために、私たちは以下の2点を常に意識して指導に当たるようにした。

(1) 立命館アイデンティティを育む

大学のキャンパス訪問などを通じて、先達による伝統を持たない守山の生徒に立命館学園の一員であるという自覚と誇りを育む。

学園の誇りある姿を伝えることを大前提に、戦後の教育理念である「平和と民主主義」を礎として活躍する地球市民を育てることを謳った「立命館憲章」（2006年制定）の意義を、学園の歴史とともに学習する機会「立命科」を設定した。

(2) 中高6年一貫教育のフロントランナーとして走り続ける学年

第一期の立守文化を創造するために、基礎学力の保障に加え、行事や多様な体験活動の場を用意し、その全てを本物志向でやりきる力を育てる。

これを当面の目標に、基礎学力対策を図り、全ての行事に仲間とともに本気で取り組み、感動を分かち合える学級・学年・全校集団づくりをめざした。

当時は、滋賀県内に私学附属校文化の定着を目指すという目標があり、滋賀県の落ち着いた風土にかない、しかも、斬新な教育の可能性を感じさせる実践を展開したいという思いで、教員総掛かりで取り組みを開始した。3年後、高校のSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)指定による、文理融合教育やBKC理工系誘導の教育展開にどうつながかを、常に意識しながらのスタートだった。ゼロから中学校を創り上げる作業は、発想の自由こそ保障されていたものの、想像以上に困難を伴った。また、1期生は学力幅が広く、「寺子屋」（放課後補習）実施は欠かせなかった。しかし、教員各自が積み上げてきたキャリアをぶつけ合いながら、思う存分に実践できたという点で、私たち教員にとっては、刺激的であり創造的で夢追う日々の連続であった。

入学式直後、京阪神の広域圏から通学してくる生徒たち一人ひとりを理解する手立てとして、まずは、保護者の皆さんに、担任宛の「保護者からの手紙」をお願いした。反応は良く、学校への期待ばかりか「おいたちの記」的に我が子への思いを綴って下さ

る保護者が多く、担任団はその思いを大切に生徒たちを育てていこうと決意を固めあった。その後、各クラス選出のPTA学級委員の方々には意欲的に学校の取組を支えて頂き、誕生したばかりの一貫教育校の6年間で最高のパートナーとして側面から盛り立てていただいた。

2. 学習基盤づくりと「かがやきタイム」

当初の中学校の特色ある取組のひとつは「かがやきタイム」だった。広報誌「リッツ守山」（2007年度前期）掲載記事から、以下に覗うことができる。

【毎朝20分間の「かがやきタイム」で脳を活性化】

3年間で30000ページ・200冊読破を目指す「読書マラソン」の一貫として、毎朝10分間「朝の読書タイム」を実施しています。すでに、入学後半年で3年間の目標を達成した生徒も出ました。読書によるさわやかな一日のスタートは、今や、生徒にとって欠かせない楽しみのひとつとなっています。初年度、中1生徒は平均49冊13500頁を読破しました。

さらに、「朝の読書」に続く10分間は、脳を活性化させるための時間です。数学では教科書の音読、英語では音声アプローチ、国語では「なぞり書き百人一首」や、「五色百人一首」対戦に取り組んでいます。毎日、始業前に単純な「書く」作業や、リズムカルな「音読」、ゲームを取り入れることで脳を活性化させ、一時間目の授業から学習内容がより効果的に身につくようにしています。

3. 地域に学ぶ多様な体験学習

～初年度から旺盛な体験・探究活動を導入～

「中学生にはとにかくたくさんの体験（読書による追体験も含め）の『場』を提供する必要がある」というのが私の持論だった。もちろん学習では絞る。行事や部活動も全力でやれるように背中を押す。さらに、公立校ではできない斬新な体験学習も可能な限り取り入れようと工夫した。多様な体験活動から、何かひとつでも「面白そう」だと掴むもの、感じるものがあればいい。失敗も大歓迎。幸いなことに、学校からは積極的な支援が得られた。教員からも多くの知恵を拝借し、今現在、中学校で取り組んでいる活動のほとんどを初年度から展開することができた。

入学早々、高校生SSH企画による田んぼでの「どろんこドッジボール大会」に始まる田植え体験では、除草、稲刈り、餅つき大会までを通年でセットした。

年間10回に及んだ琵琶湖博物館での「びわこ学習」では、琵琶湖の成立から、採取化石の扱い方、また、現在の環境問題に至るまでを学芸員から直接で指導いただいた。3月には琵琶湖博物館ホールにて「びわこ学習発表会」をグループ単位の発表形式で

実施し、学芸員から専門的な講評をいただいた。当時、中学では構成力を鍛える目的で「手書き作業」を重視していた時期でもあり、紙芝居のプレゼン資料をスクリーンに投影してのユニークな発表が一年生らしく、微笑ましかった。

2年生では、伝統文化体験にも力を入れた。記憶に残るのは、「田楽」指導だ。

田楽は鎌倉幕府の滅亡とともに衰退した芸能であったが、狂言師5世野村万之丞が新たに「総田楽」として創作復活させていた。2006年10月、多賀大社「平成の大造営」を祝した「多賀大社大田楽」に中1生徒有志16名と、教員4名が「京都わざおぎ」によるご指導を受け一般参加を体験した。これを契機に、その後10年間、体育祭での2年生集団演技として「番楽」（田楽踊りの一部）のご指導をいただいた。文化祭では毎年選抜チームが市民ホール舞台上で華やかな衣装を身につけ、わざおぎと一緒に田楽を披露した。

他にも、百畳敷き大風で有名な八日市大風保存会から2年生がご指導を受け、十数枚の2畳大風を制作し、市民運動公園で風上げ大会を行った。

中学体験学習の集大成は2週間に及ぶ3年時のニュージーランド海外研修であるが、教員団にはさらにもう一つ、2年生で「平和学習」を定着させたいという思いがあった。1期生では、広島・大久野島での原爆と毒ガス兵器製造という、戦争による被害・加害の両視点を持った学習に取り組んだ。その後、長崎・APU研修を経て、2026年現在は沖縄民泊を通して多角度から「平和」を掘り下げる取組へと受け継がれている。

4. 本物志向の行事で感動体験を積み重ねる

行事も、創造性、自主性、自発性を育て、6年後に高校文化の最高水準を目指すための土台作りとして、すべて最初から本物を追求した。初年度だから、1期生だから、できなかったという後悔はさせたくない。これが私たちの欲張った目標であった。生徒たちはどうかといえば、「僕らは常にモルモット（実験台）だ」と冗談半分に言い放ちながらも、熱中し、自らドラマを創っていった。

今や、伝統として根付く校内主張大会は、全員が思い思いのテーマで書いた主張を発表するもので、班、クラス、学年と順に代表を選び、全校生徒の投票で選出された生徒が、市の大会に出場する仕組みを整えた。

体育祭は、初年度から5色ブロックによる対抗戦とし、観戦する保護者の声援を受け、熱戦を繰り広げた。

【第1回合唱コンクール発表曲】

中1	1組「マイバラード」	4組「心の瞳」
	2組「新しい世界へ」	5組「Let's search for Tomorrow」
	3組「旅立ちの日に」	185名の学年合唱「夢の世界」
高2	1組「大地讃頌」	4組「光年の旅」
	2組「決意」	5組「COSMOS」
	3組「明日へ」	6組「モルダウ」

合唱コンクールは、全国的に中学で熱心に取り組まれている。しかし、全力で取り組んだ合唱コンで賞を取ることに感動を未経験の1年生に、それをどうやって味わわせるのかは難題だった。

そこで、私は当時高校2年生だった高校入学の1期生に目を付けた。それぞれの出身中学校でリーダーとして感動体験を味わってきた彼らの力を借りることができないものだろうか。合唱を通しての競い合いを、その見本を見せてやって欲しい。その一念で、高校学年団の協力を得、守山市民ホールでの中高1期生によるコラボ合唱コンクール開催にこぎ着けた。思いは的中した。当日、グランプリに輝いた高校生は雄叫びとともに号泣する姿を見せてくれた。翌年から中学生が猛然と取り組みを開始したのはいうまでもない。その歌声は2年後に中3全クラスが金賞を獲得するまでに成長をとげた。勝ち負けにこだわらない、質の高い文化をみんな目指す学校づくりをしてほしいという願いをこめて、これを本校の伝統として大切に育てていきたいと思った。

2009年3月、1期生中学2年生の代議員が発起人となり、生徒会選挙が実施され、1、2年生10名の役員定数に対し、16名の立候補者が立つほどの盛り上がりを見せた。続く2009年5月28日には第1回生徒総会が体育館アリーナで開催された。これにより生徒会活動が第一歩を踏み出すこととなった。

2009年度生徒会年間目標：

集団の中でも自分を発揮できる立命館守山中学校

スローガン：もう一歩前へ、もう一段上へ、仲間と共に未来へ

5. パンデミックを乗り越え、海外研修を実現

2009年5月の国内感染に端を発した、新型インフルエンザのパンデミック（世界的大流行）により、8月に予定されていた第1回中学3年生ニュージーランド研修は、生徒たちに十分な研修が保障できないという理由で中止を余儀なくされた。

予期せぬ中止に生徒も学年教員団も納得がいかない。まずは、様子を見ることにして、その間に、急遽「びわこ1泊英語講座」を計画した。琵琶湖畔の研修施設でネイティブ講師による英語講座を設定しての実施だった。楽しみの要素も加味して、とりあえずは海外研修中止の傷を癒やした。

年末にパンデミックが収束し始めた頃、教員団は、海外研修計画を復活させ、翌年2月24日から2週間の研修を実現させた。帰国後1週間で卒業式というギリギリの選択だった。南半球に属する現地は最高の季節であり、生徒たちは2週間のホームステイと現地校での英語研修を満喫することができた。かくして最大の峠を乗り越え、予定された全ての取組を貫徹し、生徒たちの学校生活は高校へと引き継がれた。

このようにして私たち教員団は、入学直後から1期生の生徒たちに対して、学習発表や学園祭などの行事を一貫して全校行事として位置づけ、中高6年間、学校のフロントランナー（牽引車）であることを要求し続けた。生徒たちは、期待に応え今ある中学校の基盤と、取組に至るプロセスを見事に築き上げてくれた。

中学校草創期の学校づくりを振り返ってみたとき、その歩みの始まりから今につながる本校教育の原点が垣間見えてくる。それは、様々な「場」の提供を通じて「体験」「対話」「探究」を礎に主体的に学び続ける生徒を育てようとする我々の一貫した姿勢である。

「高校生国際みずフォーラム in 湖国・滋賀」までの軌跡を振り返って

Yoshiaki Yagi

八木 良明（SSH推進機構長（当時））

1. はじめに

開校と同時にスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、第1期SSHの一つの到達点となった「高校生国際みずフォーラムin湖国・滋賀（IWF）」までの軌跡を振り返り、SSHと生徒の成長についてまとめておきたい。

2. 「プログラム」と「プロジェクト」を軸に進めた1年目のSSH

2006年4月、新たに入学した立命館守山の1期生と旧市立守山女子の先生と2、3年生の生徒との学校づくりが始まった。文化祭や体育祭は守山女子の伝統を引き継ぎながら、SSHは1期生を中心に取り組みを進めていった。

初めて1年生の学年集会でSSHの取り組みについて説明会を行ったのが5月である。SSHの取り組みテーマを「水・環境・くらしと産業 サイエンスとテクノロジーが拓く未来」とし、全員が取り組む「プログラム」と希望者が取り組む「プロジェクト」の説明を行なった。

社会福祉施設での土曜日の5回連続の実習内容の交流を通じて、社会性の涵養を目的とした「ソーシャルワークプログラム」と、3～4人のグループが「水と化学」「水とくらし」「水と自然環境」「水とテクノロジー」の1つを選んでテーマ設定し、夏休みに調査活動・実験を行い、その成果をクラス内で発表。そして、4つのジャンルごとに優秀なプレゼンを選抜し、2月の生徒研究発表会につなげる「サイエンスディスカバリープログラム」を設定した。

「プロジェクト」は、「オーストラリアの動物と習性」「森林と林業」「海洋学」などのテーマを深める「タスマニア研修」、立命館大学の顧問弁理士と連携し、建物の緑化に関する商品などの開発をすすめる「エジソンプロジェクト」、身近なタンポポ（シロバナ、カンサイ、セイヨウ）の植生分布から自然環境を考える「ディスカバリーフローラ&ファウナプロジェクト」、びわこ豊穡の郷と連携した「エコツーリズムプロジェクト」など、いずれも成果を2月の生徒研究発表会で発表し、参加者全体で共有する組み立てにした。

こうした「プログラム」と「プロジェクト」を進めながら準備してきたのが、理系誘導の取り組みである。7月に立命館大学びわこくさつキャンパス（BKC）で開催した「理系デモンストレーションデイ」では、情報理工学部特命教授の飯田健夫教授による「テクノロジーが拓く未来 ～理工系はこんなに面白い」と滋賀県環境生協理事長の藤井絢子氏による「琵琶湖・くらしと産業 ～高校生に期待すること」の2本の講演と理工系学部の研究室訪問を行った。BKCに近い立地を活かし、理系を打ち出した生徒募集にも関わらず、4月当初の理系希望者は全体の30%であったが、

生徒たちはSSHの「プロジェクト」に積極的に参加し、「化学」や学校設定科目「地球科学」の効果もあり、企画終了後のアンケートでは理系進学希望生徒は42%に達した。

これらと合わせて「アドバンストブレイスメント科目（AP科目）」の開講の準備も進められた。これは2005年度、BKC、理工・情報理工学部執行部および立命館守山高等学校設置準備室の協議で、20単位（高校10単位に相当）を上限に高校在学中に大学単位認定を行い、ファストトラック制（大学入学後修士課程修了までを5年に短縮する制度）をひいて、高い意欲と実力を持った理工系進学者を多数送り出すというもので、本校SSHの目玉となる取り組みであった。議論を重ね、「Human Technology 概論1（前期2単位）・2（後期2単位）」（学校設定科目「探究1」）を2007年度から開講することが決定した。科学技術と人間とのかかわりについて広く考察を進める内容で、理工系を目指す生徒にとってビジョンを形成し、現代的課題への関心を高めることに資するものとなった。

あと主な取り組みとして、11月にBKCでのSSH運営指導委員会（SSH校は必ず実施）の後、高校1年生を対象に記念講演、生徒の「プロジェクト」の取り組みの発表と運営指導委員との交流会を実施。2月に第1回SSH研究発表会（SSH校は必ず実施）を実施し、「プロジェクト」のポスターセッションや「サイエンスディスカバリープログラム」の優秀プレゼンなどの発表を行った。

3. 第1期SSHの基本的な枠組みができた2、3年目の取り組み

高大接続については「Human Technology概論」が開講され、2年生のほとんどの生徒が受講した。そして、3年生で理系選択する生徒の中で希望する生徒にはBKCや守山キャンパスで開講される「アドバンストブレイスメント科目（AP科目）」に科目等履修生として受講でき、高校と大学での単位履修のダブルカウントを行うシステムが2年目に完成した。

高大連携では、3年生対象に「学部学科説明会&質問会（6月 学部選択のミスマッチ防止）」、2年生対象に「理工系学部長講演会（コース選択前に実施）」、「生物1」での「生命倫理講演会」、「物理1」での「スバゲッティブリッジコンテスト」、「夏期高大連携講座（BKC 大学での研究のイメージを高める講演と研究室訪問）」、1年生対象に「理系デモンストレーションデイ（BKC 年々改善を重ねた）」や「文理融合講座（衣笠 大学での文理融合の研究成果の体験など）」などが行われた。また、3年目には全学年対象の有志に「SRセンター実習（BKC 放射光を用いた物性分析）」も実施した。

正課の授業の中では1年生で理科、国語、情報、英語の教科連

携による「サイエンスパフォーマンス」、「総合的な学習の時間」を活用した1年生の「ソーシャルワーク（1年目と同様）」、2年生の「レイクアカデミー（琵琶湖博物館・学芸員との連携）」及び「インターンシップ（製造業・サービス業の事業所での夏休み中の就業体験）」「ロボティクス講座」などを実施し、年度進行に応じて改善・展開した。

課外の取り組みでは昨年度の当初のプロジェクトに「琵琶湖プロジェクト（ブルーギルの食性調査など）」、「バイオカートプロジェクト（バイオディーゼル燃焼で走るカート作製とその環境性能測定など）」「ロボットプロジェクト（大学ロボット技術研究会の新歓ロボコン参加からロボカップジュニアの参加へ発展）」が加わり、開校2年目に創部したSci-Tech部の部員が中心になって取り組みを進めるようになった。

こうして第一期SSHの基本的な枠組みが形をなしてきた。そして、第一期生3年理系クラスは114名（全体の50.2%）となり、内部推薦の結果85名（37.4%）の理系学部への進学が決定した。

4. IWFへの準備を始めた2年目

「高校生国際みずフォーラム（仮称）第1回準備委員会」を行ったのが、2007年9月である。そこで、開催時期を2期生が3年生の2010年2月とした。そして、正課・課外の取り組みを有機的にIWFにつなぐこと、取り組みを進めるための生徒組織を整理して取り組みを進めること、それらを指導する教員組織づくりを進めること、国内外への参加組織を進めることなどの課題を明らかにし、定期的に進捗状況を議論・確認しながら進めた。

国内外への参加組織は、立命館高校主催のInternational Student Science Fair（ISSF）での参加呼びかけ、APUのネットワークの活用、水環境の課題に取り組む国内SSH校や滋賀県環境学習支援センターからの紹介による学校への呼びかけなど、さまざまなネットワークを駆使した。

正課の取り組みについては3年目に1、2年生全員が取り組んだ「サイエンスグランプリ」を実施した。IWFの3つの研究カテゴリ「水と科学」「水と生物」「水とくらし」と「自然科学一般」の4つのジャンルから1つ選択し、グループごとに独自にテーマを決めて課題研究を行い、10月の一斉発表会を経て、2月の生徒研究発表会で共有した。課外の取り組みでは、前述の各種プロジェクトをSci-Tech部の部員が中心となって発展させていった。

生徒組織は2期生が1年生2月の土曜講座の選択説明の際に、IWFを2年後に開催することを発表した。3年目の日英サイエンスワークショップ、タスマニア研修、立命館高校主催のISSFとRitsサイエンスアカデミーなど、国際性の高いSSH企画に参加した生徒を中心に16名がIWF準備委員に立候補した。12月から活動を始め、プレフォーラムと位置付けた2月の生徒研究発表会でのIWF国内参加校との交流と「プレフォーラム宣言」の作成・発表、次年度のIWF運営委員会の組織体制づくりの準備を進めた。

2009年度を迎え、生徒組織が整った。IWF運営委員会19名（準備委員に3名追加 全体会・分科会・交流・広報・庶務・映像の6班体制）、各班の動きを支えるIWF実行委員会50名（クラス役員として各クラスから2名+α）、そして、交流班を支えるバディー55名（国際部所轄の交流委員+有志）である。4年目秋からは、メ

ディアセンター1階入り口に大きなカウントダウンタイマーが稼働し、冬にはIWFロゴ入りパーカーを着た実行委員が「ウォーターライン（白と水色の布に書かれた寄せ書きでの回廊のデコレーション）」の準備を進め、雰囲気の高まりを図った。

5. 4年目に開催した高校生国際みずフォーラム in 湖国・滋賀（IWF）

2010年2月20日～22日、高校生国際みずフォーラムin湖国・滋賀が開催された。これは、持続可能な社会の実現に必要な水に関わる多くの課題を「水と科学」「水と生物」「水とくらし」の3つのカテゴリーの研究発表を通して、水に関する見識を深め、こうした現状を理解し、課題の解決のためにどのような行動をしていくべきかを考え、世界から参加した生徒が解決のために向けた共同宣言を発信するという取り組みである。

8カ国20校（うち海外12校）から130名と滋賀県知事を迎え、本校関係者を含む総勢800名が参加した。開会式は参加校紹介と動画上映に続き、琴の演奏と「水の環」の書道パフォーマンスから始まった。生徒たちが作り上げた見事なオープニングは感動を呼んだ。1日目の分科会には上記3つのカテゴリーに6本ずつのプレゼン発表、午後のポスターセッションでは体育館で46本の発表が行われた。SSH3年目の「サイエンスグランプリ」の優秀作品「かばたのくらしと水文化」を4年目にフィールドワークして深めた作品とSci-Tech部の「琵琶湖南湖におけるブルーギルの食性」を本校の代表作品としてプレゼン発表を行った。そして、学校設定科目「地球科学」の優秀作品や「ハーベストムーンプロジェクト」、Sci-Tech部のバイオカートやロボカップジュニアなどの取り組みをポスターセッションで発表した。共同宣言は、IWF運営委員会のメンバーが中心になって起草し、事前に参加校の代表者からネットを通じて意見を求めた。そして、1日目の夕食交流会の後、参加校代表者と共同宣言の内容全般の同意を確認したのち、字句修正を行い完成させた。そして、2日目の全体会でIWF運営委員長が代表して発表するとともに、各校代表者がアクションプランなどのコメントを述べ、次回開催校のFort Richmond Collegeの代表生徒にIWFのシンボル旗を渡して閉幕した。

6. おわりに

本校教職員、学園関係者、滋賀県・守山のさまざまな団体・個人、他のSSH関係校をはじめ、多くの方々の支援のおかげでSSHが進められてきたことに改めて感謝いたしたい。取り組みの中には提起が遅くなって、生徒や指導される先生方にとって厳しいものもあったかと思う。ご容赦いただければ幸いである。

振り返ってみると、SSHを通して数多くの生徒の成長を見てきた。その生徒に共通しているのは「本物に触れてきたこと。学校の外に出て地域～海外で学ぶこと。外部の評価を得て、振り返りを大切にすること。自分のキャリアアップのために、さまざまな機会を活かして主体的に参加すること。」ということになるのでないかと感じている。現在、こうした取り組みが盛んに実践されている。これからの立命館守山のますますの発展を願ってやまない。

生徒会自主活動

Hirokazu Koyama

小山 寛一（中学生徒部 主任（当時））

中学生徒会の発足とその活動、そして文化祭の取り組みに関しての2点について記しておきたい。

1. 中学校生徒会活動について 生徒会発足

2007年、立命館守山中学校が開校した。この時入学した一期生は、HR委員を中心に、生き活きと動き、行事に取り組むことを覚えた。この時のHR委員が2年次に代議員となり、生徒会の立ち上げについて議論できるようになった。そこで代議員会で「一人一人の生徒にとって、どんな学校が理想だと思うのか?」「立命館守山中学校という生徒集団にとって、どんな学校が理想だと思うのか?」という議論からスタートし、全クラスに「現状分析・理想としたい学校像・生徒会の役割や必要性」を提案し、クラス討議を経て決定していった。中には、クラスで「生徒会は要らない。面倒だから。」と発言する生徒もいたが、圧倒的な支持を得て1月の終わりには、生徒会の発足が決定され、2月末に本部役員選挙が行えた。発足のための議論と準備にほぼ1年かかったのであった。

三年目、ついに生徒会活動が始まった。第一回生徒総会の議案でまず提案されたのは、生徒会規約である。その規約の前文には、前年度一年をかけた議論の主題が詰め込まれているので、長いが引用しておく。「私たち立命館守山中学校の生徒は、立命館の建学の精神である『自由と清新』、教育理念である『平和と民主主義』に基づき、『未来を信じ、未来に生きる』という精神をもって、私たち自身の人間形成をはかっていくことを目標としている。私たちはあらゆる問題を真剣に考え、広い視野と正しい判

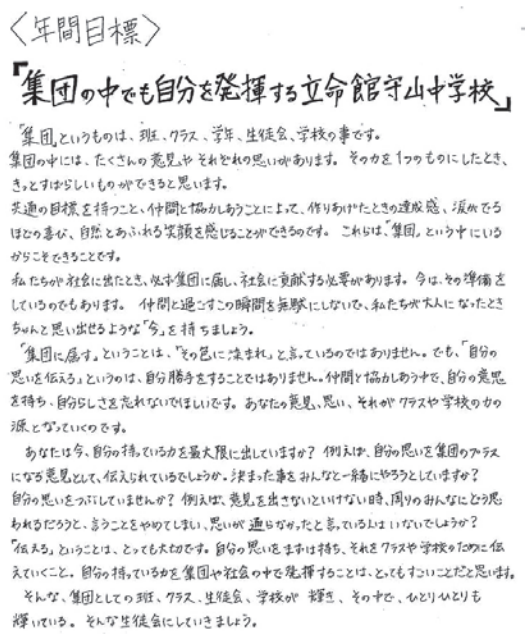
断力を養い、自主的民主的活動を行う。それにより、私たちの人間性を高めることが中学生活における重要な目標の一つであると考える。その目標は、一人一人の学校生活を健全で有意義なものに高めていこうとする努力を通して、生徒会が向上することにより達成される。また、生徒会が高邁な理想を実現していこうとする活動を通して、個人が向上することによって達成される。」

翌2010年の生徒総会では、緊急提案として生徒宣言が提起、採択された。（左下画像）これは、生徒指導事象があった際、例えば課題のある生徒に対し、嫌な目で見te遠ざけ、やり過ぎのではなく、自分たち自身でみんなが安心して生活できるようにしたいと本部役員会で議論していた成果だと言える。

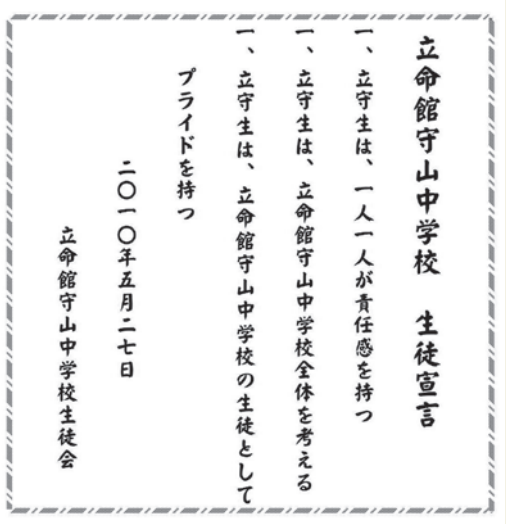
この頃、本部役員たちがよく口にしていた「立命館プライド」とは、規約前文の精神にあるように「自分たちの問題を、自分たちで考え、自分たちの生活をより良くしていく。」あり方なのであった。それが本部役員のみならず、生徒全体の意識に浸透するためには、丁寧な討議が必要だった。

例えば、総会の議案書についても、個人、班、クラスと討議を重ねた。しかし、項目を並べても議論は深まらない。そこで、本部役員が目標や方針の設定理由を書いたので、ここに載せておく。（下部画像）

生徒たちが共有しようとしていた「立命館プライド」を根底で支えていたのは、“この学校が好きだ”という気持ちであったと考える。



年間目標



生徒宣言

生徒会行事に関して

中学の生徒会活動は、中学生の発達段階からいっても重要なことだ。「周りの人間は信用するに足る」「自分も周りの人間に貢献できる」とまさに生徒会行事は体験を通して学ぶことができるのである。「他者と関わり合って、それぞれの個性を生かしあい、補い合って、個人と自分たちの集団を高めていく具体的な活動の場」である。

下に生徒会年間行事を挙げておく。

生徒たちは、クラス集団での活動だけではなく、縦割り集団であるブロックでの活動を通して、1年間を通じて、自主性と集団での学びを身につけていった。そしてそれを3年間で螺旋階段を上げるように積み重ねていく。生徒たちは泣いて喜んだり、悔しがったりしながら、仲良くなっていった。「学校が楽しい」という言葉を生徒が口にしていたのはこのプロセスがあつてのことだ。

月	生徒会活動
4	入学式・対面式 新入生歓迎会・部活紹介・3年アピール集会 生徒総会・1. 2年アピール集会
5	生徒総会・1. 2年アピール集会
6	ブロック結成集会・ブロック教室移動 <バックデコ制作開始> <合唱コンクール・選曲（ブロック曲）>
10	文化祭
11	体育祭
2	合唱コンクール 生徒会役員改選
3	3年生を送る会・ブロック解団式 生徒会役員会宿

ブロック結成：3年生のアピール集会から1・2年生のアピール集会を経て、自分たちでブロックを決定するしくみ
文化祭、体育祭、合唱コンクールのそれぞれでクラス、ブロックで取り組むしくみ
バックデコ：ブロック活動時のブロックの象徴

生徒会年間行事

2. 文化祭の取り組みについて 文化祭という「ハレ」のしかけ

共働することで、生徒個人も集団も全体も高まることを目指した取り組みの頂点は、文化祭であった。それは中高が一体となり、地域社会にアピールできる生徒たちの「ハレ」の舞台であった。夜祭があり、花火が打ち上げられる「ハレ」の日を迎えるために、日々の「ケ」で一生懸命努力する。思い切り自己表現できる「ハレ」の場と地道な下積みの日常のギャップ、そのどちらもが大切で、互いを支え合っていることを体験することが、今後の人生において「ケ」の仕事と「ハレ」の人生を創出する力となると考える。

立命館守山の開校当時のキャッチフレーズ「地域に学び、世界に発信する」を意識して、文化祭は当初から一般公開を視野に入れていた。そのために重要視したのが、次の3つの柱である。

「質の高い文化の発信」を

高3のホールでの演劇を頂点に、それまでの中1～高2の各学年で、必要な能力（調査、もの作り、脚本、音響等）を段階的に身につけさせていくように発表内容を整備した。また、本物に触れさせる機会をと、劇団PEOPLE PURPLEに劇の指導に来てもらったり、守山市民ホールの舞台監督であった小森さんに舞台の使い方をレクチャーしてもらったりということを行っていったのである。

「生徒の手による文化祭の運営」を

生徒の実行委員による運営体制の構築は、2010年に大きな転換を迎えた。薄井先生と見学に行った筑波大駒場高校の文化祭が衝撃的だったからだ。そこでは、生徒たちが完全に文化祭全体を管理運営しており、教員が出る場面は全くなく、本当に文化祭が生徒たちの手にあった。翌年から実行委員会は体制を変え、

高3生は、市民ホールの運営に注力し、中1から高2生までのメンバーですべての運営を担うこととなった。その中心となった高2の実行委員長や事務局長には、中学生徒会本部役員の初代のメンバーが名前を連ねた。ここから、「日本一の文化祭」「来場者1万人」をスローガンに、真に生徒の手による文化祭運営への歩みが始まったのである。



文化祭門

「地域を意識した取り組み」を

以後、段階的にではあるが、文化祭実行委員会の生徒たちが、地域の大人との打ち合わせも担うようになっていった。守山市商工会議所にお願ひに行つて、飲食店業者に来店してもらったり、花火師さんとイメージや曲の打ち合わせをしたり、クレオテックとの施設管理の打ち合わせにも入ったりと活躍の場を少しずつ広げていった。

また、当日は出店されたとの店にも、実行委員が手伝いに入り、会場ではゲスト担当の実行委員が「おもてなし」を意識した対応で来場されたゲストから好評を得ていた。これらの活動は、地域に学校を根付かせると共に、生徒たちのキャリア教育につながる活動であったと言える。

文化祭の来場者は、1万人を超え、対外的にも好評を博すようになった。いつの間に来場されたのか、30年にわたり、約1000校の文化祭を見ているという文化祭マニアの人のブログに「新設10年経たずに、このレベルの文化祭は奇跡だ。」と書かれた。

確かにあの時期の立命館守山中学校・高等学校の文化祭は輝いていたし、それを誇りと思っていた生徒も多く存在していた。さらには、文化祭を見に来て、入学を決めた生徒も多く存在した。今、文化祭に再度力を入れ始めていると聞いている、今後さらに発展することを期待したい。

3. 終わりに

社会学者の宮台真司は「人を幸せにして自分も幸せになるには、人を幸せにする価値を見つけるための体験が必要」だと言っている。生徒会活動も文化祭もそれを体験する場にできるのではないか。時代はどんどん移り変わり、社会から子どもたちに求められる表層的な学力も変わる、そもそも学校観すらどんどん変わっていくだろう。しかし、そうであればこそ、かつて中学一期生が議論したように、「生徒一人一人にとって、立命館守山中学校・高等学校は、どんな学校を理想とするのか。」、そこを議論し続け、生徒たちが活動を創りあげられる場を大切に育ててほしい。「この学校が好きだ」と言える生徒たちを育ててほしいと願っている。

未来を切り拓く探究と情熱の軌跡

—フロンティアサイエンスコース(FSC)が紡いだ20年の挑戦と生徒たちの成長譚—

Hideo Yoshikawa

吉川 秀夫（フロンティアサイエンスコース主任（当時））

0. はじめに —20周年の節目に寄せて—

立命館守山高等学校が産声を上げてから20年。本校は「自由と清新」「平和と民主主義」という学園の教学理念を滋養の地に根差させながら、常に時代の一步先を見据えた教育改革を断行してきた。その中であって、独自の輝きを放ち、本校の理数教育および外部難関大学受験指導のフロントランナーとして道を切り拓いてきたのが「フロンティアサイエンスコース（以下、FSC）」である。

FSCの歩みは、単なる進学実績の追求の歴史ではない。それは、まだ見ぬ未来に挑む生徒たちの可能性を信じ、昼夜を問わず理想の教育環境を模索し続けた教員たちの熱意の軌跡であり、その熱い想いに触れて自己を深く見つめ直し、大きく羽ばたいていった生徒たちの精神的成長のドラマである。創立20周年という記念すべき節目を迎え、ここにFSCの黎明期から1期生の卒業、そして現在へと脈々と受け継がれる「FSCスピリット」の真髄を、当時の息遣いとともに振り返りたい。

1. コース黎明期の挑戦

—「一味違った外部受験コース」の誕生—

FSCの歴史の始まりは、2008年（平成20年）にさかのぼる。当時、立命館守山中学校の1期生が2年生に進級するタイミングであった。理工系進学重視という本校の基本コンセプトに基づきながらも、学園の中にはひとつの大きな課題が存在していた。それは、中入生（中学校入学者）が抱く多様な進路実現、とりわけ立命館大学に設置されていない「医学・看護などの医療系学部」や「農学・生命科学系統」への進学希望にどのように応えるか、という問いであった。

当初は「医学部進学プログラム」という限定的な枠組みとしての検討であり、独立したコースの設置までは想定していなかった。しかし、中学3年次から外部大学受験を見据えた「到達度別授業」を開始すると、生徒たちのなかに驚くべき変化が現れ始めた。1期生たちが互いに刺激し合い、凄まじい頑張りによって学力を急速に向上させていったのである。その姿を目の当たりにした教員たちは突き動かされた。「この生徒たちの高い志を、組織として全力で支え、難関外部大学の入試を突破できる確かな理数系の学力を育てる教育モデルを創ろう」。こうして、1クラス編成の独立コースとして、2010年度の正式開設に向けた準備が一気に加速した。

2009年度に組織された「新コースカリキュラム委員会」の議論は白熱を極めた。建学の精神を具現化し、最高到達点の理数教育を提供するためには、従来の枠組みを壊す必要があった。教員たちは自宅で夜遅くまでかかって作成した案を毎週持ち寄

り、机を突き合わせ、教育課程の細部に至るまでシミュレーションを繰り返した。

高校3年次に十分な入試演習期間を確保するため、高校2年次終了（遅くとも3年次の7月）までに全履修項目を終了させるという超前倒しのカリキュラム。それを実現するために週1～2回の「7時限授業」の増設、さらに「土曜授業」や長期休暇中の「特別演習講座」の設定が盛り込まれた。高校からの入学生（編入生）が2年次から合流できるよう、未履修分野を補う「キャッチアップ（CU）授業」の計画も緻密に組み立てられた。

しかし、教員たちが最も腐心したのは、詰め込み型の受験マシーンを育てることでは決してなかった。課外活動や学校行事への制約が大きくなるなかで、いかにして「自己変革能力」と「人間理解に立った高い協調性」を育むか。学力形成を最重要課題としながらも、コースの生徒全員が目標に向かって互いを励まし合い、切磋琢磨して向上しようとする「磁場のようなクラス空間」を創り出すこと。それこそが、FSCの真の設立理念であった。

2. 人間理解の土台をつくる「福祉・保育体験」の衝撃



保育園で園児に絵本の読み聞かせをする生徒たち。他者に寄り添う喜びを肌で学んだ。



作業所での仕事を通じて、障がいを持っている方々の仕事に対する誇りを実感する。

FSCの教育プログラムにおいて、極めて象徴的であり、生徒たちの内面を根底から揺さぶったのが、高校1年次から2年次にかけて実施された「福祉体験・保育実習」である。

この体験は、単なるボランティア活動や行事の枠を超え、将来、医師や研究者として社会のリーダーとなる生徒たちに「人を理解するための努力」を徹底的に求めるプログラムとして設計された。守山市社会福祉協議会や地元の保育所・託児所の全面的な協力を得て、守山市内の10ヶ所以上の施設（蜷の里、湖南ホームタウン、あじさい園、もりやま作業所、びわこみみの里など）へ、4～6人のグループに分かれて3日間にわたり連続で通い結めるという、高校生の研修としては異例の重厚さであった。

実習に臨んだ生徒たちは、普段接することの少ない幼い子どもたちや施設の方々に前に、最初は戸惑いを隠せなかった。しかし、一冊の絵本を手に取り、子どもたちと同じ床に座って『おなべ おなべ にえたかな?』と語りかけるように読み聞かせを始めると、教室の空気は一変した。真剣な眼差しで絵本を見つめる子どもたちの純粋な姿に触れ、生徒たちの緊張はいつしか温かい笑顔へと変わっていった。後ろで見守る男子生徒たちも、胸に名札をつけ、子どもたち一人ひとりの反応を愛おしそうに見つめている。教室内での座学やペーパーテストでは決して測ることのできない、「命の愛おしさ」と「他者に寄り添うことの喜び」を、生徒たちは地域の温かい現場において肌で学んでいった。

一方で、障がい者支援施設での研修前、生徒たちが抱いていた心境は必ずしも前向きなものばかりではなかった。事前の調べ学習だけでは具体的な状況が想像できず、「どのように接してよいかわからない」「感情の起伏が激しくて怖いのではないか」といった不安を抱えていた。生徒たち自身がのちの感想文で赤裸々に告白しているように、そこには「日常的に介助をしてあげなければならないかわいそうな人」という、無意識の偏見や特別な目で見える差別感覚が存在していた。

しかし、3日間の密度の濃い研修は、生徒たちの固定観念を木端微塵に打ち砕いた。入所者の方々の明るく気さくな挨拶や、心からの素直な温かさに触れ、生徒たちの心はみるみる和らいでいった。そして何より、単純に見える袋詰めや野菜の下処理といった作業を、毎日一意専心に、高い技術と誇りを持ってこなしていく姿に強い衝撃を受けた。ある生徒は、視覚障害を持つ方が誰よりも的確かつ迅速に作物を収穫していく職人技のような姿に言葉を失い、深い感動を覚えたという。

生徒たちは気づかされた。「何かをしてあげる」という傲慢な目線ではなく、対等な人間として「その人は何ができるか、何をしたいと考えているのか」を尊重する姿勢の大切さを。この体験は生徒たちの価値観を大きく変換させた。「人はみなハンディを抱えながらも、世の中と繋がって生きていくことを願っている。健常者という単純な線引きがいかに不適切かを知った。共にによりよく生きられる社会をつくる一員にならない」。この福祉・保育体験を通じて、クラスには互いの弱みを恥ずかしがらずに口に出し、周りの支えを素直に受け入れながらチームとして困難を乗り越えるという、大人の集団としての確かな絆が芽生え始めたのである。

3. 世界と出会い、志を高める「ベトナム研修旅行」



多くの方々の善意をベトナムに届ける募金活動



ベトナム孤児院での子どもたちとの交流。言葉は通じなくとも笑顔で確かな絆を育んだ。

福祉体験によって内面を耕された生徒たちは、高校1年次の3学期、FSCのもうひとつの核である「ベトナム海外研修旅行（5泊7日）」へと旅立つ。この研修は、貧困や戦禍の歴史を学び、著しく発展するアジアのエネルギーを体感すると同時に、これまでに培った「探究力」と「人間力」を世界の舞台で試す、極めて多層的な挑戦であった。

研修のプログラムは過酷であり、それゆえに濃密であった。

まず生徒たちは、ベトナム戦争時の枯葉剤の影響を今なお受け、重度の水頭症や四肢障害、知的障害を持つ子どもたちが多数収容されているホーチミンの「孤児院マンノン4」や、仏教寺院が運営する「デュークソン孤児院」を訪問した。外見の凄惨さに、最初は目を背けたくなるような衝撃を受けながらも、福祉体験をくぐり抜けてきた生徒たちの行動は、それまでの海外研修生とは一線を画していた。言葉が全く通じない環境のなかで、「笑顔で優しく接すれば必ず心は通じる」という確信のもと、自然と子どもたちと同じ目線までしゃがみ込み、涙を流しながらもその手を握り、抱きかき寄せた。笑顔を交わし、一緒に遊ぶなかで、言葉の壁を越えた人間愛の原点に触れたのである。また、結合双生児として生まれ、リハビリを乗り越えて世界平和を訴え続けるグエン・ドク氏との交流は、生徒たちに生命の尊厳と平和への強い意志を植え付けた。

さらに、FSCの理数教育の成果をぶつける場として用意されたのが、1896年創立のベトナム最古の名門であり、国際数学オリンピックの出場者を多数輩出する国立「コックホック高校」との学校交流であった。

ここでは、コックホック生3名と立命館守山生3名が混成チームを組み、日本の大学入試や数学オリンピック国内予選レベルの幾何学難問に挑む「数学コンクール」が開催された。英語を公用語とし、画用紙を前にペンを握りしめ、20分間の制限時間の中

で数式と論理を戦わせる共同学習。コックホック生の弱音を吐かないポジティブな姿勢、圧倒的な努力に裏打ちされた英語力と鋭い数学的アプローチに、生徒たちは強烈な刺激を受けた。日本人は自己主張やプレゼンテーション能力が足りないという現地日系企業のトップからの厳しい指摘も相まって、生徒たちの学びに対するモチベーションは最高潮に達した。

帰国後の生徒たちのレポートには、日本という恵まれた環境で不自由なく生活してきたことへの猛省と、世界に目を向けた高い志が溢れていた。事前活動として、孤児院のために街頭に立って募金活動（守山駅前や立命館大学BKCキャンパスでの実施）を行い、集まった寄付金で現地の米やフォー、ミルクを購入して届けたという達成感も、彼らの背中を強く押した。「勉強は自分のためにするのではない。社会や世界で人々の役に立つために、今の自分を変え、特性を磨くのだ」という勉学への主体的かつ爆発的な意欲へと、生徒たちは自己変革を遂げていったのである。

4. 理数の知が社会に還る現場を知る「企業訪問」

国内外の研修で豊かな人間性を育んだFSCの生徒たちが、さらに自らの志を具体化させるプログラムが「企業訪問」である。この取り組みは、立命館大学が有する強固な学園ネットワークを結集して開拓された。単なる職場見学やキャリア教育の域を超え、「高度な理数系の学びが社会でどのように実装され、人々の生活を支えているか」を体感する、極めて実践的な機会として設計された。

高校1年次の7月には、世界トップレベルのセンサ技術を誇る地元のオプテックス株式会社を訪問。生徒たちは事前にセンサの原理を調べ上げた上で、小林社長の講演を聴講し、「技術を通じて人が育ち、社会に貢献する」というグローバルなビジョンを学んだ。さらに少人数制のグループ交流会では、若手研究者から開発の苦労ややりがいを直接聞き、最新の製品デモンストラーションに目を輝かせた。

この国内での学びは、ベトナム海外研修旅行における現地企業研修へと発展。現地のPanasonic AVC Vietnamの工場を訪れ、テレビの生産ラインを視察するとともに、現地法人の社長から「世界で闘うために必要な自己主張とマネジメント能力」というシビアな教訓を得た。

教科書の知識が最先端の産業界と結びついた瞬間、生徒たちの目の色が変わった。「受験のための勉強」は「社会の課題を解決するための使命」へと昇華し、学校に戻った生徒たちは、過酷な「7時限授業」や演習に対しても、確固たるモチベーションを持ってより一層貪欲に邁進していくこととなった。

5. 全国初を形にした、医療への情熱を灯す「高大病院連携」

FSCの進学指導における最大の特色であり、教員と立命館事務職員の卓越した交渉力と熱意が結実したのが、国立大学法人「滋賀医科大学」との高大連携講座、および甲賀市立「信楽中央病院」での病院実習である。当時としては、全国的にも類を見ない極めて先進的な試みであった。

滋賀医科大学との連携は、高校1年次11月の「医学部入門講座（講演会）」から始まる。医師を目指す心構えや高い倫理観、

医療現場の厳しい現実について、大学教授から直接講義を受けることで、単なる「憧れ」を「使命感」へと昇華させる。さらに2年次には、月1回、計12回に及る「基礎医学講座」が放課後や夏期休暇中に実施された。高校の生物・化学・物理の知識が、最先端の「再生医療（ES細胞・iPS細胞）」「がんの遺伝子変異」にどのように結びついているかを体感させるシラバスは、日々の過酷な受験勉強に対する強力な内的動機付けとなった。

そして、その学びの結晶の舞台となったのが、信楽中央病院での「3日間連続病院実習」である。高校生を対象とした本格的な病院実習は全国初の事例であり、FSC主任と病院の担当医師（倉田佳彦医師や北川貢嗣医師ら）が、保護者や生徒に対して事前にもリスクも含めた丁寧な説明会を行い、強固な信頼関係のもとで実現した。

春期休暇中、生徒たちは白衣を身にまとい、過疎地域・僻地医療の最前線へと飛び込んだ。この実習が何より素晴らしいのは、病院内での「練習」に留まらず、地域の命に直接触れる「実践」へと地続きで展開された点にある。

まず実習室では、指導医の温かくも真剣な眼差しに見守られながら、水銀血圧計の扱いに挑戦した。カフの巻き方や水銀の動きを食い入るように見つめる生徒たちの表情には、医療の奥深さに触れた緊張感とともに、自らの手で命にアプローチする知的な高揚感が溢れていた。

そしてこの基礎を叩き込んだ直後、生徒たちは多羅尾出張診療所などへの「僻地訪問診療・巡回検診」へと同伴した。そこでは、診察を待つ地域のお年寄り一人ひとりと温かい対話を交わしながら、先ほど学んだばかりの水銀血圧計を使い、自らの手でカフを巻き、聴診器を耳に当てて実際に血圧を測定したのである。張り詰めた誠実な眼差しで命の音を聴き取ろうとする生徒の横顔と、それを優しく受け入れる地域の方々のぬくもり。医師や看護師、多くの専門職が緊密に連携する「チーム医療」のダイナミズムと、地域住民に寄り添う臨床医の原点を心の奥底で理解した瞬間であった。

この過酷かつ本質的な病院実習を体験した生徒の90%以上が実際に医学部合格の夢を掴み取り、初期の卒業生たちは現在、滋賀県内の地域医療を支える本物の医師として最前線で活躍している。



全国初となった本格的な高校生向け病院実習。白衣に身を包み、医療器具の操作、医師以外の病院内での仕事を学んだ。



「僻地訪問診療・巡回検診」で血圧測定に挑む生徒たち。地域の命と直接触れる「実践」であった。

6. 大躍進の1期生 — 「切磋琢磨の磁場」が生んだ奇跡 —

このような重層的な体験型プログラムと、朝のSHRでの小テスト（英単語・古文単語・基本計算）、放課後や長期休暇を返上したスパイラル形式の演習カリキュラムが両輪となり、FSC1期生（33名）は高校3年間で驚異的な学力の伸びを見せることとなる。

もちろん、その道のりは平坦ではなかった。学年が上がるにつれて全国模試の母集団は精鋭化し、6年一貫の超進学校や既卒生が流入するため、一般的な現役生は秋以降に偏差値を維持することすら困難を極める。1期生たちも、当初は生活時間の管理や家庭学習の質の維持に苦しみ、教員側からの厳しい指摘や課題点検に悩むこともあった。

しかし、教員たちは諦めなかった。模試の結果が出るたびに教科担当者間でデータを詳細に共有し、生徒個々の設問別の得点状況まで分析。「この分野が弱い、即座に明日の授業と放課後講習で補強しよう」と、タイムリーな波状攻撃を展開した。担任を中心に、教員陣が持つ学問への専門力と情熱を惜しみなく注ぎ込む姿に、生徒たちは「ビジネスパートナー（目標達成のための同志）」として応えた。クラス内を複数のグループに分けて競争と協同学習を促進させるなど、勉強をすることが当たり前であり、新しい知を掴むことが最高に楽しいと思える「集団の磁場」が完全に完成したのである。

その結果は、2013年度（平成25年度）大学入試において、周囲を震撼させる奇跡となって現れる。

初めて挑んだセンター試験において、1期生クラスの平均点は滋賀県トップ校に並び、近畿圏を代表する公立トップ校に一步

も引けを取らない驚異的な学力水準への到達を成し遂げた。

京都大学1名、大阪大学1名、そして難関の国立・滋賀医科大学医学部医学科2名を含む15名が国公立大学に現役合格。さらに京都薬科大学2名、自治医科大学看護学部など、生命科学・医療系の難関へと次々に合格者を輩出したのである。1期生は最終的に医学部医学科へ4名、他の医療系8名、立命館大学に設置されていない学部・学科へ10名が進学し、自らの進学希望を実現していった。

それだけではない。生徒たちの科学への純粋な探究心は、「科学の甲子園滋賀県予選第3位」や「数学オリンピック1次予選挑戦」「筑波サイエンスワークショプへの参加」といった、ペーパーテストに留まらない輝かしい実績としても開花した。明確な共通目標を掲げ、お互いの成長を喜び合える集団へと成熟した1期生の姿は、FSCが難関外部大学・医学科に通用するトップコースであるという事実を、内外へ鮮烈に証明してみせたのである。

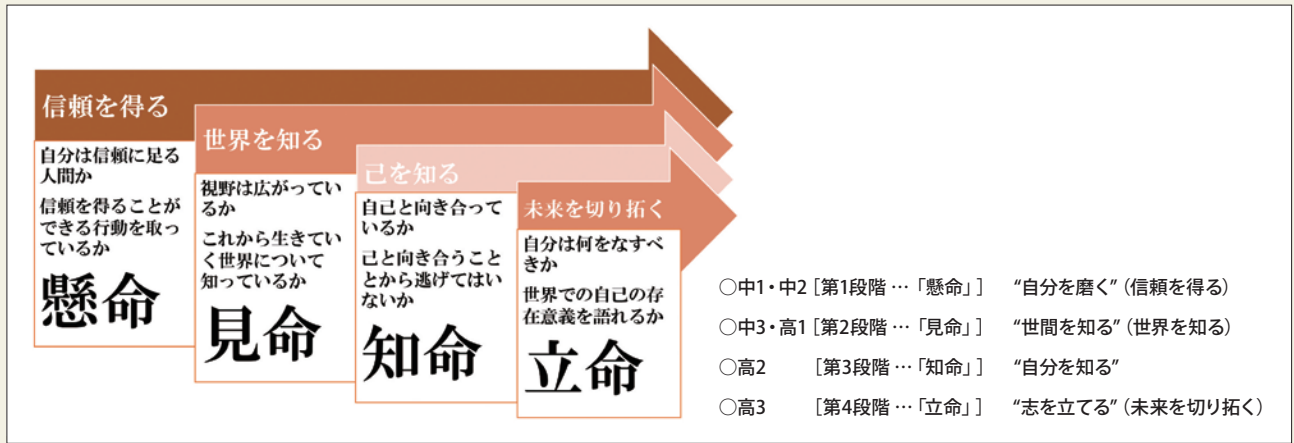
7. 結び 一次の20年へ受け継がれるFS精神 —

黎明期の教員たちの凄まじい熱意と、1期生たちが流した汗と涙によって築かれたフロンティアサイエンスコースの基盤は、その後、中学FTコースの設立をはじめとする全校的な探究教育のアップデートへと見事に繋がっていく。

FSCが20年間のなかで証明したのは、「確かな学力」とは、ただ机の上で教科書を暗記するだけでは生まれないという真理である。地元・滋賀の豊かな福祉施設で人間の可能性に感動し、ベトナムの地で世界の現実に涙し、信楽の訪問診療でお年寄りのぬくもりに触れる。そうした「社会とのリアルな繋がり」と「あくなき人間理解への希求」が、生徒たちの心に火をつけ、自学へと向かわせる最大のもち力になるということ。それこそが、本コースが歩んできた誇り高き伝統である。

創立20周年を迎え、社会における科学技術や医療の役割、そして不確実な世界を生き抜くための課題解決能力の必要性は、当時よりもさらに増している。しかし、時代がどのように変わろうとも、FSCの教室に流れる「自ら問いを立て、仲間と協働し、未知のフロンティアへ果敢に挑む」という精神が変わることはない。

これまでの輝かしい伝統を礎に、教職員と生徒たちが一体となって紡ぐ情熱の物語は、次の20年、そしてその先の未来に向けて、今なお力強く加速し続けている。



立命館守山FTコース 6年間の流れ

ICT教育10年の軌跡

Masahiro Kokuryo

國領 正博（ICT推進委員長）

0. 20周年の節目に振り返る、学びのパラダイムシフト

立命館守山中学校・高等学校は、2006年の開校以来、「未来を創る人の育成」を教育の揺るぎない柱として掲げてきました。急速に変化する現代社会において、単なる知識の蓄積にとどまらず、自ら課題を見つけ、他者と協働して解決策を導き出す力——その「未来を拓く力」を育むために、本校は常に時代の先をゆく教育実践を積み重ねてきました。

その歩みの中でも、本校の教育の質を根本から変容させた大きな転換点が、2014年度に開始された「一人一台iPad体制」の導入、そして学習プラットフォーム「ロイロノート・スクール」（以下、ロイロノート）」の全面的な活用です。本稿では、導入から現在に至るまでの10年間の軌跡を辿りながら、本校がどのようにして「ICTを文房具として使いこなし、学びの文化を書き換えてきたか」について、その成果を詳述します。

1. 2014年の決断—「ICTを使う」から「学びを創る」へ

1-1. 導入の背景と目的

2014年度、中学1年生から段階的にスタートした一人一台iPadの導入は、単なるデジタル機器の配布ではありませんでした。当時の教育界では、依然として「教師が教壇に立ち、板書し、生徒がそれをノートに写す」という一方向的な授業が主流でした。しかし本校は、ICTを導入する目的を「ICTを使うこと」そのものに置くのではなく、「ICTによって学びの質をいかに変えるか」という本質的な問いに据えました。

1-2. 一方向から双方向への転換

iPadとロイロノートの導入以前、生徒一人ひとりの思考過程をリアルタイムで把握し、授業の中で共有することは物理的に困難でした。しかし、このツールの導入により、生徒は自分の考えを即座に「カード」として可視化し、提出・共有することが可能となりました。これにより、授業の主役は教師から生徒へと移り、互いの考えをぶつけ合いながら高め合う「双方向的な学び」への劇的な転換が実現したのです。

2. 思考の可視化がもたらす「深い理解」のメカニズム

2-1. ロイロノートの「カード」が思考のピースになる

ロイロノートの最大の特徴は、文字、写真、図、音声といった多様な形式の情報を「カード」という単位で扱える点にあります。生徒は、頭の中にある抽象的な思考をこれらのカードとしてアウトプットし、それらを画面上でつなぎ合わせたり並べ替えたりすることで、自分の考えを整理・構造化していきます。

2-2. 思考プロセスを「見える化」する教育的意義

この「可視化」は、生徒自身が自分の思考の軌跡を振り返るこ

とを可能にするだけでなく、教師にとっても大きなメリットをもたらしました。教師は、生徒一人ひとりの理解度や思考の癖をリアルタイムで把握できるようになり、個に応じた的確な支援や、多様な考え方を尊重した授業展開が可能になったのです。

3. 教科別の実践に見る、学びの多様性と専門性の深化

本校におけるロイロノートの活用は、単なるツールの域を超え、各教科の特性に合わせた専門的な学びを深めるための強力な武器となっています。

3-1. 国語科：テキストへの多角的なアプローチ

国語科では、特に物語や小説の読解において顕著な成果を上げています。

- ・心情の可視化：登場人物の心情変化を抽出してカードにまとめ、それを時系列に沿って「心情曲線」のように並べる活動が行われています。
- ・多様な読みの共有：従来、一人の発言で終わりがちだった読解の授業が、全員のカードを一覧表示することで、「自分とは異なる読み取り方」に即座に触れられる場へと変わりました。担当教員は、生徒一人ひとりの読みを尊重した、より深い対話が可能になったと評価しています。

3-2. 理科：実験と考察のリアルタイム連動

理科の授業では、iPadの機動性とロイロノートの即時性が最大限に活かされています。

- ・デジタル記録と考察：生徒は実験の様子や結果をその場で撮影・記録し、その画像に気づきや考察を直接書き込みます。
- ・学びの共有スピード：従来は後日提出されるノートでしか確認できなかった生徒の気づきが、授業中のその場でクラス全体に共有されます。優れた視点を持つ生徒の記録をピックアップして紹介することで、クラス全体の学びの質が底上げされています。

3-3. 社会科：資料分析と多角的視点の育成

社会科においては、膨大な資料を分析し、自らの意見を構築するプロセスで活用されています。

- ・情報の整理：提示された多種多様な資料（地図、統計データ、歴史資料など）から必要な情報を抜き出し、カード化して整理します。
- ・参加意識の向上：挙手制の授業では発言しづかった生徒も、カードを通じて自分の意見を発信できるようになり、クラス全員が議論に参加する文化が醸成されました。

3-4. 英語科：アウトプットとフィードバックの質的改善

英語教育では、特に「話すこと」「書くこと」の技能向上に大きな役割を果たしています。

- ・音声・ビデオ提出機能の活用：生徒は自分のスピーキングを録

音・録画して提出します。

- ・個別最適化された指導：教師は提出されたスピーチや英作文を個別に確認し、具体的なフィードバックを返します。これにより、すべての生徒に対して丁寧な個別支援が行えるようになりました。

3-5. 共創探究：協働的な学びと指導の可視化

本校が重視する「探究型の学び」において、ロイロノートは個々の思考を支えるだけでなく、生徒同士および教員との間で学びを共有・深化させる基盤として機能しています。

- ・生徒間の学びの共有と相互参照：生徒は各自の探究の進捗や成果をロイロノート上で共有しています。これにより、すべての発表を逐一聞かずとも、他者の課題設定や調査の方向性、考察の深まりを把握することが可能となります。他の生徒の取り組みを参照することで、自らの探究を見直し、新たな視点を得ながら学びを進めています。
- ・教員による指導と助言の即時化：教員はロイロノートを通じて、生徒が提出した課題や探究の進め方を随時確認し、個々の状況に応じた助言を行っています。これにより、従来の一斉指導にとどまらず、各生徒の思考過程に寄り添ったきめ細やかな指導が可能となり、探究活動の質の向上につながっています。

3-6. 芸術：表現の共有と相互理解の深化

芸術では、毎回の作品や発表の記録、意見や作品の共有を通じて、互いの個性を認め合う場としてロイロノートが活用されています。

- ・情報の整理：生徒は提示された多種多様な資料を整理し、各自のノートとして保存・管理します。さらに、各自の作品などを毎回の授業の記録として保存し、他の生徒がどのような表現や進度であるかを共有します。
- ・学びの共有：お互いの作品についての評価を行います。発言しにくい生徒もカードを通じて自分の意見を発信でき、教員もその発言をクラス全体に共有することができます。

4. 学習基盤としての成熟—「学びの文化」の定着

4-1. 蓄積される「学びの軌跡」とリフレクション

ロイロノートに提出されたすべての課題や活動の記録は、クラウド上に保存され、いつでも見返すことができます。これは生徒にとって、単なる過去の記録ではなく、自らの成長を実感するた

めの「ポートフォリオ」となります。過去の自分と比較して何ができるようになったのかを確認するプロセスは、生徒の自己肯定感を高め、次なる学びへの強い意欲（メタ認知能力の向上）へとつながっています。

4-2. 心理的安全性とコミュニケーション

ロイロノートは、生徒と教師、あるいは生徒同士をつなぐ重要なコミュニケーションツールとしての側面も持っています。全員がカードを提出し、それが画面上に等しく並ぶ環境は、「自分の考えも大切にされている」という安心感を生徒に与えます。このような心理的安全性の高い環境こそが、主体的な学びを支える土壌となっているのです。

4-3. 教員の協働とスタイルの確立

導入当初は教員側にも試行錯誤がありましたが、教員同士が積極的に活用事例を共有し、互いの授業を見学し合うことで、本校独自のICT活用スタイルが確立されました。現在では、特定の教科だけでなく全校を挙げてこの文化が共有されています。

5. 未来への展望—創立20周年を超えて

5-1. 日常に溶け込むICT

2026年現在、ロイロノートの活用は本校の日常の中に自然に根付いています。それはもはや特別な「イベント」ではなく、鉛筆やノートと同じように、思考を支え、対話を促すための不可欠な「学習基盤」です。

5-2. 変化する時代の中で変わらない教育理念

創立20周年という節目を迎えましたが、私たちの目的は変わりません。ICTという強力なツールを武器に、生徒たちが自ら考え、多様な他者と協働しながら、正解のない問いに立ち向かう力を育むこと。これまでの10年間で培われた「学びの文化」は、本校の誇るべき財産として、これからも次世代へと受け継がれていくでしょう。

5-3. 結びに代えて

立命館守山中学校・高等学校のICT教育は、これからも進化を続けます。テクノロジーがどれほど進化しても、その中心にあるのは常に「生徒の主体的な学び」と「知的な好奇心」です。ロイロノートとともに歩んできたこの軌跡は、未来を創る若者たちが、自らの手で世界をより良く変えていくための確かな足跡なのです。



リツモリ入試改革 —入試方式の多様化と入試業務のスリム化—

Zenkou Yamamoto

山本 全康（入試広報主幹）

1. リツモリ入試・これまでの取り組み

本校は開校以来、中学入試では自己推薦型の「かがやき」と一般入試、高校入試では推薦（中学校推薦）と一般入試（専願・併願）があり、中学は160名、高校は320名（内進生を含む）を募集人数として進めてきた。これまで、2010年度には高校で外部受験を想定したフロンティアサイエンス（現フロンティア）コースを設定して別日に入試を行ったり、2011年度には中学で入試プレテスト、2014年度には中学で午後入試を導入したりして、改革を進めてきた。また、WEB出願システム導入にもいち早く取り組み、受験生・保護者にとってアクセスしやすい入試を模索してきた。

なかでも、中学「かがやき」は生徒の個性を多面的・多角的に評価する入試として、開校以来本校が大切にしてきた方式である。各学年を引っ張るリーダー層の生徒も、入試時にかがやき方式で入学してきた者が多い。近年は、大学入試においても受験生本人の個性や主体性・意欲を図る総合型選抜が更なる広がりを見せているが、「かがやき」はこうした時代の流れにも対応した取り組みと言えるだろう。

様々な取り組みを行ってきた本校の生徒募集活動も、最初から順風満帆にいったわけではない。2013年度は中学入試の総志願者が282名となり、定員が160名に対して入学者が127名に留まるという事態になった。中学からの内部進学者の減少は高校の募集活動に影響し、高校については2011年度から2017年度までの7年間、入学者数が学則定員の320名に達しない学年が続いた。また、入試執行においても2018年度に合格判定ミスや問題配布ミスが起こり、業務のあり方・進め方についても見直しが迫られていた。

2. ターニングポイントとなった2019年度入試

そのような状況のなかで行われた2019年度の入試改革が、一つの大きなターニングポイントとなった。改革の内容としてはまず、かがやき入試のブラッシュアップを行い、フロンティア（現アドバンスト）コースの特別推薦入試を始めた。次に、受験生にとってより受験しやすい入試にするべく、中学入試では統一入試開始日の午前日程で、3教科・4教科の選択をできるようにした。そして、3教科の場合には理科が英語を選択できるように変更。加えて、公立中高一貫校で実施されている適性検査型の入試の導入も決めた。入試イベントの運営や広報物の作成にも知恵を絞り、募集活動を進めていったところ、中学入試では志願者が568名となった。この結果は前年比185名増加となり、関西ではトップクラスの伸びを見せることになった。

この年、高校入試においてもよりレベルの高い一貫教育を進めるために、新たにグローバル（GL）コースを立ち上げることになった。さらに、これまで別日程で行っていたアカデミアとフロ

ンティアサイエンスの入試を、グローバルも合わせて3コースで一本化を図って整理した。ほかにもGL特別推薦入試を実施したり、クラブ推薦の方式を変えたりしたところ、476名の志願者となり、当時の直近10年間で最も多い志願者となった。

また、入試執行でのミスをなくすべく、メディア教育部とも連携しながら、WEB出願システムや合否判定システムを導入し入試のDX化を進めた。採点業務についても積極的にデジタル化を進め、現場の負担軽減に努めた。

3. さらなる改革①・広報内容の工夫

本校の魅力を受験生・保護者にさらに広く伝えるべく、2020年度以降も生徒募集において様々な形で工夫してきた。第一に、総務部の先生方の協力も得て、年度ごとにテーマを設定して、募集メッセージを明確にするようにした。「君は世界の当事者となる」「動 私の声を力に変える」「ミライナンテコワクナイ ソウゾウヲキハナテ」などなど、多彩なタグラインが並び、毎年個性豊かな学校ポスターが作成された。



ポスター

また、各種説明会においてもっとも強調したのは、立命館の建学の精神「自由と清新」のもと、「自分で考え、行動に移すことができる生徒」「失敗を恐れず、様々なことにチャレンジできる生徒」を育てたいということだった。それを当初はグローバル・サイエンスリーダーの育成という表現で説明していたが、2021年度入試からは新しい価値や希望を生み出すことができる「ゲームチェンジャー」の育成を新たなメッセージとして打ち出すことになった。確かな学力と豊かな人間性・社会性を身につけるという不易の部分大切にしつつ、グローバル・サイエンス・ICTの活用など流行の部分も積極的に取り入れていく。多彩なコースを用意し、カリキュラムも改変して生徒の希望に応じて柔軟に変更できる形に変え、幅の広い進路希望ニーズに応える。「立命館大学・APU

に行くもよし、国内の他大学に行くもよし、海外大学に行くもよし」。総合学園としての強みを最大限に活用し、中大大院一貫教育を実践できる学校であるということをアピールしていった。



パンフレット

広報ツールにも様々な工夫をこらした。まず、学校パンフレットを大幅にリニューアル。2020年度から2022年度にかけては総ページ数が50を超えるパンフレットを毎年作成。デザインを雑誌風にしたり、A面（生徒用）とB面（保護者用）を作成したりするなど、他の学校にはない斬新なパンフレットを作った。それと、屋外の広告として、国道1号線の京都府と滋賀県の境目のところに、ビルボード広告として宣伝看板も出した。2025年度からは、JR守山駅にも駅名標風の看板を設置し、PRを行うようにした。また、コロナ禍に見舞われた際も、立命館大学映像学部と協働で様々な動画コンテンツを製作・ホームページ上で公開し、自宅にいな

4. さらなる改革②・業務のスリム化

入試方式の多様化や広報内容を工夫することで、業務量は増えることになる。ただ、現場の人員数には限界があるので、何をして何をしないのか、業務のスリム化も同時に求められることになった。例えば、先述の学校パンフレットについても、写真撮影やレイアウト決めや校正など、作業量は膨大なものがあった。ペーパーレス化の時代においてコストの問題や環境への配慮の必要性があることから、2023年度からは思い切って作成をやめることにした。パンフレットに代わるものとして、新たに小型の「スマートスクールガイド」を作成し、ガイド内にあるQRコードを読み取って、詳しい内容はホームページで確認してもらう「つづきはWEBで」方式に切り替えた。それと、基本情報に絞って掲載した薄型の「データブック」を作成し、スマートスクールガイドとの2つをセットにして配布する形に変えた。



スマートスクールガイド

また、働き方改革の一環として、本校では退職されたベテランの先生方6名に業務委託する形で協力を得ている。豊富な知識と経験をお持ちの先生方の存在は心強く、数多くの学習塾や中学校の訪問なども担当していただいている。紙媒体の印刷物やイベント会場の賃借料、試験執行や営業活動にかかる人件費なども大幅に削減した結果、この数年で大幅な支出削減に成功した。

5. 近年の生徒募集状況

近年は大学入試改革の不透明さや大学定員厳格化政策に対する不安もあり、立命館大学の入試難易度が上がり、それによって附属校教育に対する人気も安定し、中学・高校の募集も順調に推移している。時代の変化とともに、主体的で対話的な学びが求められるようになったが、大学入試にとらわれない附属校教育は従来からそうした学びの実践の蓄積が豊富にあり、大学との連携教育なども生かして自分の探究を十分に深められる環境があることが、附属校人気をさらに高めていると言える。

生徒募集については、高校入試よりも義務教育途中で行われる中学入試の方が一般的には難しいといわれる。昨今は少子化の波もあり、この10年で関西圏の小学6年生は約2万人減少している。私立中学校の受験率は近年上昇しているといわれるが、京都府・大阪府で12%を超える中、滋賀は3%ほどしかない。統一入試開始日午前の受験者数では、大阪が8000名、京都が2700名ほどもいる中、滋賀では400名ほどの規模であり、滋賀は大阪の20分の1、京都の6分の1程度の規模しか私立中学校を受験しない地域である。こうしたなかで、本校は2026年度入試・総志願者数が697名。直近8年間の平均が710名。それ以前の8年間の平均が366名であることを見ると、約2倍の水準となっているのが分かる。「公立王国」といわれる滋賀の地で、着実に志願者数を伸ばしてきたことは大いに注目されるべきものと考ええる。

6. リツモリ入試・今後の展望

滋賀県は京阪神からの移住者が多いことから、湖南地区を中心に依然として人口規模は維持されているが、これから先は必ず減少局面に入ってくる。魅力あるリツモリをアピールする取り組みを、引き続き進めていかなければならない。2026年度より、滋賀県においても国による私立高校無償化政策により、私立高校に進学する生徒へ大きな就学支援金が提供される。県全体としても私立高校人気が高まり、本校でも2026年度入試については、推薦・専願の第一志望者が前年比34%の増加となり、専願にいたっては実質倍率が4倍近くになるハイレベルな入試となった。高校入試での志望者の増加は、今後、中学入試にも波及してくる可能性があると考えている。まだまだ滋賀県は「公立王国」だが、私立中学受験を盛り上げる取り組みをさらに進めていきたい。

各種入試イベントでは現在、多くの生徒が「リツモリナビゲーター」として協力してくれており、お客様の対応を丁寧に行ってくれている。また、保護者相談のブースも設け、本校の保護者の方にも相談員としてご協力をいただいている。今後も教員だけではなく、様々な方とともに魅力ある学校づくりをおこなっていきたいと考えている。

グローバルコースの歩み 一問い続けることができる場づくりを目指してー

Shinichi Yutani

由谷 晋一（グローバルコース 副主任）

1. グローバルサイエンスリーダーの育成に向けて

本校は開校当初からSSHの指定を受け、グローバルサイエンスリーダーの育成を目指してきた。2016年には高校3年生の段階で文系のグローバルクラス、理系のアドバンス理系クラスを設置し、Critical ThinkingやScience Englishなどの特色ある授業、大学の授業を先取りするAdvanced Placementなどを導入し、正課やクラブ活動の枠を超えて活躍するトップランナーとも言える生徒たちを数多く輩出した。



例えば、私が担任を務めた2018年度の高3グローバルクラスをとってみても、その勢いは目覚ましいものがあった。英語でディベートやライティングを競うWorld Scholar's Cup世界大会進出、ケンブリッジ大学出版主催のRaymond Murphy Scholarship Essay Contest優勝、約束エッセー大賞グローバル賞受賞など、各種コンテスト・大会での受賞が相次いだ。さらに、TOMODACHI HONDAプログラムや三宝荘サイパン青少年派遣事業といった海外派遣プログラムに選抜された生徒も現れた。また、有志の生徒たちが守山駅前の活性化のために子ども英語食堂を行うなど、身近な社会課題の解決に向けて地域へ飛び出すマイプロジェクトを実践する生徒も増え、トップランナーが自走する強みが明確に表れていた。

一方で、最高学年になって校外で活動し始めた生徒たちからは「1年生の時から活動できていれば…」という声も聞かれた。高校3年の1年間だけで一気に展開するアプローチには限界があり、生徒たちが、長い時間をかけて泥臭く失敗しながら少しずつ手応えを得られるような段階的な仕掛けが不可欠であった。これがきっかけとなり、2018年の将来構想において、従来のグローバルクラスやアドバンス理系クラスを発展させた、グローバルコース（GLコース）の創設を提案することになった。

2. 問い続ける生徒の姿

高校入学時からすべての生徒に「自分のできること、やりたいこと、すべきことはなんだろうか」と試行錯誤を重ねてほしい。そんな想いのもとで、2019年度、GLコースが創設され、挑戦した

という熱量を持った生徒が集まった。中にはグローバルコースといえば英語のコースだというやや狭いイメージを持つ生徒たちもいたため、入学直後から「あなたは何がしたい?」「もし1か月時間を自由に使えるとしたら何をする?」と問いつけることから始めた。オリエンテーションでは立命館アジア太平洋大学に足を運び、大学生たちによるファシリテーションのもとでアイスブレイクや多文化共生のためのアクティビティを行い、多様な他者と関わりながら、自分や社会を創っていくための目標設定を行った。（現在では形を変え、GLコースの高2年生3年生の先輩たちがファシリテーションを行っているが、このマインドは確実に受け継がれている。）また、独自で実施したベトナム研修では、現地で過去と現在を学んで、自分たちの理想の社会を描き、その実現のために自分自身が、そして社会ができることなどを議論した。このように、外部と連携した多様な取り組みと日常の問いつけを通して、自ら問い続ける生徒の育成を目指したのである。



ところが、GLコース1期生が2年に進級しようとする直前の2020年春、新型コロナウイルスという予期せぬ事態が世界を襲った。休校措置や移動の制限により、1期生が高2以降で予定していた海外研修や留学プログラム、現地での交流イベントなどはことごとく中止や変更を余儀なくされた。「1か月時間があつたら何をする?」という問いかけが、奇しくも現実のものとなってしまったのである。しかし、この試練を通じ、生徒たちは自らの足元にある課題に目を向け始めた。身近な違和感やローカルな課題に向き合い、自分たちにできる手立てを泥臭く試行錯誤する姿があちこちで芽生えていった。

3. すべての生徒を応援する仕組みづくり

コース創設以降、1年生から試行錯誤を重ねていくなかで、生徒一人ひとりの幅広いチャレンジをもっと後押しするために、様々なイベントや仕組み作りにも取り組み始めた。

一つは、2022年度から始めたGLフェスタを始めたことだ。GLフェスタとは、GL生で創る、GL生のための、「持続可能な社会」

を考える学術イベントである。生徒自身が参加型のワークショップを企画運営して、各自のチャレンジの成果を共有する場を創る。ワークショップは20種類近くになり、参加することでも大いに刺激を受ける。単なるイベントではなく、自分たちの学びの中間地点に位置づけられるものになっている。



また、2023年度からは、GLコースのあり方をより明確にする改革を行なっていった。

まず、GLコースが求める生徒像としてアドミッション・ポリシーを整理し、以下の3点を打ち出した。

- ・「自分の興味・関心を広げた延長線上に世界がある」ことを意識し、正課・クラブ活動の枠を超え、学校内外のイベント参加や資格の取得等に、意欲的に取り組むことができる者。
- ・海外留学派遣プログラムをはじめとした異文化交流の機会を積極的に活用し、高度な英語（外国語）力の習得を目指すことができる者。
- ・世界が抱える諸問題に対し、自ら課題を設定し、「平和と民主主義」の視点をもって、その解決に向けた行動を起こすことができる者。

グローバルコースは英語のみを一生懸命学ぶ場であるという誤解はすでに払拭されつつあったが、自分の興味・関心を起点にする場であること、逆に、正課、クラブ活動以外で自身で選択したチャレンジを行うことを通じて自分の興味関心を創り、深めていく場であることが明確化された意義は大きかった。生徒たちは入学後もこのポリシーを折々に参照しながら、自分自身に問いつけることができるようになったからである。

さらに、コース進級基準も大きく変更した。以前のコース進級基準は成績のみであったが、新たに評価の柱として加えたのが活動履歴である。成績だけでなく、この1年間でどんなチャレンジをしたか、放課後や休日にどんな所に足を踏み出したかを書いてもらい、具体的な取り組みや失敗を含む行動のプロセスを評価する仕組みを導入した。実際、ほとんどの生徒が年間で5個以上の取り組みを行っており、ますます増えつつある。このように、一人ひとりのチャレンジを後押しする制度的土壌を整えて行ったのである。

4. おわりに

GLコースの歴史は、生徒自身が校内外問わず多様な他者と関わりながら、自分を創っていくことができるような場作りの歴史である。「活動履歴が評価されるから何かやらなければならない」というのは外発的動機づけではないかと自ら批判したくなる時もある。しかし、自分の興味関心がある程度はつきりしている場合は自分の内側から行動が生まれる一方で、外部からきっかけをもらって「そういえば私はこんなことをやりたかったのかもかもしれない」と気づくこともあるだろう。私たちは、いわばインサイド・アウト、アウトサイド・インの両方のベクトルの間（あわい）にいるのだ。これからも二元論に基づく自己批判に逃げずに、生徒たち、また教員自身も、手足を動かしながら、自分にできること、やりたいこと、すべきことを問いつける場を整えていきたい。



世界を通して自分を知るリツモリ国際教育 —動く世界の中で主体的に生きる力を育む—

Keiko Yoshimoto

吉本 恵子（国際部 主任）

0. はじめに — 国際教育が目指すもの —

本校は開校以来「グローバルな舞台で活躍・貢献できる人間育成」を目指し、2020年からは「Game Changerを育てる」ことを掲げ、国際教育を学校教育の重要な柱の一つとして位置づけてきた。急速に変化し、不確実性を増す現代社会において、単に知識や技能を身につけるだけでは十分とは言えない。必要とされているのは、多様な価値観に触れながら自分自身を深く理解し、社会の課題に主体的に関わろうとする姿勢である。本校の国際教育は、まさにその力を育むための重要な教育基盤として展開されてきた。本校では国際部としての体制が十分に整う以前から、留学や海外研修への挑戦を支援するとともに、海外からの訪問や留学生の受け入れを積極的に行い、校内に多様な文化や価値観が共存する学びの環境を育んできた。

近年は、世界で得た知見や視点をもとに、身近な社会課題を見つめ直し、自ら問いを立て、考え、アクションへと繋げる生徒たちが生まれている。常に変化している世界は繋がっており、その社会の一員としての「自分」を自覚し多様な他者と協働しながら未来を切り拓く力を身につけ、主体的に自分らしく生きていく——それが本校の国際教育の目標である。

本稿では、これまでの取り組みを振り返りながら、リツモリにおける国際教育の歩みと現在地を記す。

1. 世界へ個で飛び出すリツモリ生 — アウトバウンド留学の展開 —

本校には、高校生活を通して留学に挑戦したいという明確な目標を持って入学してくる生徒が毎年一定数いる。開校当初より、一定条件のもとで留学期間の単位を包括認定する単位認定留学を整備し、留学を経ても3年間での卒業を可能としてきた。

1年間の交換留学や私費留学から、1週間程度の短期プログラムまで、その形態は多様である。当初は留学エージェントが提供する交換留学が中心であったが、現在では官民学のさまざまな団体の情報を提供し、生徒一人ひとりの目的や関心に応じた留学プログラムを選択できる体制が整っている。年間約70名の生徒が世界各地へ渡航し、2025年度には66名が14ヵ国（アイルランド、中国、アラブ首長国連邦、ポーランド、カナダ、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、フィリピン、デンマーク、台湾、イギリス、フィジー、カンボジア）で様々なプログラムに参加した。

留学の価値は、語学力の向上や異文化体験にとどまらない。異なる環境の中で困難に直面し、試行錯誤を重ねる経験を通して、生徒は自らの強みや課題、価値観と向き合うことになる。多くの生徒が、進路への視野を広げるとともに、日本社会や身近な環境を相対化して捉える力を身につけて帰国している。

国際部では、事前のカウンセリングや説明会、帰国後の面談を通じて、留学の目的設定から学びの振り返りまで継続的に伴走している。2020年に国際センターが開設されたことで、生徒・保護者が相談しやすい環境も整った。

一方で、長期留学の実現には費用面の課題が大きい。円安の影響により、留学費用は開校当初と比べ約1.5倍に増加している。家計への負担から留学を断念する生徒も多く、本校では、国の奨学金制度「トビタテ！留学JAPAN」や地方自治体の支援制度への挑戦を後押しし、経済的負担の軽減に努めてきた。「トビタテ！留学JAPAN」には2025年度は全国版（第10期）に2名、拠点形成事業である滋賀県の奨学金制度「未来を描け！滋賀の海外留学応援プログラム」（第2期）に6名が採用された。併せて、2020年度より本校独自の留学支援金制度を開始。4ヶ月以上の留学で希望する生徒には6万円の補助を行っており、支援対象生徒は多い場合は年間10名にのぼる。

また、コロナ禍においてはオンライン留学も模索したが、単位認定の制約を踏まえ、より本質的な学びにつながる取り組みとして、ダブルディプロマ・プログラムという新たな国際教育の形へと舵を切った。国際的な高校修了資格取得を目指す新しい選択肢として、これまでに4名の生徒が修了した。現在はOntario Virtual Schoolの授業との連携を実施、受講を継続している生徒たちがいる。

2. 学校に世界を迎える — インバウンド留学生との学び —

本校では中高を通じて多くの留学生を受け入れてきた。異なる文化的・言語的背景を持つ他者を理解し、支援する経験は、日本にいながらにして多様性を受け入れ、共に生きる力を育む機会となっている。



歴史の授業で出身国について発表する留学生（2019年度）

グローバル（GL）コース設置以降は、留学生をGLコースに配置し、バディ制度を中心とした支援体制を構築してきた。年間約10名の留学生を受け入れ、2025年度は5か国（ドイツ、アメリカ、エストニア、メキシコ、ポーランド）から9名が在籍した。日本語能力や滞在期間はさまざまであるが、クラスの一員として日常の授業や行事に参加している。

日本語授業やフィールドワーク、日本文化体験、地域行事への参加は、留学生の日本への理解を深めると同時に、滞在の満足度を高めている。帰国後も関係が継続し、相互訪問や海外研修先での再会へと発展する例も多い。「受け入れて終わり」ではない、人と人とのつながりを育む交流は、本校の国際教育の大きな特色である。

3. 全員が世界を体感する — 海外研修の歩みと現在地 —

本校の海外研修は、特定の生徒のみを対象とするのではなく、中学3年生および高校2年生を対象とした全員参加型のプログラムとして実施してきた。国際や英語に強い関心を持たない生徒にとっても、実際の世界に触れる大きな学びの機会となっている。

コロナ禍を経て大きく様変わりした海外研修は、2026年現在再び変化の岐路にある。世界情勢が揺れ動く中での安全安心な実施をいかに確保できるのか、これからのリツモリがどのような形態で海外研修を実施していくか検討を進める必要に迫られている。

3-1. 中学3年生海外研修 — 世界と出会う原体験

中学3年生海外研修は、将来の留学や国際的な進路を目指す生徒のみならず、全ての生徒が世界と向き合い、自身の価値観



中学3年海外研修ニュージーランドショートコース(2022年度)

を揺さぶられる原体験を得ることを目的としている。

初期の海外研修は、ニュージーランドにおいて2週間実施された。現地ミドルスクール（フル・プライマリー・スクールを含む）での語学研修や交流授業、教育施設での文化体験を柱とし、語学研修は交流校ごとに少人数グループで行われた。派遣先校の選定には、当時の小川多聞中学教頭が自ら現地に赴き、本校中学3年生全員での受け入れに対応可能な学校との関係構築を行った経緯がある。実施時期についても試行錯誤を重ね、当初は11月実施の年もあったが、ニュージーランドの学期始まりにあたる2月が双方にとって最適であるとの判断から、以降はこの時期に定着した。これらの調整を重ねながら、「海外研修を学校教育として持続可能な形で実施する」基盤が築かれてきた。

本研修の大きな成果は、語学力以上に、異文化を受け入れる力と世界に踏み出すチャレンジ精神の育成にある。未知の環境で生活し、言葉や文化の違いに戸惑いながらも自ら行動する経験は、高校進学後の中入生がさまざまな挑戦に前向きに取り組む姿勢を下支えしている。

2019年度高校カリキュラム改革と連動し、中学段階でも英語既修者を対象としたエキスパートカリキュラム（EC）講座を開始した。また、中高接続プログラムとして、従来のニュージーランド研修と同時期に、希望制のタム留学を導入することを決定した。引率教員を伴わない個人留学という形式で、初年度には6名が参加し、生徒の主体的な挑戦を後押しする新たな選択肢となった。その後関心は高まったものの、コロナ禍により一時派遣を見合わせる状況が続いた。

2022年度からは、コロナ後の新たな海外研修として、ニュージーランド、オーストラリア、カナダの3か国で、ショート（約2週間）およびロング（約42日間）の計6コースを展開した。異文化



中学3年海外研修ニュージーランドショートコース(2022年度)

理解やホームステイ体験、同年代の生徒との交流、そして英語力に応じた現地校での授業体験を通して、高校でのグローバルな学びへの動機づけを図ることを目的としている。ロングコースには想定を大きく上回る参加があり49名、ショートコースに124名が参加した。以降もロングコースには毎年50名を超える希望者が集まっており、高校でフロンティアコースへ進学する予定で唯一の海外長期渡航の機会となる生徒や、高校でグローバルコースや国際系進路を視野に入れて参加する生徒が多く見られる。中学3年生の段階で世界を体感する経験は、その後の進路選択や探究活動に大きな影響を与えている。

一方で、近年は受け入れ国における留学生急増の影響や、研修期間延長の要請、さらには費用の高騰といった課題も顕在化している。ショートコースは45万円程度から約70万円へ、ロングコースも当初の90万円台からオプションコースでは200万円弱へと増加している。こうした制約の中にあっても、改善を重ねながら、生徒が世界を体感する機会の提供を継続したい。

3-2. 高校2年生海外研修

— 世界の「課題」と向き合い、行動する

本校の国際教育では、高校2年生海外研修を中学段階で培った「世界と向き合う姿勢」を「具体的な社会課題へのコミットと実践」へと発展させる段階として位置づけている。本研修は現在「アカデミック・チャレンジ・プログラム」として実施しGame Changerを育てる取り組みとなっている。

プログラムの特徴は、語学研修を主目的とするのではなく、現地で直面する社会課題を自分事として捉え、同世代との交流や協働、現地で活躍する日本人・専門家からの学びを通して、「問いを立て、考え、行動する力」を育む点にある。各コースには明



高校海外研修シカゴコース（2018年度）

確なテーマが設定されており、生徒が自身の興味関心や将来の進路と結びつけて研修に臨めるよう設計されている。

初期には全員参加型の語学研修をカナダで実施していたが、より教育的効果の高い研修を模索する中で段階的な再編が行われた。2012年にはカナダとアボッツフォードの2コース体制、2015年にはカナダ、シカゴ、ボストン、フロリダ、シアトル、バンコク、タスマニアの7コース体制へと拡大し、研修内容も多様化していった。実施時期についても、高校3年生の夏から高校2年生の3学期へと移行し、進路選択や探究活動との接続をより重視する形へと転換された。

その後、国際情勢の変化や学校教育全体の転換、さらにはコロナ禍による派遣中止を経て、本校では海外研修の在り方を根本から見直した。3年ごとのコース再検討の流れの中、2024年度より、オウル（フィンランド）、クラクフ・ベルリン（ドイツ・ポーランド）、シカゴ（アメリカ）、タリン（エストニア）、タスマニア（オーストラリア）、バリ（インドネシア）、シェムリアップ（カンボジア）など、9か国8コース体制で実施している。キガリ（ルワンダ）コースについては、感染症流行や政情不安の影響により実施を見送っており、海外研修における安全性確保の難しさと常に向き合っている。

各コースでは、アントレプレナーシップ、社会起業、インターシップ、プログラミング、環境フィールドワーク、インクルーシブ社会、ソーシャルイノベーションなどをテーマに据え、現地でのフィールドワークや対話、協働的な活動を重視している。生徒は、現代社会の課題の複雑さに触れながら、「正解のない問い」に向き合う経験を積む。

さらに、2025年度からは「超探究コース」を新設した。これは、学校が設定する既存コースにとらわれず、生徒自身がテーマ・渡航先・活動内容を計画・申請し、海外研修期間を活用して独自の探究を行う取り組みである。期間中は公欠扱いとし、最長で翌年度の学期開始までの渡航を認めている。初年度は1名をベトナムへ派遣し、2026年度にはアメリカ、フィリピンへ計3名が挑戦するなど、生徒主体の学びが着実に広がりを見せている。

高校2年生海外研修は、単なる「経験」にとどまらず、生徒一人ひとりが世界の中での自分の立ち位置を自覚し、進路や探究活動へと繋げていく重要な機会となっている。世界の現場で課題と向き合い、他者と協働しながら行動する経験は、既存の枠組みにとらわれず変化を生み出す Game Changer としての資質を育むものである。

4. 世界と日常をつなぐ

— 国際的ネットワークと校内実践 —

コロナ禍を機に、本校は地域や外部機関との国際的ネットワーク構築を一層進めてきた。海外学校との教育提携や相互訪問、大学や外部団体との連携を通して、学びのフィールドを校外へと広げている。特に学園との連携のもと、アラブ首長国連邦より毎年高校生の訪問を受け入れているプログラムについては、2025年度は遂に派遣プログラムの実施へと繋げることができた。また、海外大学への進学を視野に入れた推薦協定の締結も進み、世界に挑戦する生徒を継続的に支えている。

校内においても、教育提携校とのオンライン国際交流、大学留学生との交流、長期休暇中の英語プログラム、アフタースクール事業（English Agoraや英語でAikido）など、生徒が思い立ったときに世界とつながることができる環境を整えてきた。これらの取り組みは、国際教育を特別なものではなく、学校生活の日常に根付かせる役割を果たしている。

5. おわりに

本校の国際教育は、「海外に行くこと」そのものを目的とするのではなく、世界との関わりを通して自分自身を見つめ、社会の中でどのように生きるかを考える学びへと発展してきた。今後も、多様な他者と出会い、協働し、挑戦する経験を大切にしながら、時代に即した国際教育を実践していく。



校内国際交流オンライン「世界まる見えプログラム」（2020年度・ポーランド）



Global Leadership Programアブダビ研修(2025年度)



相互派遣プログラム提携校のミシガン高校生受け入れ実施（2025年度）

コロナ禍の立命館守山

Takashi Morizono

森園 崇司（副校長）

2020年1月、新型コロナウイルス感染症の拡大に対する懸念が新聞等で報じられるようになり、1月30日にはWHOが新型コロナウイルス感染症に対し、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言した。2月27日に内閣総理大臣より「3月2日から春休みまで全国すべての学校で臨時休業を行う」よう指示が出された。2月28日に高校卒業証書授与式が挙行されたが、前年度までのように高校2年生の参列と式歌はなく、卒業生と保護者、教職員、送辞を述べる在校生のみの参列で行われた。2月29日に出発予定だった高校2年AMの海外研修は中止。高校1年FTのTokyo Campus Tourも中止。中学1、2年生と高校1年生の学年末考査も中止。中学3年生のニュージーランド研修はすでに渡航していたため、帰国後の3月17日に中学卒業証書授与式を卒業生、保護者、教職員、送辞を述べる在校生の代表生徒のみが参列する形で行った。修了式も中止となり、学校長の式辞はHPに掲載される形となった。

春休みに入った3月23日以降、高校の部活動は校内および近隣の体育施設のみ活動を認め、生徒が学校に戻ってきた。我々教員も新年度に向けて準備を進めていた。そのような中で出された緊急事態宣言。

4月7日、埼玉・千葉・東京・神奈川・大阪・兵庫・福岡に緊急事態宣言が出され、4月16日には対象地域が全国に拡大された。4月8日に始業式、4月9日に入学式を予定していたが、大阪に緊急事態宣言が出されたため、4月8日～5月6日を臨時休校とすることになった。始業式は中継と録画で実施、入学式は延期し、ホームページ上に新入生へのメッセージ動画を掲載した。

臨時休校中の在校生への学習サポートは、Classiやロイロノート等のICTを活用して行った。一部期間、中学3年生に対し、Zoomによる学習サポートを行った。また、Classiやロイロノート等へのログインができない新入生へは、担任による電話面談を行った。教員の会議もZoomで行われるようになった。

4月30日の会議で、対応を学習サポートからオンライン授業に切り替えることを決めた。オンライン授業を行う教員側にも、オンライン授業を受ける生徒側にも準備が必要だったため、準備期間と学年集会等を設定し、オンライン授業の開始日は5月13日となった。

- オンライン授業は以下の形で行った。
- 午前中4時間。通常授業を午前午後に分けて、2週で1週分の授業ができるように特別時間割を作成。
- 教育課程に基づいてオンライン授業を展開。「道徳」「総合学習」「LHR」なども行った。
- 「ライブ型」「オンデマンド型」「課題配信型」のどの授業形態でオンライン授業を実施しても、時間内に課題の提出を求め、

課題の提出をもって出席とした。

- 生徒の集中力を考慮し、「ライブ型」のオンライン授業は30分以内とした。
- 新入生でiPadが手元に届いていない生徒へは、学校所有のiPadを貸与。
- wifi環境が整っていない家庭には、モバイルwifiを貸与。

止まっていた生徒の学びが再び動き始めた時期だった。以前からICTを活用した授業を行っていたこともあり、大きな問題が生じることなく、オンライン授業を行うことができた。

5月14日に北海道・埼玉・千葉・東京・神奈川・京都・大阪・兵庫を除き、緊急事態宣言が解除され、21日は京都・大阪・兵庫の緊急事態宣言も解除された。これに伴い、本校でも生徒を登校させて授業を行う検討を進め、6月8日～6月19日に中高分散登校を実施した。分散登校開始前の6月6日には、実施できていなかった中高入学式を本校体育館で行った。体育館には生徒・教職員のみ。生徒の座席は間隔を取って配置し、保護者向けにZoom中継した。簡素な式典ではあったが、新入生の入学をようやく祝ってあげることができた。



6月6日の入学式の様子

- 新型コロナウイルス感染症の集団感染（クラスター）を防ぐために、感染リスクの高い以下の3つの環境は避けるように指導されていた。
- 密閉空間：換気の悪い閉ざされた空間
- 密集場所：多数の人が同じ場所に集まっている状況
- 密接場面：近距離で会話や発声が行われる状況

政府からは「換気をこまめにする」「人との距離を空ける」「マスクを着用して会話を控える」ことを求められていた。そのため、分散登校は6月8日～6月12日を中学午前3時間・高校午後4時間で実施、6月15日～6月19日を高校午前4時間・中学午後4時間で実施し、中高の生徒が同時に校内にいないことが無いように実施した。対応した内容は以下の通り。

- ・守山駅からは徒歩による通学を基本とした。
- ・登下校の服装は、制服、体操服、クラブ指定のジャージとし、徒歩通学に適切な運動靴を許可した。また、体操服、クラブ指定のジャージでの授業参加も許可。
- ・自転車通学の範囲を拡大して許可。
- ・徒歩通学の生徒に配慮し、分散登校期間中は遅刻を扱わない。
- ・登校時に検温による健康観察を実施。
- ・生徒の机上にスクールシールドを設置。
- ・各教室に空気清浄機を設置。
- ・アルコール消毒液を校内19カ所に設置。
- ・不特定の生徒が利用する給水機の使用を禁止。
- ・生徒が接触したり、密になって活動したりする場面が多い活動は配慮して授業を行った。
- ・大きな声を出す活動や長時間のグループ活動は制限。
- ・発言時には、1m程度の距離を取り、着席位置は固定。
- ・発声時はマスクを着用するものとし、大きな声を出さない。
- ・生徒が密集する長時間のグループ活動は配慮して行う。
- ・音楽は合唱及びリコーダー等の管楽器を演奏しない。
- ・授業終了後に、教室等の消毒作業を、クレオテックと学年教員で行った。

生徒は学校に戻ってきたが、学校は以前のようにぎやかな場所ではなかった。生徒も教員もマスクで顔を覆い、自由に会話することすら憚られるような雰囲気があり、本校の授業の特長でもあった授業中のグループワーク等も制限した中での再開であった。

6月22日からは通常授業を開始し、中高全生徒が朝から学校で一日を過ごす生活が約4か月ぶりに再開した。守山駅からのバスも再開したが、一度に乗車する生徒の人数は制限した。また、カフェテリアの営業は中止とし、テイクアウトの弁当を販売した。教室で昼食を食べる際は向き合わず、正面を向いて食べることとし、食事での会話も禁止した。新型コロナウイルス感染症に対する考え方は各家庭および個人により異なる部分があり、誰かと話したいと思う生徒もいれば、誰かと話している生徒を見るだけで不安になり、調子を落とす生徒もいたため、学校が全員にとって安全な空間になっていたとは言えない期間であった。

2020年度前半はインターハイを始めとする各種大会が軒並み中止となった。夏以降に代替大会が開催された競技もあったが、3年生にとっては最後の大会が失われ、それまでの活動の成果を発揮することなく、引退を迎えた生徒も少なくなかった。他校との交流や、宿泊も制限され、課外活動の面白さが半減した時期でもあった。そのような中、本校生徒が主催し、「ピヨンド・コロナ・コンテスト」を開催したことは、まさに本校が目指してきた教育を体現してくれたものであった。

2020年度は学校行事も新型コロナウイルス感染症の感染拡大による影響を強く受けた。中学体育祭は日程を変えて球技大会の形で実施。高校体育祭は中止。文化祭は日程を変えて、生徒のみで実施。中学2年の沖縄研修中止。中学3年のニュージーランド研修中止。高2AMの海外研修は翌年に国内研修を実施。高2FTのニューヨーク研修は日程を変更して国内研修を実施。「行事の立守」として積み重ねてきた歴史を崩された1年であった。この1年の影響は一からまた積み上げる大変さと、リセットして新たな歴

史を作ることの両方に作用することになった。

2021年に入った後も繰り返された緊急事態宣言とまん延防止等重点措置。その都度、法人によって定められたBCP（事業継続計画）レベルに従い予定を変更することになり、計画の再考を余儀なくされた。生徒および教員に新型コロナウイルス感染症の罹患者が出た際は、法人と保健所の両方に報告する必要があり、特に、保健所に連絡する際は授業の形態や座席の配置など、学校での活動の様子を伝え、保健所による濃厚接触者の特定に協力を求められた。濃厚接触者と特定された生徒へは学校から連絡することになり、罹患した生徒名を直接伝えることはなかったが、生徒間の関わりを分断することにも繋がりがなかった。濃厚接触者となった生徒は自宅待機となり、その間は出席停止として扱い、希望する生徒へはハイブリッド授業（Zoomによる授業中継）を行った。また、風邪症状がある場合は、保護者からの申し出により、出席停止として対応した。さらに、登校に対する不安を訴える生徒および保護者に対しては状況を確認し、可能な範囲で柔軟な対応を取った。後遺症に悩まされた生徒もいたため、医師と連携した上で対応を行った。

生徒の安全を第一に判断し、早めにオンライン授業や行事の中止を判断していたが、生徒及び保護者の反応が変わったのは2021年度の2学期くらいからであった。世間でも緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置が長期化し、自粛疲れが言われるようになった頃であり、生徒、保護者から安全を最優先した判断に不満の声が聞こえるようになった。流行する新型コロナウイルス感染症の株が変化し、若年層への重症化リスクが低いことが判明してきたこともあり、文科省からの通達も、教育活動を継続する中で感染症対策を行う内容が変わってきた。そのため、2021年度の後半は感染リスクを抑えた上で、学校行事を可能な範囲で再開していった。高校の文化祭は学年ごとの実施であったが、保護者も観覧ができる形で実施することができた。

2022年度は授業における対応と保健所との連携は残しながらも、ほとんどの学校行事を実施。そして、2023年5月8日。新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザと同じ対応となり、特別対応は終わりを迎えた。

当たり前に行ってきたことが当たり前ではなくなった約3年間。多くの混乱と分断を生み、その影響は今もなお残っている。この3年間で失われ、取り戻すのに時間が掛かっているものもあれば、この3年間があったからこそ進んだこともある。過去に戻ることはできない。できるのは、歴史から学び、次の一手を考えることである。貴重な経験が追加された約3年間であった。



高校教員室に設置されていた防護シートと各教室用の消毒セット

共創探究科の創設 —「探究の守山」を生み出す仕掛けづくり—

Noriko Tanabe

田辺 記子（共創探究科 主任）

1. 共創探究科の成立と歩み

本校における高校・共創探究科の授業は、2018年度入学生から年次進行で導入され、2020年度に全学年が揃う完成年度を迎えた。1年次の「Thinking Design」に始まり、2年次の「文社／理数探究Ⅰ」、3年次の「文社／理数探究Ⅱ」「グローバル／サイエンスAP」へとつながる体系的なカリキュラムは、生徒が段階的に自分自身と向き合い、自ら立てた問いの解決を通じて社会の一員として自覚を深めていく構成だ。

この仕組みは、単に学年ごとの内容を積み上げたものではない。3年間を通じ、「4Cs（批判的思考力・創造性・コミュニケーション力・協働性）」を往還させながら育成することを企図している。その意味で、共創探究科は単独の教科でありながら、本校におけるすべての学びを貫く基盤として機能している。

現在では、学校を象徴するコアな取り組みとして定着しているが、その成立は当初から完璧な設計図があったわけではない。むしろ、開校以来の現場における地道な実践の積み重ねが、結果として今の形に至ったものである。

2. ユネスコスクールとしての課題と出発点

本校は2012年にユネスコスクールとして認定された。SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）を軸としたサイエンス教育に加え、「国際協力」の授業やピース・スタディツアーといったグローバル教育にも注力し、学外ではESD（Education for Sustainable Development）大賞を受賞するなど、確かな実績を築いてきた。しかし、これらの優れた実践は、各学年や教科、行事やクラブ活動ごとに独立した「点」の状態に留まっていた。それぞれの文脈で質の高い活動を展開しながらも、それらが中高6年間、あるいは高校3年間の教育活動として体系化されていないことが大きな課題であった。

こうした状況下で転機となったのが、SDGs（Sustainable Development Goals）という国際的な枠組みの広がりである。2018年前後より「持続可能な社会の実現」という視点が世間一般的に注目され、本校においてもパラパラに存在していた学びを社会課題という軸で再構築できないか、という議論が沸き起こるようになった。

さらに時を同じくして、新学習指導要領の告示により高校では「総合的な探究の時間」が導入されることとなった。正解のない問いに向き合い、自ら課題を設定する学びが求められたことは、ユネスコスクールの理念をこれまで以上に“実”として具現化する絶好の機となった。そこで、「学びの社会実装化」を柱に据えた探究のカリキュラムを構想し、生徒が自らの学びを現実社会の文脈の中で捉え直し、主体的に動ける環境づくりを目

指すこととなった。

その際、指針となったのが、有志生徒によって構成されたユネスコ委員会（2012年創設、現ユネスコクラブ）の存在であった。社会をより良くしようと具体的な行動を積み重ねてきた彼らの姿をロールモデルとし、その実践を学校全体へと広げることが、「リツモリ探究」という独自の概念をもたらし素地になると考えた。



夏の教員研修会（SDGs研修 2018.8.23）

3. 実践が示した可能性——学びの社会実装化

こうした流れの中、2019年に誕生したのが「インパクト・ゼミ」である。社会課題に高い関心を持つユネスコ委員会の生徒と、科学技術に強みを持つサイテック部の生徒とを結びつけば、新たな価値が生まれるのではないかという仮説のもとに3チームを編成、「キャリア甲子園2019」（全国1,090チームがエントリーした国内最大級の高校生ビジネスコンテスト）に挑むプロジェクトを始めた。

中でもチームGENIE（瀧野 志帆、富岡 大貴、廣田 七海、奥西 授）〈*以下、敬称略〉の成果は象徴的だ。書類審査、プレゼン動画審査を勝ち抜いた同チームは、準決勝大会（2020年2月16日・東京）に進出した。各企業のベスト8が企業担当者に直接提案を行うこの舞台で、彼らは東京電力が提示した「インフラを使ったイノベティブなサービスを提案せよ」というミッションに対し、「電柱をITインフラとして活用し、交通事故をゼロにする」ビジネスモデル〈ANSHIN〉を提案した。既存の社会資産を再定義し、安全という課題に実装可能な形で応答したこのアイデアは高く評価され、見事、東京電力代表チームとして決勝進出を果たした。

残念ながら決勝大会はコロナウイルスの影響により開催中止

となり、最終的な成果発表の機会は失われた。しかし、この経験が本校にもたらした意義は、コンテストの結果にとどまるものではない。むしろ、「探究とは何か」を具体的な形で示した点にこそ、本質的な価値があった。すなわち、社会課題を自分ごととして捉え、異なる専門性を結びつけながら、現実社会に実装可能な提案へと昇華させるプロセスそのものが、探究的な学びの核であるということである。GENIEの取り組みは、「探究って、こういうことか」というある種の“手応え”を、教員・生徒の双方にもたらした。

こうした生徒の取り組みは学園内の広報や発表の場を通じて共有され、本校の実践は広く認知されるようになった。とりわけ大きな契機となったのが、立命館学園が主催する「総長PITCH THE FINAL」への挑戦である。



チームGENIE（キャリア甲子園準決勝大会 2020.2.16）



チームP.S（総長PITCH THE FINAL 2021.12.11）

2019年度、チームX（中島 綾香、藤田 祥子、瀧野 志帆、草分 希海）は、大学生・大学院生を含むオーディションを勝ち抜き、ファイナルセッションへ進出した。高校生として上位7チームに名を連ねたことは快挙であり、本校生徒の探究が学園内で通用する水準にあることを示した。続く2020年度には、チームP.S（速水 瑠奈、奥西 授）がファイナル進出を果たした。食物アレルギーという社会課題に対し、飲食店の対応を可視化するサービスを提案、自治体や事業者と連携した高い実証性は周囲を驚かせた。

そして2021年度、新メンバーを加えたチームP.S（速水 瑠奈、奥西 授、大八木 望）が再びファイナルの舞台に立った。「探究留学」と題したこのプロジェクトは、地方創生という社会課題に対し、高校生の探究活動そのものを解決手段として位置づけ、自治体と連携した具体的な構想へと練り上げられていた。その結果、チームP.Sは総長賞（最優秀賞）を受賞するに至った。大学生・大学院生を含む立命館全チームの頂点に高校生が立ったこの出来事は、もはや「高校生にしてはよくやった」という次元ではなく、本校の探究が実社会を動かす一翼として認められたことを証明したのである。

こうした一連の実践は学園内外に強い印象を残し、本校はやがて「探究の守山」と称されるようになった。その背景には、成果そのものだけでなく、社会に開かれた場で挑戦し続け、その価値を示し続けてきた過程がある。そして、個々の活動が学校全体の学びへと接続されていく流れが、この時期に形成されたのである。

4. 「特別な活動」から「当たり前前の学び」へ——自律を支える制度設計

私たちが目指したのは、探究を一部の“意識高い系”生徒たちによる「特別な活動」から、すべての生徒にとっての「当たり前前の学び」へと転換することであった。そのフレームとなるのが、リツモリ探究の方程式〈GIFT × ISSUE = CHANGE〉である。

自身の持つ天賦の才や好きなこと（GIFT）を、気になる社会課題（ISSUE）に掛け合わせる。どちらが欠けても、真の変革（CHANGE）は起きない。社会のための自己犠牲は長続きせず、単なる趣味では世界は変わらないからだ。内なる想いを外の世界の課題にぶつけてこそ、持続可能で独自性のあるアクション（実社会へのアウトプット）が生まれる。この方程式を全員が体現するための最大の仕掛けが、「生徒のセルフマネジメントによるフィールドワーク（以下、FW）の必須化」である。社会課題解決に向けてのアクションを形にするためには、文献やインターネットの情報に留まらず、実際に社会へと足を踏み出す

ことが不可欠となる。それゆえに、このFWを定期考査に代わる必須課題と位置づけ、生徒が社会と直接つながる“最初の一歩”を制度化した。

一般に、企業訪問や講演会は学校側が“お膳立て”したイベントとなりがちだが、それを行えば探究しているのは教員となり、生徒の大事な学びの機会を奪うことになる。アポイントメントから質問の設計まで、すべてを生徒自身に委ねれば、当然、依頼を断られることもあるが、それこそが社会のリアルだ。自分の提案が受け入れられた高揚感や拒絶された悔しさなど、生身の感情の積み重ねが次の行動の原動力となっている。

もっとも、このFWを柱に据えるまでには、校内でも慎重論を含めた多様な意見が飛び交った。未熟な高校生が直接外部へ働きかけることには、マナーへの懸念があった。さらに「時間の確保」も大きな壁であった。企業や自治体の活動時間に合わせて動くためには、平日の授業時間を使わざるを得ない。そこで踏み切ったのが、「FWのための公欠」制度の整備である。これにより、生徒が他の授業やクラブ活動とのバランスを図りつつ、外部の事情にも配慮しながらインタビューや実践的なアウトプットが行えるという、かつてない画期的な制度となった。教員の側にも大きな覚悟が必要であったが、こうして行われるFWは、リツモリ探究の質を支える大きな基盤となっている。

5. 地域から世界へと共鳴する「TANKYU」

共創探究科という枠組みの中で、生徒たちは自身の「やりたい」「放っておけない」と真摯に向き合い、多様な他者を巻き込みながら実社会へと踏み出してきた。それはある瞬間から強制や理屈ではなくなり、自身の経験からくる切実な想いや将来への純粋な志が、そうさせてきたのである。ここに一例をあげよう。

教師を目指す中で、児童養護施設の子どもの心に寄り添い、一人ひとりの良さを認め自己肯定感を育む「はっぴーカード」を考案・実践した優しさと使命感（2020年度・藪野 絢菜）。陸上競技者としての視点から和菓子文化の可能性を見出し、地域の老舗と連携してアスリート向け補食を作り上げた飽くなき探究心（2022年度・前田 光希）。自身がアトピー性皮膚炎に悩む中で、同じ境遇の人々の生きづらさを解消しようと薬局の待合室動画や教員向けマニュアルを作成したまっすぐな当事者意識（2024年度・玉井 芳果）。これらは、自らの「好き」や「得意」、あるいは「痛み」といった個人的な情熱を、社会というフィールドに接続した姿である。

一方、自身が見過ごせない社会課題に対し、自らの経験を掛け合わせることで、新たな価値を生み出していく姿も数多く見られた。コロナ禍で無機質なアルコールスタンドが溢れる中、

地元の竹害問題に着目し、竹製のスタンド製作を通じて捨てられるものに新たな命を吹き込んだ独創的な視点（2021年度・油布 愛奈）。核問題という巨大なテーマを前に、広島へのスタディツアー企画やステッカー配布を通じて、日常の中に「語れる空気」を創り出そうと模索した勇気ある挑戦（2023年度・小川 朋子）。家庭での週末里親体験を起点に、飲食店との商品開発に



老舗和菓子店と開発した商品「ワノチカラ」（2022）



グローバルAP2020成果報告会登壇者（2021.1.14）

よる制度の啓発から里子たちのコミュニティづくりまでをやり抜いた圧倒的な実行力（2025年度・石井 結椰）。

これらの実践に共通するのは、生徒が自分一人で完結させず、多様な大人や組織を巻き込み、対等に渡り合いながら次の世界を「共創」している点だ。そしてこのプロセスが、自身を、社会をより良い方向へ動かす確かなCHANGEとなっている。

さらに今、この学びは国境を越え、世界へと開かれ始めている。「社会課題を自分ごととして捉え、解決に挑む姿勢は、モロッコの教育風土とも深く響き合うのではないか」。立命館大学の鳥山純子教授によるこの示唆を原点に、2025年、本校の探究を「TANKYU」として世界へ発信するプロジェクトが始動した。同年8月の教員によるモロッコ訪問を皮切りに、現地校とのオンライン交流や「水」をテーマにした共同探究を重ね、2026年1月にはモロッコの高校教員が本校を来訪、教育交流MOU（提携）の締結に至った。

特筆すべきは、本校のカリキュラムが文化や価値観の違いを越え、世界に通じる普遍的な学びであることが証明されたことである。生徒たちもまた、国境を越えた同世代が同じテーマで試行錯誤する姿に触れ、自らの活動の意義を再確認することとなった。リツモリの探究＝TANKYUは、いまや地域を越え、世界と手を取り合って未来を拓くための“共通言語”となりつつある。



モロッコ王国2校との教育交流に関する覚書（MOU）調印式（2026.1.23）

6. 結びに代えて

20周年という節目は、一つの通過点に過ぎない。しかし、守山の地で生徒たちが地道に積み重ねてきた共創探究＝TANKYUが、海を越えた先の教室でも確かな共感をもって受け入れられたという事実は、私たちに大きな勇気を与えてくれた。

立命館で教鞭をとる者にとって、「未来を信じ、未来に生きる」とは、目の前の生徒たちが試行錯誤の末に社会を動かしていく、その姿を信じて支え続けること。そして、彼らが創りあげた新しい社会の中で共に生きていくこと。もしそうであるならば、それはとてつもなく幸せなことなのではないかと思う。

共創探究科 設置科目及び単位数の変遷 （設置年度を記載）

2018 1年	Thinking Design（AM総合1単位） *2019年度よりGLコースにおいても実施 2022年度よりFTコースにおいても実施
2019 2年	文社探究Ⅰ（AMGL学設2単位） 理数探究Ⅰ（AMsGLs学設2単位） *2019年度よりGLコース創設
2020 3年	《共創探究科 創設》 文社探究Ⅱ（AM学設2単位） 理数探究Ⅱ（AMs学設2単位） グローバルAPⅠ・Ⅱ（GL学設4単位） サイエンスAPⅠ・Ⅱ（GLs学設4単位）
2023 2年	共創探究Ⅰ（AMGLAMsGLs学設2単位） *文社探究Ⅰ・理数探究Ⅰを統合 共創探究F（FTFTs総合2単位）
2024 3年	共創探究ⅡA・ⅡB（AMAMs学設2単位・総合2単位） *文社探究Ⅱ・理数探究Ⅱを統合 グローバルAPⅠ・Ⅱ（GL学設2単位・総合2単位） サイエンスAPⅠ・Ⅱ（GLs学設2単位・総合2単位）

未来を実装するイノベーターたちの軌跡

—立命館守山 ICT 教育が切り拓いた2020-2026—

Hisayasu Ito

伊藤 久泰（メディア教育部 主任・情報科）

0. はじめに —進化し続ける学びの生態系—

2026年、立命館守山中学校・高等学校（以下、立命館守山）は創立20周年という大きな節目を迎えた。「自由と清新」「平和と民主主義」という建学の精神のもと、本校が教育目標として強力に推し進めているのが、「Game Changer（新たな価値と希望を生み出す人）」の育成である。多様な価値観を持つ他者と協働しながら、新たな価値やルールを社会に提案し、実装していく人材。この壮大かつ現代的なビジョンを現実のものとする最大の原動力となったのが、他校の追従を許さない圧倒的なスピードと深度で展開されてきた「ICT教育・デジタルクリエイティブ教育」である。

とりわけ、世界が未曾有の危機に直面した2020年から現在に至るまでの歩みは、本校の教育史において「革命」と呼ぶにふさわしい飛躍の期間であった。本稿では、数々の金字塔を打ち立ててきた立命館守山のICT教育の6年間の軌跡を紐解いていく。

1. 未曾有の危機を乗り越えたハイブリッド型学習 —「R-Style」の確立（2020～2021年）—

2020年春、新型コロナウイルスの世界的なパンデミックにより、全国の学校から生徒の姿が消え、多くの教育現場が混乱に陥った。しかし、立命館守山は静かに、そして力強く動き出していた。本校では2014年からいち早く「生徒1人1台のiPad環境」を整備しており、日常的にデジタルデバイスを活用する土壌がすでに完成していた。この確固たるインフラが、最大のピンチにおいて真価を発揮したのである。

休校期間中も学びの歩みを一切止めることなく、全教室にビデオ会議カメラを設置し、瞬時にオンライン授業へと移行。さらに2021年にかけては、オンキャンパス（対面）授業とオンライン授業をシームレスに融合させたハイブリッド授業支援システムを導入し、カナダ・オンタリオ州の高校卒業資格をオンラインで取得できるダブルディプロマプログラムもスタートさせた。こうして「Online × On-campus」を掲げる本校独自の学習スタイル「R-Style」が確立されたのである。

この最先端の学びを裏で支えたのが、大規模なインフラ整備である。2021年には校内ネットワークの全面刷新を実施。基幹ネットワークを1Gbpsから10Gbpsへと一気に増強し、教室のアクセスポイントも最新のWi-Fi 6規格へと統一した。これにより、アイリスグランド等の一部の屋外エリアでも快適なWi-Fi利用が可能となり、キャンパス全体がシームレスな学びの場へと進化した。

特筆すべきは、単に授業をデジタルで配信するにとどまらなかった点だ。講義動画やAIアプリを駆使した「個別最適化学習」をいち早く軌道に乗せ、生徒一人ひとりが自身の理解度や興味に合わせて教材、学習ペース、アプローチ方法を選択できる環境を

実現した。

教師が一方向的に知識を伝達する従来の受動的な講義形式から、生徒自身が考えて行動を起こす「能動的な学習姿勢」への劇的なパラダイムシフトが、この困難な期間に見事に完了したのである。

2. 協働的学びの最高到達点—「ロイロノート・スクール認定校」全国第1号の栄誉（2022年）—

個別最適化学習と並行して、本校が強力に推し進めてきたのがICTを活用した「協働的な学び」の深化である。その一つの到達点として2022年11月に歴史に刻まれたのが、全国の学校で初となる「ロイロノート・スクール認定校第1号」の選出であった。

教育プラットフォーム「ロイロノート・スクール」は導入以来、すべての教科において日常的に活用されてきたが、立命館守山が圧倒的であったのは「教員陣の研鑽とICT指導力」にある。大半の教員が厳しい基準をクリアして「ロイロ認定ティーチャー」の資格を取得。教員自らがクリエイターとなり、生徒の知的好奇心を刺激する創意工夫を凝らした授業実践を日々研究・開発する風土が完全に根付いたのである。

この教員の熱量に応えるべく、ハード面での環境整備もさらに加速した。2022年には教員の貸与PCを刷新し、全国に先駆けてWindows OSかMac OSを教員自身が選択して校務や授業に利用できる画期的な制度を導入。さらに、学習環境の質を担保するため、個人端末の学内Wi-Fi接続を制限することで、授業におけるセキュリティと通信の快適性を飛躍的に向上させた。

これにより、教室の風景はさらなる進化を遂げた。生徒同士の意見共有や共同編集が瞬時にスクリーンや手元の端末で可視化され、活発な話し合いや教え合いが日常の光景となった。生徒たちの多様な個性が発揮され、教師は知識の伝達者から、生徒の隠れた才能を引き出すファシリテーターへと役割を変えた。学校行事などでもICTを活用して主体的に活動する生徒の姿が多く見られるようになり、教員と生徒が共に創り上げる「双方向の学び」がここで一つの完成形を見たのである。

3. 「1人2台環境」への挑戦 —高度DX人材への助走（2023年）—

「次世代のGame Changerを育てるためには、テクノロジーを消費するだけでなく、自らデジタル技術を活用して『新しい価値を創造』できなければならない」——立命館守山の歩みは決して止まらない。2023年度からはさらなる高みを目指し、高校1年生を対象にiPadのタブレット端末に加えて、ノートパソコン（MacBook Air）を使用する「1人2台環境」という画期的な教育体制を導入した。

現代社会で求められるDX（デジタルトランスフォーメーション）

人材には、テクノロジー活用スキル、高度なプログラミング能力、そして生成AIを活用した複雑なデータ処理やクリエイティブ制作をこなす能力が不可欠である。日々の授業では、紙の教科書やテキスト、紙のノートの代わりにiPadを駆使して知識のインプットを行い、高機能なノートパソコンで高度なアウトプット（長文の論文執筆、高度なデータ分析、プログラミング、本格的な動画・デザイン制作など）を行えるようになった。

このプロフェッショナル顔負けの「1人2台体制」によって、生徒たちは高校生にしてすでに社会の第一線で通用する高度なITスキルとデジタルクリエイティビティを獲得していくこととなった。ICT教育を「次の段階」へと引き上げる、まさに先見の明を持った決断であった。

4. 世界を見据えたDX推進—「DXハイスクール」グローバル型認定と躍進（2024～2026年）—

スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の長年の実績により、立命館附属校のなかでも確固たる地位を築いてきた「理系のリツモリ」というアイデンティティ。それは今、他校の追従を許さない圧倒的なデジタル基盤と完全に融合することで、「サイエンス×最先端ICTのリツモリ」という唯一無二の立ち位置を確立したのである。

高度なICT環境を基盤に、立命館守山の視座は一気に「世界」へと広がっていく。その実力を国が強力に後押ししたのが、2024年4月、文部科学省の「高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）」において、極めて難易度が高く先進的な取り組みが求められる重点類型【グローバル型】に選出されたことである。

この採択を受け、本校のデジタル教育は「文理横断・探究・グローバル」をキーワードに爆発的な広がりを見せた。長年培ってきた理数・情報教育の強化はもちろんのこと、デジタル技術を活用した海外連携校（モロッコの姉妹校など）との日常的な交流がより活発化した。さらに、フィンランドでの海外研修では、現地の生徒と英語でコミュニケーションを取りながら、Pythonを用いて共同でプロダクトを開発するという高度なプログラムを実施。



フィンランドでの海外研修の様子

また、高校3年生の選択授業においては、映像制作会社のクリエイターを講師に招いた実践的な授業や、民間企業と連携したUnityでのゲーム制作、Xcodeを利用したアプリ開発などを展開している。これらの活動にはオンラインメンターのサポートも導入し、学校という空間の壁を越えたボーダレスな学びが次々と実装されたのである。

さらに2025年には、日本の大きな課題である「理系分野への女子進学率の低さ」に真っ向から挑むべく、「未来をつくるGirls × Coding 2025」といった先進的なプログラムを実施。女子生徒がITや理系分野へ進出するための強力なサポート体制を構築した。また、文部科学省の「AI活用による英語教育強化事業」にも採択され、AI技術を用いた革新的な語学学習アプローチもスタート。デジタル技術を用いて社会課題を解決し、多様な価値観を持つ世界中の人々と協働する素地が、ここに見事に整ったのである。

5. 2026年3月、そして未来へ

2020年からの6年間は、社会全体にとって激動の連続であった。しかし立命館守山は、ICTという強力な武器と「学びを止めない」という強い意志を手に、変化を恐れるどころか、自らが変化の波を創り出す存在として日本の教育界を牽引し続けてきた。

「Game Changer」。2台のデバイスを自在に操り、世界中の仲間とオンラインで繋がりながら社会課題の解決策を熱心に議論する生徒たちの真剣な眼差しを見ていると、この言葉が単なるスローガンではなく、確かな手触りを伴った現実であることを深く確信する。

立命館守山中学校・高等学校のICT教育は、ツールを「使えるようにする」段階をとうの昔に終え、そのツールを使って「世界をどう変えるか」を問うフェーズへと突入している。

本校の歩みは、ここで立ち止まることはない。早くも2027年の夏には、大規模な情報機器の刷新（リプレイス）を控えている。次期リプレイスでは、通信ネットワークのさらなる速度向上をはじめ、ランサムウェア等の新たな脅威から重要な情報を守るための強固なセキュリティ構築、教員の多様な校務スタイルを支える貸与ノートPCのOS選択制（Windows/Mac）の継続、そして見守りカメラの設置強化による教育活動の安心・安全の担保などを予定している。

20周年は決してゴールではない。常に進化を続けるこの学び舎から、次はどんな「Game Changer」たちが世界を変えに羽ばたいていくのか。予測不能な未来すら希望に変える彼らの挑戦から、これからも目が離せない。

ケアが息づく学校へ —生徒の声からひらくケアリングソサエティ—

Kazue Yamamura

山村 和恵（養護教諭）

1. 保健室から見た生徒たちの変化

本校の保健室は、開校当初より中学棟（1号館）1階に設置され、中学生・高校生が共通して利用する場所として機能してきた。けがや体調不良への対応はもちろん、生徒の心身の健康を支える場として、その役割を担ってきた。

本校の保健室に入室する生徒数は、2015年度以降おおむね2,400～3,200件程度で推移していた状況にあった。しかし、新型コロナウイルス感染症による休校措置のため、2020年度は2,516件まで減少した。その後、2021年度からは4,838件、2022年度には7,503件へと急増した。この変化は、生徒個人の課題だけでは捉えきれない、学校の構造や環境とも関わる多様な課題が顕在化していることを示していた。



保健室

2. 学校内における学習・生活空間の多層化と支援機能の再編

コロナ禍では、従来の学校生活では顕在化しにくかった生徒の声が具体的に表出するようになった。「昼食をクラスで食べられない」「食べる音が気になる」「学校にいと常に気を張ってしまう」といったものである。

この状況を受け、まず保健室の運用そのものを再設計した。従来は休養機能と相談機能が同一空間に混在していたが、入室者の増加に伴い、養護教諭の執務スペースと生徒の滞在スペースを明確に分離した。さらに、ゾーニングの考え方を取り入れ、生徒が周囲を過度に意識せず過ごせる環境を整えた。

さらに、学校内の既存空間を活用し、支援機能の拡張を行った。具体的には、これまで生徒会の資料置き場として使用されていた部屋を改修し、「SCルーム（カウンセリングルーム）」として再整備した。そして2号館の1階にあったSCルームは「サポートルーム（仮）」として新設した。この名称は暫定的なものであり、機能を固定化しないことを意図している。

運用面では、個別の判断や支援が、教員の経験則のみに依存しないよう、SSW（スクールソーシャルワーカー）を配置し、多職

種連携を明確化することで、生徒理解を行う体制を整備した。あわせて、これまで行ってきた医療・福祉・行政等の外部機関との連携をさらに深め、学校内外の多様な専門職とともに、生徒を支える体制をより充実させてきた。



カウンセリングルーム

3. 「性」を学ぶことから、「権利」を考えることへ —10年間の包括的性教育の実践—

場所を見直す一方で、生徒自身が自分の身体や関係、社会について考えるための学びの環境もつくってきた。その一つが、2015年度から継続している包括的性教育である。

2015～2018年度は、系統的な性教育の構築に取り組んだ。中学1年生では助産師、中学2年生では保健師、中学3年生では産婦人科医と連携し、生命の誕生や思春期の心身、妊娠・避妊など、プレコンセプションケアの視点を含む、身体や生殖に関する学びを中心に実施した。

しかし、身体や生殖を中心とした学びだけでは、生徒が日常の中で抱えている問いを十分に扱えないことが見えてきた。そこで2018年度から、当時、学校現場でまだ広く浸透していなかった包括的性教育の考え方をいち早く取り入れ、「人間関係」「社会的側面」「性自認」などへと学びの範囲を広げた。

2019年度からは、それまでの実践をさらに再編成した。『国際セクシュアリティ教育ガイダンス（International Technical Guidance on Sexuality Education）』を参照し、「具体的に」「社会的に」「グローバルに」を軸として、中学校から高等学校までの6年間を見通した包括的性教育プログラムを構築した。授業だけでなく、保健日よりや校内掲示、公開授業、高校生から中学生への発信など、性について学び、考える機会を作った。

2023年度以降は、【自分】【自分と他者】【自分と社会】の三つの層から、「権利」「POWER」「暴力」「対等性」などを扱っている。性教育で生まれた問いを授業の中だけにとどめず、防災キャンプや探究活動など、学校生活のさまざまな場面での実践へと拡大した。

4. 生徒と作る保健室

—「メタモリ」から「デジタル保健室」へ—

2020年、本校では卒業生が中心となり、学校全体を仮想空間に再現した「メタモリ」が制作されていた。この空間を見たとき、「これを保健室でも使えないだろうか」と考えたことが、のちの「デジタル保健室」の出発点となった。

2021年頃から、保健室をよく利用する生徒と「自分たちにとって保健室とはどのような場所か」を話し合った。そこでは、「対面では話づらい」「保健室は自分より弱い人が行くところ」という声があった。VRゴーグルを使って3D空間を体験してもらいながら、「どのような使い方なら入りやすいか」を生徒と一緒に考えた。デジタル保健室は、養護教諭が考えたものを生徒に提供するのではなく、生徒の声を取り入れながら、ともに制作する取り組みとして始まった。

2023年からは、生徒、卒業生、一般社団法人インパクトラボと協働しながら本格的な開発を進めた。長期欠席の生徒と自宅と学校をつないで実際に使用してもらい、その感想やアイデアを開発に反映した。また、文化祭などで体験会を行い、普段保健室を利用していない人にも試していただいた。

2024年1月からは、保健室にiPadを設置し、本格的な運用を始めた。デジタル保健室は、実際の保健室を3D空間に再現（デジタルツイン）し、生徒はアバターを介して養護教諭だけでなく、生徒同士や教員とも関わるができる。保健室内だけでなく、校内外からアクセスすることも可能である。

同時に、メタバースだけではなく「AI養護教諭」も開発した。自分の状態や疑問を整理するための一つの支援的なリソースとして位置づけている。アバターについても、生徒からの意見を受け、性別を特定しない中性的なデザインとしている。

デジタル保健室で目指したのは、相談方法を増やすことだけではない。生徒自身が、その時の自分に合った「関わりのかたち」を選べる環境をつくることであった。

こうしたデジタル保健室をはじめとするICTを活用した実践は、2024年「ICT夢コンテスト」文部科学大臣賞を受賞した。さらに、2025年には第56回「中日教育賞」、第1回「立命館アワード」を受賞した。これらの受賞は、デジタル技術そのものだけでなく、生徒の声を起点に、学校・生徒・卒業生・技術担当者がともに保健室のあり方をつくり変えてきた実践が評価されたものと受け止めている。



AI養護教諭



デジタル保健室

5. 支援から、誰もが使える場へ—「オルバ」の誕生—

サポートルームを運営する中で見てきたのが、「誰がそこにいるのか」ということである。学校で生徒と関わる大人の多くは教員であり、その関係には指導や評価という側面も伴う。そこで、教員とは異なる立場で生徒と関わる大人の存在について検討した。

2023年5月から、ユースワーカー的な役割を担うサポーターを配置した。雑談をする、一緒にゲームをする、何気ない時間をともに過ごす。必要に応じて困りごとを話すこともあるが、「相談すること」を目的とした関係ではない。評価や成績と結びつかない大人が日常的にいることで、生徒と大人との新たな関係が生まれていった。

そして2024年、サポートルームを「オルバ」へと改称した。「サポート」という名称が、「支援する側／支援される側」という関係をあらかじめつくってしまうのではないかと考えたからである。困っていることや支援の必要性を利用の前提とせず、誰もが理由なく利用でき、ただそこにいることもできる場へと、そのあり方を見直した。



オルバ

6. ケアが息づく学校へ

—「成長の中で守られる権利」を問い続けて—

ここまでの実践は、最初から一つの計画に沿って進めてきたものではない。その時々を生徒の声や姿を起点に、保健室に限らず、学校全体として何ができるのかを考え、実践を重ねてきた。振り返るとそれは生徒を学校の仕組みに合わせるのではなく、生徒の状態や声に応じて、学校の側の環境や関わり方を変えていこうとする挑戦でもあった。

現在はさらに、屋外にパラソルやベンチを置く「アウトドア保健室」、カシオ計算機株式会社が提供するAIペットロボット「Moflin（モフリン）」の活用、株式会社USEN（U-NEXT.HD）が提供する音楽を活用した空間づくりなど、ケアを「人による支援」だけに限定せず、モノや音、空間を含めた環境そのものへと広げる実践にも取り組んでいる。

本校の教育支援のパンフレットの表紙には、Rights Protected in Your Growth——「成長の中で守られるあなたの権利」という言葉を掲げている。権利が学校生活の中で守られるとは、生徒が自分に合ったバシヨやヒト、つながり方を選び、必要に応じて選び直すことのできる環境があることでもある。そのために、生徒の声を聞きながら、つくり変えていく。そうした日々の積み重ねが、学校にケアが息づく「ケアリングソサエティ」につながっていくのではないだろうか。

参考文献：山村和恵、上田隼也（2026）
『デジタル保健室 学校からひろがるケアリング・ムーブメント』
紫洲書院

校則の見直しと新しい学校ルール

—「管理」から「自律」へ、誰も置き去りにしない自由の相互承認を目指して—

Hiroki Tsuji

辻 大樹（前 高校生徒部 主任）

0. はじめに —20周年という節目に問う「自由」の本質—

立命館守山高等学校は、創立以来「自由と清新」の建学の精神、そして「平和と民主主義」の教学理念を礎としてきた。私たちは、既存の枠組みに囚われず、自ら新たな価値を社会に実装できる「Game Changer」の育成を教育目的として掲げている。

創立20周年を迎える今、取り組んでいる「校則の見直し」は、単なる規則の緩和ではない。それは、学校という共同体を、生徒たちが「保護の対象」から、自らの足で立つ「権利の主体」へとアップデートするための、壮大な民主主義の実践である。私たちは今、ルールを「与えられるもの」から、構成員による合意形成の下で「創り続けるもの」へと定義し直している。

1. 改定の背景 —社会の変化と「生徒指導提要」の要請—

今回の改革の背景には、2022年度の『生徒指導提要』の改定がある。そこでは、校則を「児童生徒が自主的・自律的に成長することを支援するもの」と再定義し、社会の変化に合わせて絶えず見直しを行うよう求めている。

また、2023年に施行された「こども基本法」は、全てのこどもが「意見を表明する機会」を確保され、その意見が尊重されることを求めている。本校はこの社会的要請を、立命館の理念を具体化する絶好の機会と捉えた。従来の「根拠を説明できないルール」を維持し続けることは、生徒の思考停止を招き、自律の芽を摘んでしまう教育的不誠実になりかねないからである。

2. ルールメイキング活動の歩み

—対話による合意形成のプロセス—

本校の校則見直しは、2023年度に発足した「ルールメイキング委員会」という生徒たちの主体的な活動から始まった。2024年度には生徒総会で正式な委員会として承認された彼らは、単に「自由」を叫ぶのではなく、極めて慎重かつ論理的なプロセスを辿ってきた。

彼らが2年間にわたり積み重ねてきた主な活動は以下の通りである。

- ・教員へのインタビュー調査：なぜこの校則が作られたのか、その歴史的背景を紐解いた。
- ・法理の学習：日本国憲法、子どもの権利条約、生徒指導提要を学び、ルールの正当性を検証した。
- ・全校生徒アンケートと対話会：900名近い生徒の声を集約し、「大切だと思う校則」と「疑問に思う校則」を可視化した。
- ・PTA・学校執行部との懇談：保護者や学校運営者という異なる立場の大人たちと議論を重ねた。

このプロセスこそが、民主主義そのものである。「自分たちの学

校を、自分たちの手で変えられる」という当事者意識（エージェンシー）の獲得こそが、本改革の最大の教育的価値である。



生徒へのアンケート実施の様子



ルールメイキング対話カフェ@立守の様子

3. 「4つのリスペクト」

—禁止事項から行動指針（マインド）へ—

2025年度から施行された新しいルールは、従来の「禁止事項の羅列」を廃し、「Respect for all（すべてにリスペクトを）」という4つのマインド（行動指針）を中核に据えている。

1. Respect for Oneself（自分自身へのリスペクト）：自分の頭で考え、自分の意見を持つ。自分の価値観や健康を大切にする。
2. Respect for Others（他者へのリスペクト）：異なる価値観を尊重し、対立は直接対話で解決する。他者が苦痛を感じる言動を慎む。
3. Respect for Society（社会へのリスペクト）：公共の場である学校にふさわしい身なり・言動を自律的に選択し、法令を遵守する。

4. Respect for Learning（学びへのリスペクト）：主体的に学び、より良い授業にするため教員との対話を心がける。

具体的には、服装規定において靴下や防寒着の細かな指定をなくし、登下校時の指定体操服やクラブ着の着用を認めた。これは単に「何でもいい」ということではない。学校というTPO（時・所・場合）を考え、生徒が自ら「選択」し、その選択に責任を持つことを求めているのである。

4. 多様性がもたらす「自己肯定感」と「安心の学校環境」

なぜ、外見の自由がここまで重要なのか。それは、多様性を認めることが「誰一人見捨てない」という理念の具現化だからである。

ある生徒は中学時代、周囲とのわずかな「まっすぐさ」の差異を恐れ、地毛が直毛であるにもかかわらずストレートパーマをかけ続けて自分を消していたと語った。単一の「正解」しかない環境では、わずかな差異が過剰に強調され、生徒を「比較の地獄」へ追い込んでしまう。

しかし、校則が変わり、学校に多様な色が溢れたとき、彼女は「比べる対象が1つじゃなくなった」ことで呪縛から解放された。また、グループワークが苦手な生徒が、髪を自分の好きな色に変えることでアイデンティティを取り戻し、笑顔で写真に写れるようになった事例もある。

これらのエピソードは、見た目の自由が単なるファッションではなく、「私はここにいていい」という自己肯定感と、学校への深い信頼感に直結していることを示している。事実、全校生徒アンケートでは97.5%の生徒が新しいルールの下で「安心・安全に過ごせている」と回答している。

5. 葛藤と批判に向き合う —教育的誠実さとは何か—

当然ながら、この改革には全ての賛成が得られているわけではない。保護者や教員の中には「学校の品格が下がるのではないか」「指導が徹底できていないから緩めただけではないか」という厳しい指摘もある。

しかし、私たちは確信している。今回の改定は決して「緩める」ことではない。むしろ、「ルールだから守れ」という思考停止から、「なぜその行動が必要なのか」を問い続ける、より厳しい倫理観を生徒に求めているのである。

例えば「化粧」や「髪染め」をめぐる議論において、それらを単に禁じるのではなく、個人の内面の表現、あるいは自分を守るための防衛として捉える視点が必要である。生徒が「違和感」を感じたとき、それをすぐに規制で排除するのではなく、「なぜそう感じるのか」「他者の自由を認めることとは何か」を共に考えること

が、民主主義教育の真髄である。

また、「家庭生活に関するルールの見直し」も重要な柱である。アルバイトや運転免許取得などの家庭の責任に属する事柄に学校が過度に介入しない方針を明確にした。これは教育基本法第10条に定められた「保護者の第一義的責任」を尊重し、学校の役割を適切に整理した結果である。

6. 課題としての「部則」と「ブランド」の再定義

一方で、解決すべき課題も存在する。学校全体のルールが変わっても、クラブ活動独自の「部則」によって行動が制限される生徒の葛藤がある。もちろん、部活動ごとのルールは、生徒自身がより良い運営を行うために必要な場合もある。だからこそ、生徒と顧問が共にルールを作り、全員が納得したうえで活動することが重要であり、そのような「共創」の機会をいかに確保するかが、今後の課題となるだろう。

また、派手な髪色が「立命館のブランド価値を下げる」という懸念を持つ卒業生の声もある。ブランドとは、外見の統一によって守られるものではなく、「本校の生徒がいかに主体的で、他者を尊重し、自律的な行動をとっているか」という内実によって創られるべきものである。私たちは、生徒たちが自ら「リツモリ生としての誇り」をどう定義し、社会とどう折り合いをつけていくのを見守り、伴走し続けなければならない。

7. 結び —信頼の持久戦として—

教育とは、あらかじめ決められた「型」に生徒をはめ込むことではない。それは、多様な価値観の中で葛藤し、失敗し、それでも自分たちでより良い秩序を「創り続ける」プロセスを信じることである。

「当たり前は、当たり前じゃない」。この小さな気づきをコンパスに、私たちはこれからも歩みを進める。本校の新しいルールは、完成形ではない。それは、生徒、教職員、保護者が、暫定的な合意を目指して対話を繰り返す「未完のプロジェクト」である。創立20周年という節目に、私たちは「管理」という安易な道を手放した。その代わりに手に入れたのは、生徒一人ひとりが自分の足で立ち、他者と繋がり、より良い社会を創造するための「自由」という名の陰しくも希望に満ちた道である。立命館守山はこれからも、生徒たちが安心して自分を取り戻し、未来を変える「Game Changer」へと成長できる場所であり続けることを誓う。

境界を越え、未来を創る学び舎へ —1号館改修とラーニングコモンズがもたらす「新しい学び」の形—

Takeshi Yanai

箭内 健（前 副校長）

0. はじめに

立命館守山高等学校が創立20周年という記念すべき大きな節目を迎えるにあたり、これまでの歩みを力強く支えてこられたすべての関係者の皆様、ならびに地域社会の皆様にご心より深く敬意と感謝を表します。

この20年間、本校は社会の劇的な変化に先駆け、ICT教育の推進やグローバル探究など、常に先進的かつ独自性のある教育プログラムを実践してまいりました。そして今、次の時代を真っ直ぐに見据えたとき、生徒たちが一日の大半を過ごす「学校という空間」そのものを、根本からアップデートする必要に迫られました。本稿では、新たな教育のシンボルとも言える「1号館改修およびラーニングコモンズ整備」プロジェクトの軌跡と、そこに込められた教職員の熱い思い、そして教育的意図について、未来への記録として留めたいと思います。

1. 変わりゆく教育環境と空間デザインの必要性

この壮大なプロジェクトの端緒となったのは、社会の急速な変化と、それに伴う「学びの質」の劇的な転換でした。かつての学校建築は、教員が黒板の前に立ち、生徒が全員前を向いて静かに講義を聴く「一斉授業」に最適化されて造られていました。しかし現在、教育現場で強く求められているのは、他者対話しながら複雑な課題を解決していく「協働的な学び」と生徒一人ひとりの興味関心やペースに合わせた「個別最適化された学び」のシームレスな融合、すなわちブレンディッドラーニングの実践です。

さらに、新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、私たちに「安全でゆとりある空間」の重要性を痛烈に再認識させました。「3密」を回避しつつ、生徒同士の豊かなコミュニケーションや偶発的な出合いをどう担保するか。公立学校における少人数学級化の動向や、国際的なOECD基準（23人学級）をも視野に入れたとき、既存の「四角い教室」の枠組みを越えた、全く新しい環境整備が急務となったのです。

2. 教室と廊下の「境界」をなくす

環境ワーキンググループ（環境WG）や将来構想委員会等で、多くの対話や学習会、視察が重ねられる中で、最も象徴的な改修案として打ち出されたのが、「教室と廊下の壁をなくす」という構想でした。

立命館小学校の空間づくりにヒントを得、従来の分厚い壁を取り払い、視認性と開放感に優れた「ガラス張り」と「ワイドスライドドア」を大胆に導入しました。これにより、最大約40%の開口部を確保することが可能となりました。ただ闇雲に開放つだけ

ではありません。中等教育らしく授業に深く集中すべき時にはスライドドアを閉じることで確かな遮音性を保ち、「視認性・遮音性・流動性・開放感」のベストミックスを追求しています。

この改修によって、廊下は単なる「移動のための通路」ではなくなりました。教室から連続した「学びの拡張スペース（ラーニングコモンズ）」へと生まれ変わり、生徒たちは教室と廊下を自由に行き来しながら、その時の学習内容や気分にもっと適した場所を主体的に選ぶことができるようになったのです。



3. 環境WGでの白熱した議論

—「壁をなくす」ことへの葛藤と決断—

とはいえ、「教室の壁を取り払う」という大胆な構想が、最初から諸手を挙げて賛同されたわけではありません。環境WGや教職員の会議では、現場の最前線を預かる教員だからこそのリアルな葛藤や懸念が次々と噴出しました。

「隣のクラスの音声が干渉して、授業に集中できないのではないか」「空間が流動的になることで、決まった居場所がないと不安を感じてしまう生徒がいるのではないか」「2クラス3展開という複雑な時間割や動線を、果たしてスムーズに回しきれぬのか」——。これらは決して変化を拒む後ろ向きな意見ではなく、日々の授業の様子や生徒一人ひとりの顔を真剣に思い浮かべからこそ生まれるいわば「愛」ある懸念でした。

会議の中では、意見がぶつかり合うこともありましたが、しかし、私たちは「できない理由」を並べるのではなく、「どうすれば実現できるか」へと議論の舵を力強く切りました。

音の干渉や空間の仕切りに対する不安には、可動式の巨大なホワイトボードやパーテーションを「動く壁」として活用するアイデアが生まれました。流動的な空間に戸惑う生徒への配慮として、あえて「囲まれ感」のある落ち着けるスペース（ヌック）を残すなど、ハード面の死角をソフト面の工夫と運用ルールでカバーする具体的な解決策が、教員同士の粘り強い対話の中か

ら次々と生み出されていったのです。この侃侃諤諤の議論のプロセス自体が、教職員のベクトルを「新しい学びの創造」へと一つに統合していく、本校にとってかけがえのない財産となりました。

4. 「サードプレイス」としての学校空間

この空間改修の根底には、世にいうファーストプレイスである家庭、そしてセカンドプレイスたる学校の中に、「サードプレイス（心地よい第3の居場所）」をつくることはできないものかという強い願いが込められています。

キーワードは「リビング化」と「コモンズ化」です。学校を単に「学ぶだけの場所」ではなく、生徒がいきいきと「生活する場所」、そして仲間と「集う場所」として捉え直しました。改修後の空間には、リビングルームにあるような温かみのある木目調の固定什器や、腰高のロッカーを配置し、圧迫感のない居心地の良さを細部まで演出しています。

また、教室内の「正面性（全員が黒板の方向を向く構造）」をなくすことも大きな革新の視点です。「みっちり・もくもく」と個人作業に深く没入する時間と、「ゆったり・わいわい」とグループでアイデアを共有する時間を、空間のレイアウトを自分たちで変えることで瞬時に切り替えることができます。



5. 生徒たちの声と新しい風景

—流動性がもたらした変化—

実際にこの新しい空間で学び始めた生徒たちからは、私たちの想像を遥かに超えるポジティブな反応が返ってきています。

「その日の学習内容に合わせて、一番集中できる場所を自分で選べるのがいい」「大きなホワイトボードや時にはガラス張りの

壁面を使って、みんなで立ってアイデアを書き出しながら話し合うのが楽しい」といった声が多く聞かれます。空間の至る所に電源コンセントが備わっているため、PCやモニターをフル活用した多様な学びが、ごく自然な日常の風景となりました。

また、物理的な壁がなくなったことで、「これまであまり接点のなかった他クラスの人とも、空間が繋がっていることで自然と挨拶や会話が生まれるようになった」という喜ばしいエピソードも寄せられています。開放的な空間は教員の見守りの視線を確保することにもつながっています。本校がこれまで大切に育んできた「多様な学び」や「対話・協働の力」が、この流動的な空間によってさらに豊かに引き出されていることを、教員一同も日々強く実感しています。

6. 結びに一次の10年、20年へのプラットフォーム

一から新しい建物を建てるのではなく、既存の1号館の歴史ある持ち味を最大限に引き出しながら、空間の質を劇的に変えるというサステナブルなアプローチは、本校の環境問題への真摯なスタンスを示すブランドアクションでもあります。

壁がなくなったことで、生徒たちの視界は大きく広がり、学年やクラスという枠組みを軽やかに越えた偶発的なコミュニケーションが日常的に生まれるようになりました。開放的で自由な空間は、思考の柔軟性を育み、これからの時代に不可欠なクリティカル・シンキングやクリエイティブ・シンキングを大いに刺激します。また、主体性やアウトプットが常に問われる学びのスタイルは緊張を伴うものです。「リビング化」は意識して生徒がリラックス、リカバリーすることができる空間、時間の創造でもあります。

開校以来使用してきた滋賀県産の材木を使った机やイスを始めとした教室、廊下の設えも温かいぬくもりを感じさせる思い出深い学び舎でした。20周年を機に新しく生まれ変わった1号館も、ハードとして「完成して終わり」ではありません。この自由な空間を真っ白なキャンバスとして、主役である生徒たち自身が「自分たちの居場所」と「新しい学び方」を日々アップデートし、創造していくことでしょう。立命館守山中学校・高等学校の次なる10年、20年の輝かしい歴史が、この境界のない自由な空間から力強く紡ぎ出されていくことを確信し、筆を置かせていただきます。



世界に希望の火を灯すGame Changerたちの活躍 —立命館守山がめざす未来像—

Naruhisa Iwasaki

岩崎 成寿（校長）

1. はじめに

2006年4月、守山市立守山女子高等学校からの公私移管により開校した立命館守山高等学校が、翌年に中学校を開校し、中高一貫校として20年間で着実な歩みを重ね、めざましい発展を遂げてきたことは、ここまでの論考で明らかとなった。

本稿では、その延長線上にある「立命館守山の未来像」を構想する。昨年来、学校法人立命館は学園としてR2030チャレンジデザイン後半期計画の策定を進めてきたので、本校の後半期計画の内容を軸に、2030年以降の学校像を提示する。

2. 挑戦をもっと自由に

—学園ビジョンR2030と附属校の方向性—

2020年、立命館は「学園ビジョンR2030」を策定し、「挑戦をもっと自由に」を合言葉に、大学・学園が向かうべき方向性として「次世代研究大学」「次世代探究学園」の実現を掲げた。これは、イノベーション・創発性人材の育成を通じて、新たな社会共生価値の創出をめざす壮大な事業である。

また、立命館一貫教育部・附属校は、総合学園としての圧倒的なスケールメリットとリソースを最大限に活かし、立命館学園における「小中高大院18年一貫教育」の再設計をめざしている。それは、初等中等教育から高等教育・研究機関までがシームレスに繋がる「タテの一貫制の深化」を図りつつ、他の附属校ともノウハウを共有し、外部の企業や地域社会との共創を進める「ヨコの共創制の拡充」を推進することで、従来の学校運営モデルの根本的転換をはかるというものである。

さらに、これらすべての教育・研究活動の不可欠な基盤となるのがDE&I（ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン）の理念である。立命館は2026年、従来の多様性（ダイバーシティ）と包摂性（インクルージョン）に、新たに「公正性（エクイティ）」を明確に位置づける方針改正を行った。多様な背景を持つすべての構成員が、単一の尺度で評価されるのではなく、それぞれの特性に対応した環境を保障することが公正性である。児童・生徒・学生を「多様な個人」として尊重する土壌からこそ、未来への自由な挑戦が生まれ、社会を変革するイノベーションが創出されるはずである。

3. 立命館守山の未来像

—未来のGame Changerが育つ学校のカタチ—

こうした学園のビジョンをふまえ、本校は2030年以降を見据えた新たな学校像を次のように定めた。

「『学びの社会実装化・DX化』を通じてソーシャル・アントレプレナーシップを醸成し、大学進学後に次世代研究と社会起業

をめざす未来のGame Changerを輩出する」

ここでいう「学びの社会実装化」とは、教室やテスト用紙の中で完結する学習にとどまらず、実社会のリアルな課題に直接向き合い、自らが導き出した解決策を、他者と協働しながら社会へ提案・実装していく学びである。開校以来20年間、地域社会との結びつきを深めてきた本校だからこそ、この経験を通じて、社会をより良く変えていこうとする精神（社会起業家精神＝ソーシャル・アントレプレナーシップ）を育むことができる。生徒一人ひとりの可能性を信じ、その主体的な挑戦を後押ししてこそ、真の学びと成長が保障されるはずである。

そして、大学進学後に「次世代研究」に取り組んだ先には、多くの卒業生が大学院進学をめざすことを期待している。これは単に高学歴化を願うものではない。中学・高校の段階から探究型学習を通じて高度な研究志向を育み、大学進学後も知的好奇心を燃やし続け、研究の最前線へ自然に歩みを進める創発性あふれる人間の育成こそが、一貫教育の高い理想と言える。

4. 未来へのチャレンジデザイン

—4つの戦略目的をめざす教育改革—

この壮大な未来像を現実のものとするため、本校はR2030チャレンジデザイン後半期計画において4つの「戦略目的」を設定し、新たな教育改革に挑む。

第一の戦略は、「知的好奇心に基づき『学び続ける力』を持つ生徒の育成」である。ここでの最重要課題は、次期学習指導要領を見据えたカリキュラム改革にとどまらず、生徒が自らの学びに対するオーナーシップ（主導権）を高める仕組みの構築である。その切り札として、「高校全日制単位制」の導入検討を本格化させる。生徒一人ひとりが自身の興味・関心、学力到達度、そして将来のキャリアプランに合わせて柔軟に科目を設計できる環境を整え、学校から「与えられる学び」から、自らの意思で「つかみ取る学び」への転換をめざしたい。

第二の戦略は、「探究学力×DX（デジタルによる変革）スキルを基礎に学びの社会実装化に取り組む生徒の育成」である。テクノロジーの急激な進化の下、生成AIとの共創やデジタルとアナログの効果的な併用手法をいち早く授業に組み込んでいく。さらに、データサイエンスや社会起業といった時代が求める新科目の開発を進める。また、立命館の起業・事業化支援プラットフォームである「RIMIX」や、地元・守山市の起業家育成ネットワークとの強固な連携を推進する。特筆すべきは、「校内ベンチャー企業」設立構想である。教員や専門家、大学生のサポートのもと、高校生自身が実際の起業と事業運営に関わるプラットフォームを校内に創出することで、ビジネスを通じた社会課題の解決とい

う圧倒的に実践的な学びの場を提供することを近い未来に実現したい。

第三の戦略は、「正課外において多様な分野・形態で高い目標に自主的に挑戦する生徒の育成」である。私たちは、単なる「勝利至上主義」を目的とはしない。生徒が自身の情熱を注げる活動に思い切り取り組み、他者との協働を通じて揺るぎない自分軸とやり抜く力や協調性等の「非認知能力」を形成することを最重要視する。そのために、教員の長時間労働に依存してきたクラブ活動のあり方を根本から見直し、連携する企業への外部委託化を順次拡大していく。同時に、既存のスポーツ・文化クラブという枠組みに囚われない多様な「アフタースクール事業」を構築し、すべての生徒が挑戦する環境を構築したい。

そして第四の戦略が、これらすべての教育活動の基盤となる「持続可能な学校運営・経営の確立」である。生徒の成長を促すためには、伴走者である教職員自身が心身ともに健康であり、働きがい（Well-being）を感じられる環境が不可欠である。本校は、従来の業務改善を主眼とした働き方改革を継続しつつ、さらに一歩踏み出し、教員自身が教育業務を通じて成長を実感し、専門性を高めていく「学び方改革」を本格化する。また、キャンパス環境のアップデートも急務である。STEAM教育（科学・技術・工学・数学・芸術を統合的に学ぶ教育）や生徒が多様な形で自律的に学べる空間である「ラーニングコモンズ」をさらに高度化するための次世代型キャンパス創造に向けた「施設整備アクションプラン」を実行に移し、先進教育をハード・ソフトの両面から強力に下支えしていきたい。



「ロボカップジュニア世界大会2024」優勝の総長訪問

5. おわりに—未知への自由な挑戦を—

「正解」があらかじめ用意され、大人がそれを一方的に教え込む時代は、すでに過去のものとなった。これからの時代に求められるのは、生徒を管理する施設としての学校ではなく、社会のあらゆるリソースとシームレスに接続し、世代を超えて社会をより良くするための「共創の場」としての学校であり、その中での生徒の学びと成長の高度化である。

立命館守山は、未来を待つのではなく、未来をつくる学びを実装し続ける。

私たちは教育のあり方を不断にアップデートし、生徒を未熟な保護の対象としてだけでなく、未来を共に創る「自律したパートナー」として最大限に尊重する。生徒、保護者、教職員、そして地域の関係者が固く手を取り合って、未知への自由な挑戦を続ける立命館の精神を体現したい。

2030年、そしてその先の未来において、立命館守山から巣立った若者たちが、多様な価値観を尊重しながら社会の困り事にやさしく寄り添い、自らの手で新たな希望の火を灯すGame Changerとして世界で活躍する——。

それこそが、私たちが揺るぎない決意をもってめざす、未来の立命館守山中学校・高等学校である。



滋賀県経済同友会「世界潮沼の日プレフォーラム2025」

20周年記念座談会 「今を生きる立守生、輝く未来へ」

記念誌企画の一つとして、様々な分野で挑戦を続ける生徒たちと校長、副校長を交えて座談会を実施しました。

生徒たちが現在取り組んでいる活動や学校生活への思い、将来の夢について語り合いました。

ファシリテータ：奥 梨名(記念誌編集長)
フォトグラファー：猪飼 ひより(高校3期生)



〈後列左から〉 森園 崇司 副校長 岩崎 成寿 校長 保木 康宏 副校長
〈前列左から〉 菅 ひなた 田中 花奈 大島 朱莉 石崎 脩也 西島 賢太郎

2026.7.17
@ 校長室

参加者ご紹介



岩崎 成寿 校長

教員生活は38年。国語の教員。趣味はギターと仏像鑑賞、お寺巡り。



森園 崇司 副校長

教科は数学。高校3年生の数学探究の授業を担当。本校19年目で、現在も剣道部の指導に携わる。



保木 康宏 副校長

教科は理科。体を動かすことが好きで、大学までは野球、働き出してから始めたソフトボールは現在も続けている。



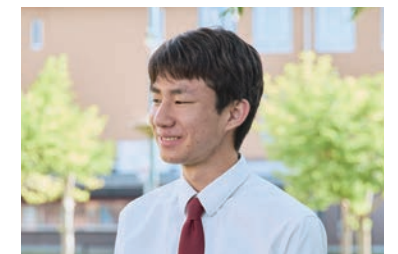
大島 朱莉さん(高校3年)

幼い頃から親しんできたウィンドサーフィンで世界の舞台へ挑戦を続け、国際大会で経験を重ねながら、オリンピック出場、そして金メダル獲得という大きな夢に向かって努力を続けている。



石崎 脩也さん(高校1年)

中学生の頃から社会課題に関心を持ち、自ら現地へ足を運びながら探究を続けてきた。福島でのフィールドワークをきっかけに、核のごみ問題やエネルギー問題への理解を深め、「知りたい」という思いを原動力に、対話と探究を重ねてきた。



西島 賢太郎さん(高校2年)

ロボットづくりの楽しさに魅了され、中学生の頃からプログラミングに取り組んできた。ロボカップジュニアレスキュー部門では全国優勝、世界大会6位という成績を収め、その後はAIアプリ開発にも挑戦。「人の役に立つものを作りたい」という思いを胸に、新たな可能性へ挑戦し続けている。



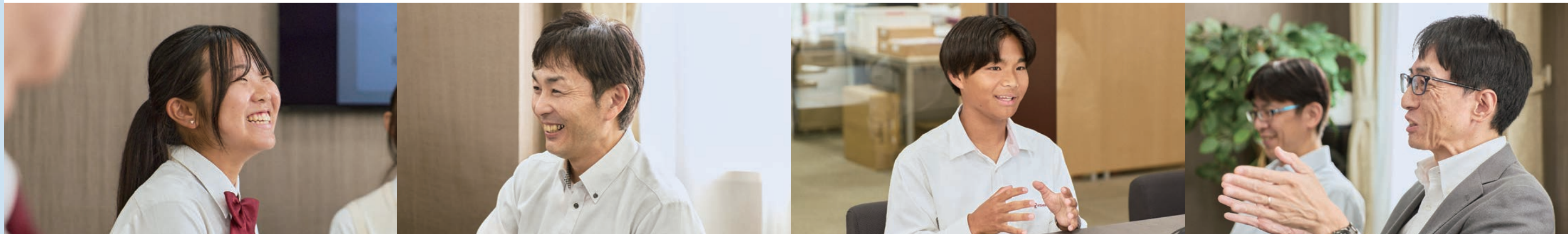
田中 花奈さん(中学3年)

中学入学と同時にバトントワリング部へ入部し、初心者から努力を重ねながら技術を磨いてきた。学習面でも目標を明確に定め、部活動との両立を大切にしながら日々努力を積み重ねている。



菅 ひなたさん(中学2年)

小学1年生からバトントワリングを続け、全国大会優勝や世界大会挑戦へと歩みを進めてきた。学校とクラブチームの両方で技術を磨きながら、勉強との両立にも取り組んでいる。



Theme 01

立守生の活動紹介

大島 朱莉さん ウインドサーフィンで世界へ挑戦する

大島さん 私はウインドサーフィンという競技に取り組んでいます。スペインで開催されたシニアの国際大会『プリンセス・ソフィア杯』に出場し、世界のトップ選手たちと競い合いました。さらに、アジア大会代表選考では第1次、第2次選考とともに女子1位で通過し、日本ユース代表としてアジア大会への出場が決まりました。また、最近行ったスペインで開催されたユース世界大会では、19歳未満のカテゴリーで女子20位という成績を収めました。

ウインドサーフィンを始めたきっかけ

大島さん 両親や兄がウインドサーフィンを趣味にしていたことがきっかけです。幼い頃から海や琵琶湖で親しみ、小学2年生から競技を始め、小学4年生で大会に出場するようになりました。水面を滑走する爽快感や、風を読みながらレースを組み立てる奥深さに魅力を感じています。

現在取り組んでいる種目について

大島さん 現在はオリンピック種目『iQFOiL』に取り組んでいます。従来のウインドサーフィンボードにfoil（翼）を取り付けることにより、揚力でボードが水面から浮き上がり、時速50～60kmで走る迫力ある競技です。普段の活動としては、オリンピック強化委員会のHOPE育成プログラムの

強化選手として、全国各地で行われる強化合宿に参加し、技術だけでなくフィジカル面や栄養、ルールについても専門家から学んでいます。

今後の目標

大島さん 一番の大きな目標は、オリンピックで金メダルを獲得することです。まずは2028年のロサンゼルスオリンピックに出場し、その先の2032年ブリスベンオリンピックで金メダルを獲得したいと考えています。この立命館守山で文武両道を実践しながら、オリンピックという夢に向けて頑張っています。

岩崎校長 この競技で、過去にメダルを獲った日本人選手はいますか？

大島さん まだ日本人選手のメダル獲得はありません。だからこそ、自分がその第一歩を切り開きたいと思っています。



石崎 脩也さん 「核のごみ問題」探究活動から未来を考える

探究の原点

石崎さん 中学生の頃から、エネルギー問題や核のごみ問題に関心がありました。きっかけの一つは、兄が取り組んでいた探究活動です。家でもエネルギーや環境について話題になることが多く、自然と興味をもつようになりました。

福島でのフィールドワーク

石崎さん 中学生の時に「福島学カレッジ」のオータムセミナーに参加し、福島の第一原子力発電所の事故が起こった地区を訪れました。実際に現地へ行ったことで、福島の復興に向けた取組や、地域の皆さんの思いを肌で感じる事ができました。当時、自分がサッカーをしていたこともあり、「サッカーを通して福島を応援できないか」と考えました。そこで、環境省主催の「『福島、その先の環境へ。』チャレンジアワード2023」では、「福島でワールドカップを開催する」という提案を発表し、入賞作品に選ばれました。

核のごみ問題への挑戦

石崎さん 福島での経験をきっかけに、もっと核のごみ問題について学びたいと思うようになりました。その後、NUMO（原子力発電環境整備機構）が主催する中学生サミットに参加し、全国の中学生と意見交換をする機会をいただき、NUMO第5回私たちの未来のための提言コンテストでは、「自分と核のごみ問題をつなぐ『もしも…？スタディ・ツアー』」という提案を発表し、優秀賞に選ばれました。これは、核のごみ問題を自分事化することが重要なのではな

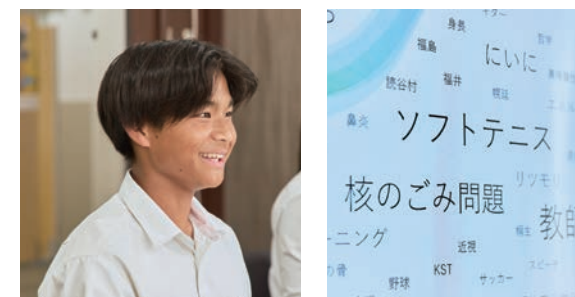
いかと考え、提案しました。その後も、北海道の神恵内村や幌延深地層研究センター、美浜エネルギーキャンプなどのフィールドワークに参加し、実際に現地を見て、色々なことを感じました。

学びの循環～“知りたい！”を掘り出す探究の輪～

石崎さん 中学3年の時の探究活動では、エネルギー問題を知るためのカードゲームをグループで制作しました。僕の学びの原点であり、きっかけとなったのが、中学生サミットでの色々な人たちとの対話でした。学びは「知る」と「考える」が循環することで深まります。核のごみ問題について、学びの循環を生み出すためには、基礎となる知識を受けとめ、疑問をもち、ともに体験を共有し、考え、語り合う場が必要であると考えています。「核のごみ問題」という現在、そして未来の問題について学び、一緒に考え、問い続ける探究の輪をこれからも広げていきたいです。

岩崎校長 高校に入学してからは、どんな探究活動をしているのですか？

石崎さん 高校では「核のごみ問題」に関するアンケート調査を実施しました。そのアンケート調査をもとに、9月の日本原子力学会で学会発表を行う予定です。





西島 賢太朗さん

ロボット・プログラミングから広がる可能性

ロボット・プログラミングとの出会い

西島さん 中学生の頃からロボットづくりやプログラミングに取り組み、自分で作ったロボットが思いどおりに動くというのが、めちゃくちゃ楽しくて夢中になりました。中学3年から高校1年にかけてはチームのソフトウェア開発や制御を担当し、ロボカップジュニアという大会で救助ロボットのプログラミングを担当し、全国大会で優勝。世界大会では6位になりました。

AIアプリ開発への挑戦

西島さん ロボット制作の次に、AIを活用したアプリを開発しました。データをAIが解析し、2次元マップで可視化するシステムを発案し、AI情報管理・探索システム『InfoNode』を開発しました。開発途中で、一人で進めるより誰かと共同でやった方が早いと思い、SNSで大阪の高校生に声をかけて、一緒に開発を進めることになりました。そして、アプリ甲子園に出場し、AI開発部門で準優勝をしました。その後も、学校内の有志のグループでメディアアートの活動に参加して、ソフトウェアを担当しました。

人の役に立つものを作りたい

西島さん これまでに多くのプロジェクトを経験したことで、「自分の作りたいものを作る」から「本当に人の役に立つものを作りたい」に、自分の中で大きく変わりました。現実社会で通用するものを作るためには、感覚的な開発だけでは足りないと感じ、体系的に学ぶために数学などを勉強し、「土台作り」ができたかと考えています。

森園副校長 救助ロボットということは、レスキュー部門ですかね。具体的には、どのようなことをするロボットでしょうか？

西島さん コースが迷路みたいになっていて、坂を上ったり、障害物をこえて、被災者を発見して救助するといった感じのロボットです。

保木副校長 先ほど、人の役に立つものを作るためには体系的な学びや知識が必要だと気付いたってことでしたが、知識以外で他に必要だなと思うことはありますか？

西島さん そうですね。やっぱり、人との関わりですかね。自分が開発したものを社会に広げていくのにも、人と話すということは大事だと気づきました。でもやっぱり一番大きかったのは、知識が不足しているということですね。

岩崎校長 学ぶ目的がはっきりしたことで、勉強への向き合い方も変わりましたか？

西島さん そうですね。もともと一人で勉強するのは好きだったんですけど、優先度が上がりましたね。

岩崎校長 石崎さんが探究している核のごみ問題にも関わることだけど、福島原発の廃炉作業をどうやって効率的に進めるかにおいて、AIやロボットの技術が必要になってきますよね。西島さんと石崎さんとチーム組んだらいいんじゃない？ぜひ、チーム組んでください！（笑）



田中 花奈さん

「文武両道」学習への努力と挑戦

バントワリングとの出会いと学習との両立

田中さん 中学1年生からバントワリング部で活動しています。初心者でしたが、練習を重ねる中で成長する喜びを感じています。定期テストでは平均88点以上、学力推移調査で偏差値60以上を目標に計画的に勉強しています。高校ではグローバルコースかフロンティアコースに入りたいと思っています。

英語への挑戦

田中さん 中学3年では海外研修があるので、オンライン英会話で英語力を磨いています。オンライン英会話では、Zoomでフィリピンの人と英語で対話することで、少し訛った英語や癖のある英語にも耐性をつけられるように頑張っています。

将来の夢

田中さん 最近は、医療系にも少し興味があって、将来は医療系や薬学系に進みたいなって思っています。

岩崎校長 英語は、何か資格は持っているんですか？

田中さん 英検準2級を持っています。海外研修に行くまでに英検2級を取得したいので、夏休み中に英語の勉強を頑張ります。

岩崎校長 英会話を習おうと思ったきっかけは何ですか？

田中さん 中学1年のときに、EC（エキスパートカリキュラム）クラスに入りましたが、ネイティブの先生と話すときにあまり聞き取れなくて、読む英語だけではダメだなって気づき

ました。

保木副校長 いわゆる学生の本分をきちんとやっていて素晴らしいですね。そんな風に、勉強もしっかりやろうと思う理由は何ですか？

田中さん 幼稚園のときから公文をやっていて、ずっとやってきたからこそ辞めたくない、勉強にも力を入れたいなと思っています。小さい頃から公文で学習してきたことが、今も力になっています。



20周年記念座談会

「今を生きる立守生、輝く未来へ」



菅 ひなたさん バトントワリングを通じた挑戦

バトントワリングとの出会い

菅さん 学校の部活動とクラブチームの両方でバトントワリングに取り組んでいます。母が立命館大学のバトン部で活動していたことがきっかけで小学1年生から始めました。小学校3年生で全国1位となり、その後も4・5・6年生で全国大会優勝を重ねました。今年は世界大会の選考会に挑戦しました。その結果、控え選手として、夏休みにフランスで開催される世界大会に参加します。

ソロ競技への挑戦

菅さん ソロでは技術を競うことが多いので、難しい技に挑戦しながらミスをしないことが大切です。量と質の両方を意識して練習しています。

保木副校長 団体とソロ、それぞれの面白さってどうところなんですか？

菅さん 団体のときは、みんなで合わせるために話し合ったり、練習でハードな課題を課された時でも、仲間と励まし合いながら一緒に頑張るのが楽しいです。一方、ソロは孤独ですが、自分自身と向き合いながら黙々と練習できるところが好きです。

将来の夢

岩崎校長 将来の夢を教えてください。

菅さん イベントやショーで演技をしたり、クラブチームで指導できる先生になりたいです。

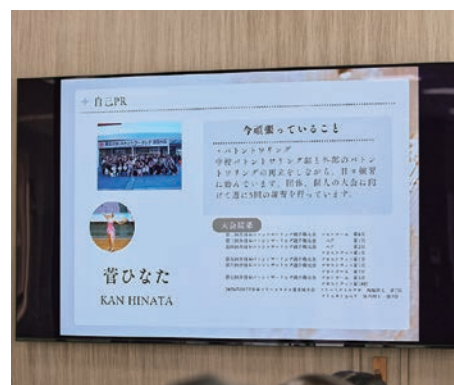
保木副校長 菅さんも大島さんも、普段は穏やかな印象の

お二人ですが、試合になると気持ちのスイッチが入ったりするんですか？

大島さん 入りますね。スタート時のポジション争いでは、女子選手も獣のように叫んで自分の権利を主張します。

(笑) 最後までひるまない攻めの姿勢が重要なので、攻める気持ちで臨んでいます。

菅さん 私も大会では緊張しますが、本番になると集中します。ソロのときは、団体のときよりも技の難易度が高いので、技に対する緊張感があります。



Theme 02

立守の魅力

岩崎校長 みなさん、立命館守山に入学してみて、実際どうですか？

西島さん 思っていた以上に良かったです。生徒と先生が信頼し合っている感じで、自由なところがめっちゃいいなと思っています。

保木副校長 田中さんは中学から本校に入学してきたけど、どうですか？

田中さん 勉強ばかりという感じではなくて、自由なところは自由で、生徒主体の文化祭や自分のやりたいことに挑戦できるところがいいなと思っています。あと、先生と生徒の距離が良い意味で近くて、先生に質問もしやすいです。

岩崎校長 みなさん、良い話ばかりですね(笑) あえて、ここは直した方がいいとか、ここを変えればもっと良くなるみたいなことはありますか？

西島さん 校長先生ともっと話したいです。教室にも来てほしいです。(一同笑い)

岩崎校長 なるほど！大事なことです。また機会があれば、ぜひお話ししましょう！

保木副校長 皆さんが思う本校の魅力って何でしょうか？

生徒一同 自由！

菅さん 食堂のメニューが豊富！チーズ牛丼！(笑)

田中さん 海外研修！

森園副校長 『自由』には色々な意味があると思いますが、どのような意味でしょうか？

西島さん あたたくて、柔らかい。のびのびと過ごせて自分らしく成長できるところだと思います。

大島さん 自分のやりたいことに挑戦できる自由です。探究活動や競技活動にも思い切り取り組みます。

岩崎校長 大島さんが、オリンピックで金メダルを獲ったときには、ぜひ本校に来てもらって全校集会で祝福しましょう！



20周年記念座談会

「今を生きる立守生、輝く未来へ」

Theme 03

校長先生たちへ質問！

西島さん 校長先生って、普段はどんな仕事をされているんですか？

岩崎校長 学校運営だけでなく、生徒が挑戦できる環境づくりや大学・企業との連携など、学校全体をより良くするための仕事をしています。例えば、学校にダンス部はないですが、ダンススクールと提携して『立守ダンスコース』を作り、大会に出場できるようにするといった、生徒の活躍の場を広げる企画も進めています。先生方や生徒会、保護者との対話を大切にしながら学校づくりを進めています。

大島さん 先生方が学生時代に挑戦して良かったことは何ですか？

保木副校長 中学の生徒会活動ですね。中学2年で立候補して落ちて、中学3年で生徒会長になりました。みんなのために考えたり人前で話したりしたこと、そして失敗したこと、もやり切ったことも、今の仕事の支えになっています。

森園副校長 私は大分県の田舎の公立校出身で、何かに挑戦できる風土が全くなかったです。自分が挑戦できなかったからこそ、今の生徒たちが気軽に挑戦できる学校風土を作りたいと思っています。

岩崎校長 私は高校時代は受験勉強しかしていませんでした。だから、スポーツや探究に打ち込んでいるみなさんがすごい輝いて見えます。それができるのが立守の良さだと思いますし、学生時代に自分ができなかったことを今みなさんがやっているのを見て、立守の教師になって良かったなと日々感じています。



Theme 04

10年後の未来とこれからの立守

岩崎校長 最後に、10年後の自分と、これからの立守にどうなってほしいかを教えてください。

大島さん 10年後はオリンピックで金メダルを取ったあとだと思うので、マイナー競技であるウィンドサーフィンをもっと世の中に普及させてたいです。立守には、自由な校風と、他人をリスペクトする心をこれからも大事にしたいです。

西島さん 10年後も人生を楽しみ続けてたいです。学校も今のようなのびのびした雰囲気であってほしいです。

石崎さん 10年後は、26歳なので学校の先生になって、ご縁があれば立守に戻ってきたいです。10年後の学校は、生徒が自分たちで学んでいけるような活気あふれる環境であってほしいです。

田中さん まだ明確な将来の夢は決まっていませんが、自分のやりたいことができていて自分であってほしいです。

立守は、すごく自由で自分のやりたいことができる学校なので、10年後も一人一人が輝けるもっといい学校になってほしいです。

菅さん 10年後もバトンを続けて、世界大会に挑戦し続ける選手でありたいです。この学校は自分のやりたいことに自由に挑戦できるので、もっと楽しめる場所になってほしいです。

岩崎校長 みなさん、素晴らしいお話をありがとう。これからも一緒に良い学校にしていきましょう！



創ること、挑むこと —創成期の学び舎が育んだ力—

Akiho Terasaka

寺坂 明穂（2009年度卒）

立命館大学政策科学部卒業

京都大学公共政策大学院卒業

米国タフツ大学フレッチャースクール卒業

現在 経済産業省勤務



私が本校で過ごした三年間は、現在の自分を形づくる確かな基盤です。在学中は片道一時間半をかけて通学し、授業、学校行事、部活動に追われる日々を送りました。当時はただ目の前に全力を尽くすことで精一杯でしたが、いま振り返れば、その積み重ねが自分の価値観と行動原理を鍛えていたのだと実感しています。

とりわけ鮮烈に記憶に残るのが、曽根先生のご指導の下で打ち込んだ吹奏楽部での活動です。現在の輝かしい成果を見るたび、OGとして、誇らしさが込み上げます。私たち二期生は創部間もない世代であり、練習方法も伝統も実績もありませんでした。だからこそ、何を目指し、どう練習し、定期演奏会をいかに実現するか、すべてを自分たちで決める必要がありました。部員の意識は様々であり、議論はしばしば衝突しましたが、それでも対話を重ね、試行錯誤を繰り返す中で、協働の本質と他者の視点に立つ思考を身体で学びました。この経験は単なる部活動にとどまらず、「前例のない状況で価値を創る」という、現在の自分の原点になっています。さらに、苦楽をともにした仲間たちは、卒業後それぞれ異なる道を歩み、住む場所も違う今もなお、かけがえのない存在であり続けています。本校で築いたつながりは、時を経ても色あせることのない、大きな財産です。

そしてもう一つ、今も自分を動かし続けている言葉があります。担任の先生からいただいた「自分で自分の限界を決めない」です。日々の仕事の中でも、新しい仕事に取り組むべきか、会議の場で本質的な問を投げかけるべきか、など大小様々な挑戦の手前で足が止まりそうになるたび、この言葉が私の背を押してきました。当時は半ば感覚的に受け止めていましたが、社会に出た今、その意味は明確です。限界は多くの場合、外ではなく内にある、その自覚こそが一步を生むのだと実感しています。

卒業後は立命館大学、京都大学大学院へと進み、経済産業省に入省、現在で十一年目です。入省後には、エネルギー・環境政策や貿易投資促進などを担当し、米国の大学院で修士課程を修了する機会も得ました。現在は、政府が掲げるGX（グリーントランスフォーメーション）の国際的な連携や発信に携わっています。中東情勢の不安定さが増す中、経済成長、エネルギー安全保障、脱炭素の三立を同時に実現しようとするGXの考え方は、国際的にも現実解として受け止め

られつつあります。この分野では、高度な専門性に加え、課題を構造的に捉えた上で利害の異なる国内外の関係者と議論を交わし、合意へと導く力が不可欠です。実際の政策立案は、企業、業界団体、関係省庁など多様な主体の利害調整の連続であり、時に極めて困難な局面にも直面します。

こうした仕事に向き合うほど、本校での経験の価値を一層強く実感します。前例のない環境の中で道を切り開いた吹奏楽部での日々は、脱炭素を巡って各国の利害が複雑に交錯し、国際情勢が揺れ動く交渉の現場と重なります。例えば、脱炭素はエネルギー安全保障や経済成長との同時実現あってこそ、と主張する日本と、排出削減を強く求める国との間で、どのように現実的な落としどころを見だし、協力のあり方を模索するか。そこには単純な正解はなく、状況に応じた柔軟な発想と粘り強い対話が求められます。「自ら考え、行動する」姿勢は、こうした不確実な状況の中で判断を下し続けるための土台となっています。また、吹奏楽部で目標を共有しながら役割を分担し、時に意見をぶつけ合いながら一つの形をつくり上げた経験は、企業や各国政府、国際機関といった多様な主体との調整において大きな支えとなっています。異なる立場や価値観を持つ相手の意図を汲み取り、共通の着地点を探る、その過程において、本校で培った協働の力が、今も確かに生きていて感じています。

これからの社会は、エネルギーの安全保障、地政学的リスクの高まり、さらにはAIを含むデジタル技術の急速な進展など、相互に影響し合う複雑かつ不確実な課題に直面し続けます。だからこそ、学び続ける姿勢と、異なる価値観と協働する力がより重要になります。本校で培ったものを礎に、自ら限界を設けず挑戦し続けることで、社会に価値を還元していきたいと考えています。

最後に、本校で出会った先生方や仲間たちへの感謝の気持ちは尽きることがありません。当時ご指導いただいた先生方はいずれも、新しい立命館守山をともに創り上げていくという強い志にあふれておられ、その熱意に日々触れることができたことは、私にとって大きな財産です。そのような環境の中で学ぶ機会に恵まれたことに、心より感謝申し上げます。次の20年もこの学び舎が、多くの生徒の可能性をひらき、未来へとつなぐ場であり続けることを、心から願っております。

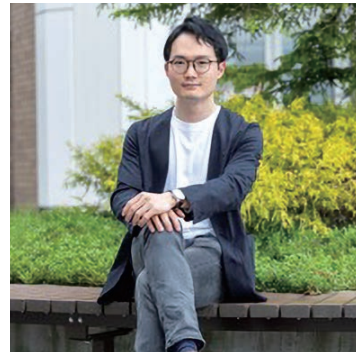
自らを投企する原点としての 最も自由で最も清新な学校

Satoshi Takemoto

竹本 智志（2015年度卒）

ロンドン大学UCL卒業

東京大学大学院 工学系研究科 先端学際工学専攻 博士後期課程 在学



人が成長するように、学校もまた時代とともに変化を遂げていきます。私が在学していた頃に比べ、現在の立命館守山中学校・高等学校はコースも多様化し、校舎に集う教員や生徒も大きく入れ替わりました。しかし、この学校には通底する独自の空気が保たれているように感じます。創立20周年という節目に際し、私のこれまでの歩みを振り返りながら、その精神について思案してみたいと思います。

現在、私は出版社の運営を行う傍ら、伝統芸能である琵琶の修練と研究、そして古典芸能と現代のテクノロジーを融合させた作品の制作・展示など、分野を横断した活動を続けています。一見すると脈絡のない遍歴に見えるかもしれませんが、私にとってはそれぞれが枝葉のように相互に結びついており、その原点は立命館守山での6年間にありました。

在学当時、私が所属していたFSC（フロンティアサイエンスコース）では、先生方は受験対策を中心に熱心な指導をしてくださいました。しかし、机に向かう勉強が苦手であった私は、高校2年の頃から自ら設定したプロジェクトに没頭するようになります。今でこそ「探究学習」という言葉が定着していますが、当時はまだ手探りの時代でした。私は「衛星設計コンテスト」への挑戦を機に、航空宇宙技術という未知の領域に向き合いました。

中高生向けの情報がほとんどない中、具体的なミッション構成の考案や物理シミュレーション、技術提案までを自ら行うことは高い壁でした。非常にカロリーの高い学習でしたが、だからこそ「知識を得るためのやり方」すなわち「方法」の重要性とそれを自ら開拓する労を知る、実り多い2年間となりました。

この「方法」に触れる経験は、卒業後の進路の決定的な指針となりました。渡英し進学したロンドン大学UCLの犯罪科学部では、古典的な「犯罪学」に定量的な方法論を導入し、新たな学問分野が成熟していく初期の過程を目の当たりにしました。教員陣の背景も多彩な環境で体感したのは、還元主義の剃刀を伴う方法論の端正な美しさと、異なる分野の手法を貪欲に組み合わせる新たな視座を確立しようとする野心でした。

その後、コロナ禍を機に帰国し、放送大学大学院の人文プログラムへ進学。科学・工学的なアプローチとは対照的に、歴史の中の細部からナラティブを丁寧に編み上げる人文学の方法を学びました。同時に、学生時代に立ち上げた出版社の本格的な運営にも着手し、人文学にとどまらず多種多様な分野

の書籍を世に送り出しました。この編集者としての活動のなかで、ロンドン時代の友人アーティストのサポートをきっかけに、私自身の関心は「美の方法（論）」へと向かっていきました。

英国留学中、現地の人々が自国の伝統文化に深い素養を持つことに触れ、自身の土壌の乏しさにむず痒さを覚えた記憶が、帰国後に「琵琶」の門を叩く動機となりました。科学、人文と歩みを進めてきた私にとって、歴史的な文脈と身体性を伴う伝統芸能の習得は、これまで足りなかった「体系的な美の方法」を補完する決定的なピースとなったのです。

現在は、東京大学大学院工学系研究科の博士課程に在籍し、人文学的手法で文献研究を進めると同時に、琵琶を巡る歴史的なイメージがいかにして人々に喚起され、美へと結びつくのかを模索しています。その過程として、コンピューター制御を用いた先端的なアート作品の制作という形での具現化も試みています。

こうして歩みを俯瞰したとき、私の中ではっきりと息づいているのは、「何か確かなことを成すためには、方法がすべてである」という確信です。方法（論）とは知識を生み出す道具であり、また社会や自身を確かに知り、自己から世界に向けて一本の矢印を引くための強固な基礎となるものです。

私がその「方法の探究」という長い旅路に出る最初の一步を支えてくれたのが、他ならぬ立命館守山でした。国内外のアカデミックな環境に触れる機会がごく自然に用意されており、それらは私にとって世界への扉を開く原体験となりました。

ここ数年、私は編集者として立命館守山に関する書籍の制作に携わる機会に恵まれました。客観的な立場で現在の母校に触れる中、私が在学中に手探りで行っていたようなプロジェクト型の探究学習や、デジタル技術を活用した学習基盤が、現在は学校全体のリソースとして見事に整備され、十二分に活かされている様子を目の当たりにしてきました。在校生の皆さんには、ぜひこの恵まれた環境を存分に活用し、自らのポテンシャルをどこまでも伸ばしていったほしいと強く願っています。

生徒が自ら問いを立て、それを解き明かすための方法を必死に模索するとき、温かく見守り並走してくれる「自由の土壌」こそが、立命館守山が目指す風土の核心ではないでしょうか。創立20周年の節目を迎え、母校がこれからも次代を担う若者たちにとって豊かな探究の原点であり続けることを願っています。

ドアの向こうの空

Kazuho Yamaguchi

山口 順帆 (2017年度卒)

桜美林大学ビジネスマネジメント学群アビエーションマネジメント学類
フライトオペレーションコース 卒業
ANAウイングス株式会社 運航部B737乗員室 B737副操縦士



立命館守山中学・高等学校10期生の山口 順帆です。

中高に6年間在学し、桜美林大学フライトオペレーションコースに進学、現在はANAウイングス株式会社にボーイング737-800型機の副操縦士をしています。

北海道・稚内から沖縄・石垣まで、ANA国内線が就航する約50の空港へ、大切なお客様と貨物を安全にお運びしています。



いわゆる「パイロット」ですが、私は運動神経が良いわけでもなく、学生時代の成績も決して良い方ではありませんでした。むしろ悪い方でした。

ですが運が良く、人にはとても恵まれました。

友人、先生、家族に支えられ、信じてくれたからこそ今日も1便1便安全運航できています。

立守では先生方に大変お世話になり、学力だけでなく、人として大切なこと、多角的な視点や生徒自身の主体的な行動の大切さ、人との関わり合いを学びました。今も空の上で大切にしています。

これからも立守が、卒業生・在校生・教職員・保護者の皆様にとって誇りある学校であり続けることを願っております。

高校時代の愛読書は残念ながら単語帳、参考書ではなく、漫画「宇宙兄弟」でした。(残念ながらは私自身です。とてもいい作品ですが、授業中は読まないでね!)

そんな人生の教科書とも言える作品の中から、私が今も大切にしている言葉を皆さんに紹介したいと思います。

『人の人生には、いくつかの“夢のドア”がある。人は…例えば「宇宙へ行く」みたいな大きな夢を持った時、目の前に現れたバカでかいドアに畏縮して、向こう側へ行くことを諦めちゃう。「開けられるわけがない」ってな。だがビビることはいんだよ。本当ははじめから、そんな“バカでかいドア”なんてものはない。小さなドアがいっぱいあるだけだ。』
(23巻222話)

高校時代にパイロットになりたいと決めた頃の私は、「飛行機を操縦する人」という漠然としたイメージしか持っていませんでした。大学での四年間で飛行機の基礎を教え込まれ、入社後にジェット機の飛ばし方、運航とは?安全とは?など多くの事を今日も学び続けています。

その過程には言葉通りの小さなドアが並び続けていました。大学時代アメリカでの飛行訓練に励む中、試験に上手くいかなかった時、同じ部屋の仲間たちとの訓練の進捗に差が出た時、コロナ禍で航空業界が下火になり会社への就職がなかなか決まらなかった時、副操縦士としてデビューする直前に夢のきっかけであった幼馴染の兄が亡くなった時、着陸がうまくいった時、天気を解析しきれず安全性を優先した時、書ききれないたくさんの方の失敗や後悔、少しの成功や発見のドアを泥臭く手探りで家族や仲間と開け続けてきました。気付いたら夢を叶えていました。皆さんがこれからの人生で多くのドアを開き、時にバカでかい夢にも果敢に挑戦し、それを叶えていかれることを願っています。上空41,000フィートから、少し先を生きる卒業生の一人として、心から応援しています。



編集後記

2006年4月、立命館守山高校の開校と同時に、私は新卒で本校に赴任し、教員として、また社会人としての第一歩を踏み出しました。以来、私は立命館守山と共に20年を歩んできました。本校の創立20周年、そして私自身の教員生活20周年である大きな節目に、記念誌の編集長という大役を担えたことを大変光栄に思います。

記念誌の制作は、まさに「真っ白なキャンパスにどんな絵を描こうか」という胸躍る高揚感から始まりました。一から構成やストーリーを練りあげ、様々な方々に原稿を依頼し、想いが少しずつ誌面として形を成していく過程は、編集長として創作の喜びに満ちていました。

本誌の制作にあたり、特にこだわった点が三つあります。第一に、これまでの20年間の歩みを確かな「記録」として未来に残すこと。第二に、誰もが手に取りやすい内容とデザインにすること。そして第三に、教職員・在校生・卒業生など、本校に関わってこられた皆様をバランスよく織り込むことです。過去・現在・未来をつなぐ人々の温かい想いが凝縮された、まさに「立守」の総力結集と言える一冊になりました。

なかでも一番思い入れ深いのが、20周年記念座談会「今を生きる立守生、輝く未来へ」です。多様な分野で果敢に挑戦する5名の生徒たちと、校長・副校長先生方3名が語り合ったあの時間は、本校の「現在」の輝きと「未来」への可能性を象徴する、誌面のハイライトとなりました。

ご多忙の中、貴重な原稿や写真をお寄せくださった皆様、制作を支えてくださった関係者の皆様、そして私の想いを汲み取り、共に試行錯誤を重ねてくださった株式会社ディライツの清水衛社長に心より御礼申し上げます。

この記念誌が、本校を愛するすべての人々にとって大切な思い出を振り返る架け橋となり、次の未来へ向かって羽ばたく「立守」の新たな道しるべとなることを切に願っております。20年の歩みと誇りが、未来の「立守」を照らす光となることを信じて、編集後記の結びとさせていただきます。

20周年記念誌 編集長
奥 梨名

立命館守山中学校・高等学校
あすなろ ―立命館守山20年の歩み―

発行日 2026年10月8日

発行 立命館守山中学校・高等学校
〒524-8577 滋賀県守山市三宅町250番地
TEL: 077-582-8000 FAX: 077-582-8038

制作 株式会社ディライツ

ホームページ <https://www.mrc.ritsumei.ac.jp>

